

京都府埋蔵文化財情報

第147号

令和5年度京都府内の発掘調査とその周辺	肥後弘幸	1
研究ノート 福知山市水内古墳の埴輪	北山大熙	9
軒平瓦の瓦当面に生じるバリの痕跡について	川嶋泰輔	19
18世紀後半から出現する底部に刺突痕を有する陽刻表現の土人形について	加藤雄太	25
共同研究 瀬戸内技法の流入～石器製作技術の不易流行～	面 将道	33
デジタルカメラ写真測量等を使用した発掘現場の遠隔図化支援に関する実証的研究	面 将道	39
資料紹介 京丹後市平遺跡の古墳時代調査成果の整理	菅 博絵	43
京都府文化財保護課の発足	磯野浩光	49
令和5年度発掘調査略報		51
18. 平遺跡第7次	19. カンジョガキ遺跡第4次	
20. 小中田古墳群第3次	21. 女布遺跡第8次	
22. 千代川遺跡第35次K・L地区	23. 千代川遺跡第35次A地区	
24. 拝田14号墳	25. 法貴北古墳群第3次・法貴古墳群第2次	
26. 長岡京跡右京第1282次・井ノ内遺跡		
27. 長岡京跡右京第1286次・井ノ内遺跡		
28. 木津川河床遺跡第42次	29. 栢ノ木遺跡第17次	
長岡京跡調査だより・143		68
現地公開・普及啓発事業（令和6年1月～令和6年7月）		70
センターの動向（令和6年1月～令和6年7月）		73

2024年9月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京丹後市カンジョガキ遺跡



D 地区 3号横穴墓 (東から)

舞鶴市女布遺跡



土壙墓出土の白磁碗と白磁皿

令和5年度京都府内の発掘調査とその周辺

肥後弘幸

1. はじめに

令和5年度に当調査研究センターが実施した発掘調査は、契約数で19件、遺跡数で30遺跡(地点)を数える。このうち、亀岡中部地区国営緊急農地再編整備事業(7遺跡)と京都縦貫自動車道延伸部にあたる国道312号大宮峰山道路の関連事業(6遺跡)が半数を占める。

本稿では、令和5年度に府内で行われた発掘調査の成果などについて、時代ごとに概観する。

2. 各時代の調査成果

(1)旧石器・縄文時代

福知山市夜久野町稚児野遺跡第5次調査は、第3次調査と第4次調査で見つかったブロック群の中間地あたり、空閑地的様相を示し、石器の出土は少なかった(当調査研究センター)。

縄文時代草創期に属する有舌尖頭器が、京丹後市佐屋利遺跡で2点、亀岡市千代川遺跡(35次C地区)で1点出土している(当調査研究センター)。

京丹後市平遺跡第7次調査では、谷地形に堆積した縄文時代前期から中世に至る土石流堆積などの遺物包含層を検出した。晩期の篠原式土器が比較的多く含まれていた(当調査研究センター)。

(2)弥生時代

令和4年度に2基の古墳を調査した立山古墳群の隣の丘陵上にある京丹後市弥栄町フキ岡遺跡の小規模調査では、弥生時代中期の方形竪穴建物などが検出され、令和6年度に面的な調査を実施する予定である(当調査研究センター)。

京都市南区中久世遺跡では、弥生時代中期中葉から後葉にかけての円形竪穴建物5棟と方形竪穴建物1棟及び土坑群などが検出された。土坑群は、長方形に近い不整形な大小のものからなり、土器のほか炭・灰や焼土片が含まれていた。また、同一面からは後期の方形竪穴建物4棟も検出されている。弥生時代の集落の中心近くにあたると思われ、多量の弥生土器が出土した(京都市埋蔵文化財研究所)。

京都市南区東土川遺跡では、弥生時代中期後葉の竪穴建物4棟が検出された。平面形が各々異なり、直径7.8m以上の円形竪穴建物、直径4.0mの円形竪穴建物、東西5m・南北8mの長方形竪穴建物、南北5.7m・東西4.4mの方形竪穴建物である。なお、中期中葉から後葉にかけての土坑も多数見つかっている(民間調査機関)。

京丹後市大宮町松田古墳群では、B支群15～17号墳の調査を実施し、弥生時代後期に営まれた台状墓であることが明らかになった。令和6年度に継続して調査している(当調査研究センター)。

与謝野町幾地城跡の調査では、丘陵先端部から弥生時代後期の台状墓(ソブ谷西墳墓)が検出さ

れた。木棺墓3基を含む7基の埋葬施設が営まれ、墓壙内破碎土器供献された木棺墓からは鉄刀、鉈などの鉄製品が出土した(当調査研究センター)。

(3)古墳時代

京丹後市久美浜町須田平野古墳は、双竜金銅装環頭大刀が出土した湯舟坂2号墳と同じ谷にある横穴式石室を内部主体とする古墳で、京丹後市教育委員会と京都府立大学考古学研究室によって調査が行われた。令和4年度に墳丘測量と横穴式石室の実測を実施し、5年度は、墳丘裾部や周辺にトレンチ4か所を設置して調査が実施された。結果、約17mの円墳であることが明らかになり、周辺のトレンチからは、6世紀後半から7世紀の須恵器大甕や高杯などが数多く出土した。

京丹後市大宮町小中田古墳群の調査では、中世の堀切状遺構の中から古墳時代後期の円筒埴輪片が出土し、丹後地域では数少ない埴輪をもつ後期古墳の存在が明らかになった(当調査研究センター)。

JR福知山駅南西側の丘陵上、広峯古墳群と向野古墳群の間に位置する福知山市川上南古墳群で調査が実施された。5号墳は6世紀前半に営まれた直径約17m・高さ約3mの円墳で、長さ4.4m・幅1.1mの大形の組合せ式木棺を埋葬施設としていた。木棺の小口板の押さえに石混じりの粘土を用いており、棺内から鉄刀、刀子、ガラス玉が、棺上から土師器高杯・壺、須恵器提瓶、刀子、鉄鏃が、棺外から須恵器蓋杯4セット、高杯が出土した。19号墳は長辺約17m、短辺約10m、高さ0.5~1.5mの方墳で、5号墳と同じ構造の長さ3.3mの組合せ式木棺を埋葬施設としてお



亀岡市法貴56号墳の墳丘と石室内の様子

り、棺内からの出土遺物は無く、棺上から須恵器杯身・杯蓋と土師器壺及び鉄鏃が出土した(福知山市教育委員会)。

亀岡市千代川遺跡第35次調査A地区では、古墳時代前期に埋没した流路内から、古式土師器と堰板や槽などの木製品が出土した。D地区の調査では前期の竪穴建物などを検出した(当調査研究センター)。

亀岡市拝田14号墳は、前年度の京都府教育委員会の調査で、埴輪をもつ前期末から中期初頭の方墳もしくは前方後方墳の可能性が指摘された。第2次調査では、葦石と埴輪列及び木棺痕跡を確認した。墳丘の直径30m、周溝を含めた直径約40mの二段築成の円墳で、埋葬施設は割竹形木棺が用いられている可能性が高い。(当調査研究センター)。

亀岡市法貴古墳群第2次調査A地区では、5基の円墳を対象に調査を実施した。56号墳は



整備された芝古墳

群中最高所に位置する直径14mの6世紀中頃の円墳で、墳丘内列石をもつ。埋葬施設は、方形プランの玄室をもつ両袖の横穴式石室である。56号墳の西10mからは、墳丘を失った7世紀の無袖の横穴式石室S X19が見つかった。(当調査研究センター)

京都市右京区周山古墳群^{しゅうざん}は11基の方墳から構成される古墳群である。龍谷大学文学部考古学実習室によって、2～4号墳の測量調査が実施されてきたが、令和5年度は墳丘裾部での範囲確認を目的とした発掘調査が実施された。2号墳から中期後半の須恵器壺・甕が、4号墳から中期末(TK23)の杯蓋が出土した。

名称変更および追加指定(平成28年3月1日)されて7年を経過した史跡乙訓古墳群^{おとくに}では、寺戸大塚古墳^{てらどおおつか}、井ノ内車塚古墳^{いのうちくるまづか}、芝古墳^{しば}で整備に向けた調査や整備工事が行われた。

向日市寺戸大塚古墳(全長約98m)では、第14次調査が東くびれ部で実施された。調査地点は、過去の土取りにより墳丘断面が露出していた場所で、後円部第一段平坦面から墳頂平坦面までの墳丘盛土と葺石等の外表施設の構築状況が明らかにされた(向日市埋蔵文化財センター)。

長岡京市井ノ内車塚古墳(前方後円墳、全長46m)では、墳丘の範囲などを解明することを目的に、第7次調査が前方部南側で実施された。その結果、前方部前面で幅3m前後の溝(周溝)を確認した。溝内に地山を掘り残した幅1.5mほどの陸橋が存在することが明らかになった。なお、溝内から、青磁椀2点を副葬する中世墓も検出された(長岡京市埋蔵文化財センター)。

京都市芝古墳(芝1号墳)は、国史跡指定(平成30年追加指定)に先立ち平成25・26年に内容確認調査が実施され、6世紀前葉の横穴式石室を埋葬施設とする墳丘長33mの前方後円墳であることが明らかにされた。令和4・5年度に整備事業が行われ、令和6年3月に史跡公園として公開された(京都市文化財保護課)。

整備計画作成のために平成28年度から調査が進められている史跡久津川車塚古墳^{くつかわくるまづか}では、城陽市



城陽市芝山V-2号墳 重層する埋葬施設
(オルソ画像による合成)

教育委員会が大阪市立大学、立命館大学の協力を得て発掘調査を継続している。令和5年度の調査は、後円部東側と東側造り出し想定位置で調査が実施された。後円部東側の中段斜面裾部、下段テラス、下段斜面、墳丘裾部が確認され、昨年度の成果と合わせて、後円部東側の墳丘各部の構造・規模が明らかになった。また、造り出し想定部では、造り出しは見つからず、平野部側のみ造り出しがある可能性が高くなった。

城陽市芝山遺跡・芝山古墳群第22次調査では、芝山古墳群の中では最大の直径27mの円墳(V-2号墳)を調査し、2基の木棺直葬の埋葬施設を墳丘のほぼ中央部で重なって検出した。初葬の埋葬施設1は、墳丘の中央の長さ4.9m、幅2.7m、深さ1.1mの墓壇内に組合せ式木棺を納めている。棺外および棺内に須恵器24点と土師器1点を供献し、棺内に刀、鏃及びガラス小玉を副葬していた。埋葬施設2は、埋葬施設1の墓壇上部を一部切り込んでいる。棺底のレベルは、埋葬施設1よりおよそ1m高い。墓壇

規模は調査面で、長さ3.5m、幅2.0m、深さ0.2mを測り、組合せ式木棺を納めていた。棺外および棺内から須恵器16点、耳環2点、刀子、ガラス小玉などが出土した。2つの埋葬施設の須恵器に型式差はなく、6世紀中頃(TK10)に位置づけられる(当調査研究センター)。

木津川市塚穴古墳は、巨石を用いて造られた両袖式の横穴式石室を内部主体とする方墳で、1980年代に造成された新興住宅地内の公園に残されている。令和4・5年度に同志社大学考古学研究室が5次にわたる調査を実施した。墳丘の北側と東側から幅約5m・深さ0.8mの溝を確認し、南北約20m・東西約23mの方墳であることが判明した。出土土器から7世紀前半(TK217)と考えられる。石室は、全長4.85m、玄室長3.5m、玄室幅2.3m、高さ2.5m、羨道長1.35mを測る。

(4)古代

京丹後市大宮町カンジョガキ遺跡では、令和4年度の調査で古墳時代後期の竪穴建物や掘立柱建物を検出して谷部での集落の様相を明らかにしたが、その周辺から飛鳥時代から奈良時代にかけて営まれた横穴墓5基を検出した。大宮町三坂、周積、大野には、左坂横穴、里ヶ谷横穴、有明横穴、大田ヶ鼻横穴、エノボ横穴、裾谷横穴と多数の横穴墓が知られている。この地域の横穴

墓は古墳時代後期に造墓活動が始まり、奈良時代まで続くのが特徴的である。今回の調査で、その分布域がさらに北側に広がった(当調査研究センター)。

平成28年度から範囲内容確認調査が続く宮津市安国寺遺跡^{あんこくじ}では、平安時代と思われる一辺1m近くの大形方形掘形から構成される南北3間以上(柱間7尺)・東西1間以上(柱間10尺)の掘立柱建物が検出された。



カンジョガキ遺跡D地区3号横穴墓

長岡京跡の調査は、向日市埋蔵文化財センター、長岡京市埋蔵文化財センター、京都市埋蔵文化財研究所、京都府教育委員会、民間調査機関および当調査研究センターにより、宮内で4件(宮541～544次)、左京で21件(左京672～692次)、右京13件(右京1276～1288次)の計38件実施された。

宮内では、大極殿後殿の東側で、大極殿東面回廊の調査が行われた(宮542次)。礎石9か所が想定される場所で、7か所の礎石抜き取り穴が確認された。柱間は、南北(桁行)3.6m(12尺)・東西(梁間)2.4m(8尺)を測る。

左京672次調査では東一坊坊間東小路が検出された。小路の南半は洪水層に覆われていた。左京673次調査では、東二坊坊間東小路の東側溝が南北50mにわたって検出された。東側の左京五条二坊十四町の宅地は、50mに及ぶ11尺等間の東西柵列と一部検出した南北柵列により、4分割されて利用されていたようである。南西側の宅地からは南北2間・東西5間の主屋に南庇が付く掘立柱建物が検出された(以上長岡京市埋蔵文化財センター)。左京674次調査では、二条条間北小路の南北測溝が検出された。左京675次調査では、東一坊大路東側溝が検出され、土器・瓦類が出土した。左京676次調査では、長岡京期の掘立柱建物2棟、柵列2条、土坑5基などが検出された(以上向日市埋蔵文化財センター)。左京680次調査では、五条大路の南北両側溝が検出された(長岡京市埋蔵文化財センター)。左京678次調査では、東四坊坊間西小路西測溝が確認された(京都市南区、民間調査機関)。左京681次調査では、長岡京期の遺物を含む南北溝が検出された。東三坊坊間東小路西測溝の可能性もある(京都市伏見区、民間調査機関)。左京684次調査では、一条大路南側溝と東三坊坊間西小路西測溝が検出された。東三坊坊間西小路西測溝は、一条大路南側溝で止まり大路を渡らない。左京688次調査でも二条条間南小路北側溝が良好な状態で検出されている。左京691次調査では、左京二条三坊四町で1辺1m以上の柱掘形を持つ東西棟建物を検出された。掘形の底から礎板が出土した(以上向日市埋蔵文化財センター)。

右京第1278次調査では、西二坊坊間小路東側溝の可能性のある南北溝が検出された(長岡京市埋蔵文化財センター)。右京1273次調査地に係る立ち合い調査では、本調査で確認していた奈良

時代の整地層(礫敷き)の広がり確認された(大山崎町教育委員会)。右京1277次調査では、奈良時代の直線的な溝、六条条間南側溝に加えて弥生時代末期の方形周溝墓などが検出された。奈良時代の溝からは、乙訓寺の創建軒丸瓦と同型式の軒丸瓦が出土した。右京1287次調査では右京三条二坊九町の宅地内東西溝2条および溝に架かる橋脚が確認された(以上長岡京市埋蔵文化財センター)。

なお、長岡京北京極大路の1町ほど北側の中久世遺跡では奈良～平安時代前期頃の南北棟と東西棟の掘立柱建物が検出された(京都市埋蔵文化財研究所)。

史跡^{おおやまざきかわらかま}大山崎瓦窯跡(大山崎町)の範囲確認を目的に大山崎瓦窯跡C支群の北側で実施された山城国府跡^{やましろこくふ}第80次調査では、瓦窯跡の広がり確認できず、瓦窯跡はC支群を北端とする可能性が高まった(大山崎町教育委員会)。

平安宮中務省跡の調査(京都市上京区中務町)では、中務省の北面の溝と考えられる幅1.5mの溝が検出され、平安時代の瓦が多数出土した(京都市文化財保護課)。

京都市北区^{うんりんいん}雲林院跡の調査では、10世紀後半頃の土師器皿が土坑内から出土し、土坑に先行する東西溝の存在が明らかになった(京都市文化財保護課)。

平安京跡右京三条二坊十二町・御土居跡・西ノ京遺跡の調査では、御土居の土塁の下層から平安時代前期の西堀川小路の西側溝と西側路面及び西堀川が検出された(京都市埋蔵文化財研究所)。平安京跡左京二条二坊六・七町・二条城北遺跡の調査では、平安時代の井戸、溝、土坑、瓦溜まり、室町時代の井戸、江戸時代の所司代中屋敷に係る地下式の室、井戸、土坑などが検出された(京都市文化財保護課)。

長岡京市^{いのうち}井ノ内遺跡では、平安時代後期の井戸内に完形の瓦器碗・土師器皿などが投棄されて



いた。古墳時代の溝、飛鳥時代の竪穴建物なども検出した(当調査研究センター)。

遺跡^{よどみずたれおしもつちよう}淀水垂大下津町遺跡(京都市伏見区)の2年目の調査では、平安時代の流路から重圈文軒丸瓦と皇朝十二銭が出土した。前年度検出した室町期の堀からは、卒塔婆などが出土した。加えて、江戸時代、明治時代の水制遺構や石組の階段状遺構が検出された。江戸時代の石組遺構の下には、船材が再利用されていた(京都市埋蔵文化財研究所)。



井ノ内遺跡検出の井戸と遺物出土状況

国史跡^{くにききゅう}恭仁宮跡(木津川市加茂町)第105次調査で、山城国分寺東面築地の測溝が長さ25mにわたり検出され、その内側から総柱の東西2間・南北2間の建物が見つかった(京都府教育委員会)。

(5)中世

京丹後市佐屋利遺跡は丹後半島最大の河川であ



佐屋利遺跡の戦国期の堀(S D01)

る竹野川右岸の丘陵先端付近に立地する。令和4年度の調査では、中世前期の方形居館がみついている。その北西側250mで調査を実施したところ、幅8m以上、深さ約5m、長さ36m以上の大規模な堀(S D01)とこれに直交する幅約6m、深さ5mの堀(S D05)を検出した。堀S D01の埋土には戦国時代の土師器、須恵器、国産陶磁器、輸入陶磁器などが含まれており、人為的に埋められる直前の層からは、当時茶道具として千利休周辺で愛用された黒楽茶碗の破片が出土した。堅固な堀で囲まれた戦国時代の平地居館が、丹後守護職の一色氏が滅亡した16世紀末に廃絶する様子が明らかになった(当調査研究センター)。

宮津市丹後国分寺跡^{たんごこくぶんじ}の調査では、室町時代再建の金堂基壇の北西側から、東西4間(11.5m)・南北2間(5.8m)の礎石建物が検出された。北側を除く3方向は石組で囲まれており、東南隅と南西隅に階段が付く東西幅17.4mの建物基壇が復元できる。出土土器から室町時代の建物跡と考えられ、嘉暦元(1326)年に再建に取り掛かったと記録に残る再建国分寺に伴う遺構と考えられる。また、建物跡の北側からは、奈良・平安時代の瓦が大量に出土しており、今回の建物が再建される以前に、ほぼ同じ場所に古代丹後国分寺が存在した可能性が高くなった(京都府教育委員会)。

舞鶴市女布遺跡^{じょう}の調査では、白磁椀1点と白磁皿4点を副葬した中世墓を検出した(当調査研究センター)。

南丹市八木嶋遺跡^{やぎしま}では、平安時代末期から鎌倉時代の建物・溝などが検出され、土師器、黒色土器、瓦器および輸入陶磁器などが出土した(南丹市教育委員会)。

亀岡市千代川遺跡第35次調査A区では、鎌倉時代の掘立柱建物、素掘り井戸、石組井戸、土坑などを検出し、K・L区でも中世の掘立柱建物、井戸、流路などを検出し、土師器、黒色土器、

須恵器が出土した(当調査研究センター)。

亀岡市東部、本梅盆地に位置する井手遺跡^{いで}の第10次調査では、鎌倉時代後期の掘立柱建物や土坑などが検出され、令和3年度・4年度の成果とあわせて、11世紀末から13世紀末までの集落の変遷の様子が明らかになった(当調査研究センター)。

法住寺殿跡^{ほうじゅうじどの}・六波羅政庁跡^{ろくはら}・方広寺跡^{ほうこうじ}(京都市東山区)の調査では、鎌倉時代の井戸や江戸時代の柱列・土坑などの遺構が検出され、安土桃山時代の金箔瓦や江戸時代の鶴亀をあしらった香炉などが出土した(京都市埋蔵文化財研究所)。

令和3年度から内容確認調査が続く石見城跡^{いわみじょう}(京都市西京区)では、郭が築かれた高台の周縁部で調査が実施され、外堀や石塁が確認された(京都市文化財保護課)。

(6)近世

舞鶴市田辺城跡^{たなべ}の調査では、京極期に築かれた石垣の内側から、細川期の虎口入口部分と考えられる幅6mの通路とその西側に築かれた土塁及び土塁土留めが検出された。関ヶ原合戦の前哨戦を描いた田辺籠城図とも一致する遺構として関心を集めた。

聚楽第^{じゅらくだい}の西外堀推定地で行われた発掘調査では、推定されていた幅45mよりも狭い幅12m・深さ3mの堀状遺構が検出され、埋土から巴文を配した方形金箔瓦などが出土した。また、堀状遺構を避けてその両側には、聚楽土を採取した土取り穴が掘られていた(京都市文化財保護課)。

京の七口の1つ丹波口の北350mほどで行われた御土居跡^{おどい}の調査では、堀底から東西・南北方向に交差する畝状の高まりが検出された。城郭にみられる障子堀である。敵の進行を妨げる防御的効果を狙ったもので、お土居の防御機能を考える上で貴重な発見となった(京都市埋蔵文化財研究所)。

京都市伏見区の木幡山西麓で行われた伏見城跡^{しまづもちひさ}島津以久屋敷跡推定地での調査では、屋敷地内に西下りのひな壇造成が行われていることが確認された。各ひな壇では、小段や柱列などにより複数の郭が造成されていた。調査区北半では、ひな段を造成するにあたり、深さ5mの谷を埋める大規模な造成工事が行われていた(民間調査機関)。

京都市左京区大原の来迎院^{らいごういん}で、京都産業大学文化学部が明治期に荒廃した僧房の庭園跡について前年度の測量調査に続いて発掘調査を実施し、池と周りの石組、建物の礎石などが検出された。

3. おわりに

令和5年度に府内で行われた発掘調査等について、当調査研究センターの成果に加えて、現地説明会資料、年報、報告書など関係機関が公表している資料を手掛かりに概観してきた。京都市内や乙訓地域を除くと、市町主体の発掘調査は少なくなっている。それ以上に、現地説明会の実施される機会が、新型コロナウイルス蔓延前に比べると少ないように思える。一方、各大学での取り組みが増えてきたことは、喜ばしいことである。埋蔵文化財は、特定個人の財産ではなく、万民の文化財である。発掘調査から得られる情報を正確に把握し、地域の歴史を明らかにし、多くの人々に伝える努力を続けていきたい。(ひご・ひろゆき = 当調査研究センター調査課課長補佐)

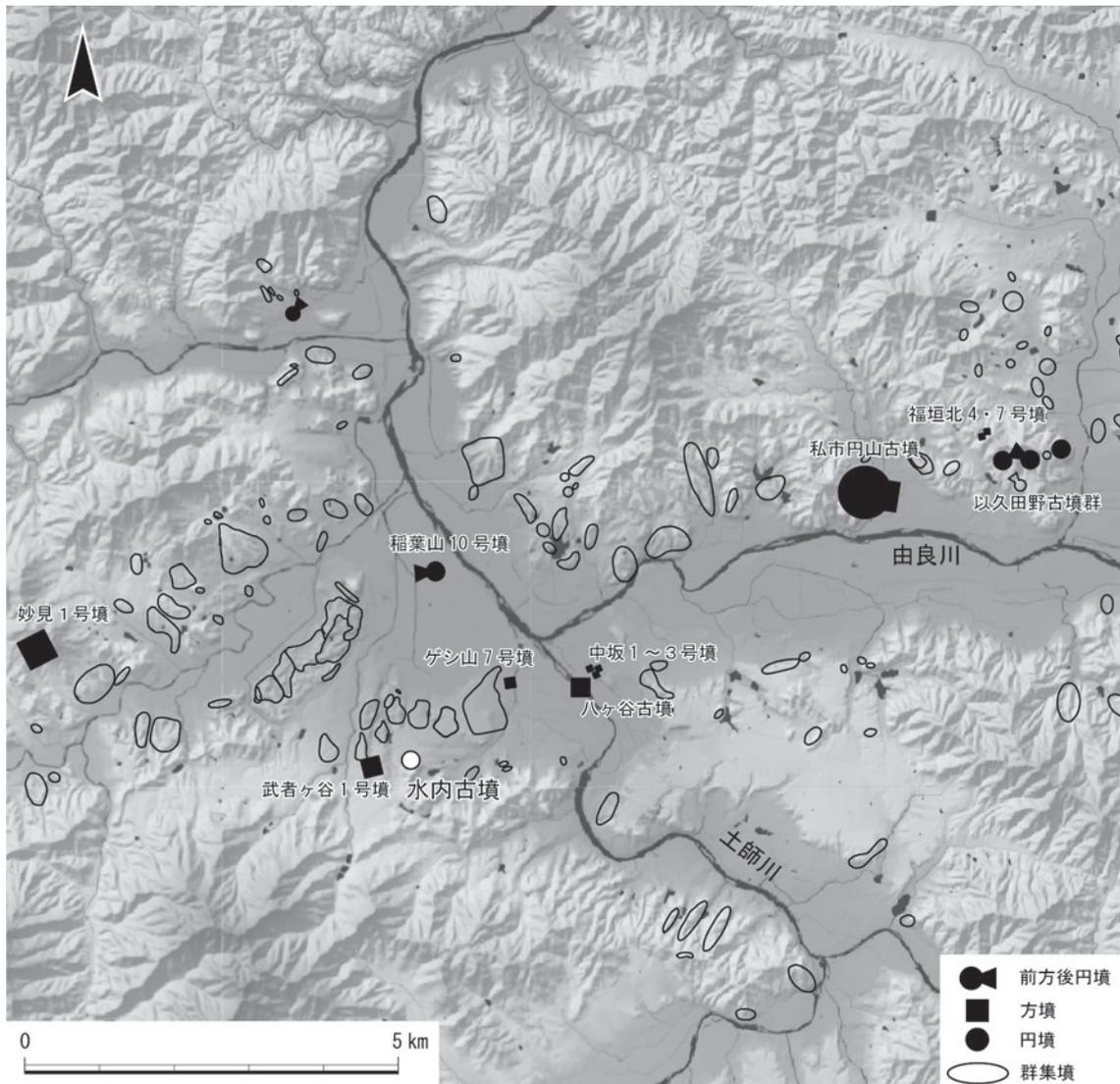
福知山市水内古墳の埴輪

北山大 熙

1. はじめに

水内古墳は、福知山市字堀に所在した古墳である。昭和35年に福知山商業高等学校（現：福知山成美高校）のグラウンド拡張・道路拡幅工事時に伴って発見された古墳である。発見時、すでに古墳は損壊されており、残念ながら墳形や規模等は一切不明である。水内古墳からは埴輪が出土しており、埴輪の特徴から古墳時代中期頃の古墳と考えられている。

これらの埴輪については、これまで詳細な検討がされていない状況であった。今回、福知山市の協力のもと、水内古墳の埴輪を実見する機会を得たため、埴輪資料を報告し、由良川中流域の埴輪生産の一端を概観することを目的とする。



第1図 由良川中流域の埴輪をもつ古墳

2. 由良川中流域の古墳時代

まずは水内古墳の位置する由良川流域の地理的特徴・古墳時代の様相を概観していく。由良川は京都府・滋賀県・福井県の府県境にある三国岳を源とし、福知山盆地で北流に転じて日本海に注いでいる。上・下流域には広い平野がなく、谷間が続き、中流域においては、東西に狭長な沖積平野が綾部市から福知山市にかけて広がっている。

由良川中流域には約2,000基の古墳が分布しており、特に後期の群集墳が丘陵上に立地している。弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、福知山市の豊富谷丘陵に展開する墳墓群や福知山市成山古墳群、福知山市宝蔵山古墳群などが築造され、弥生時代からの伝統的な墳墓群を形成していく。また、古墳時代前期には「景初四年」銘鏡が出土している福知山市広峯15号墳(前方後円墳：40m)を中心として広峯古墳群などの古墳が築造されていく。中期前葉には綾部市聖塚古墳(方墳：約45m)や綾部市菖蒲塚古墳(方墳：約24m)、中期後葉には福地山市妙見1号墳(方墳：約43m)など方墳が築造され続ける。また、中期中葉には丹波地域内でも卓越した規模をもち、武具類や農工具類、玉類などの豊富な副葬品をもつ綾部市私市円山古墳(円墳：70m)が造られるようになる。中期後葉には、綾部市沢3号墳(前方後円墳：46m)などの小型の前方後円墳が築造される。後期に入ると、綾部市以久田野古墳群や綾部市久田山古墳群、福地山市下山古墳群などの数多くの群集墳が造営されるようになり、古墳の数が一気に増加していく。また、家形埴輪や馬形埴輪、人物埴輪(巫女・武人・鷹匠・楽人)など多彩な形象埴輪をもつ福知山市稲葉山10号墳(前方後円墳：38m)や古墳内に3基の横穴式石室をもつ特異な福知山市牧正一古墳(前方後円墳：35m)などが造られている状況を確認できる。

古墳時代の集落については、現在、発見されている遺跡数が少なく、様相が不明な部分が多い。綾部市青野遺跡では、古墳時代中期から後期にかけての建物跡や古墳時代後期後葉から飛鳥時代の「青野型住居跡」が見つかっている。福知山市奥谷西遺跡では古墳時代後期初頭の建物跡が4基検出されている。福知山市石本遺跡では2地区に分かれ、計15基の建物跡を検出しており、数回に及ぶ建て替えが行われ、古墳時代後期後葉から継続的に集落が機能していたことが分かっている。多くの建物跡が古墳時代後期に位置づけられるものであり、後期に由良川中流域が集落域として活発化していることが読み取れるが、前期から中期にかけては不明となっている^(注1)。現在、開発の及んでいない地域で集落が展開していたのかもしれない。これらの状況は由良川下流域でも確認されており、一部、古墳時代後期以前に小規模な遺跡が存在しているものの、大部分は古墳時代後期末から飛鳥時代に急増するようになっていく^(注2)。

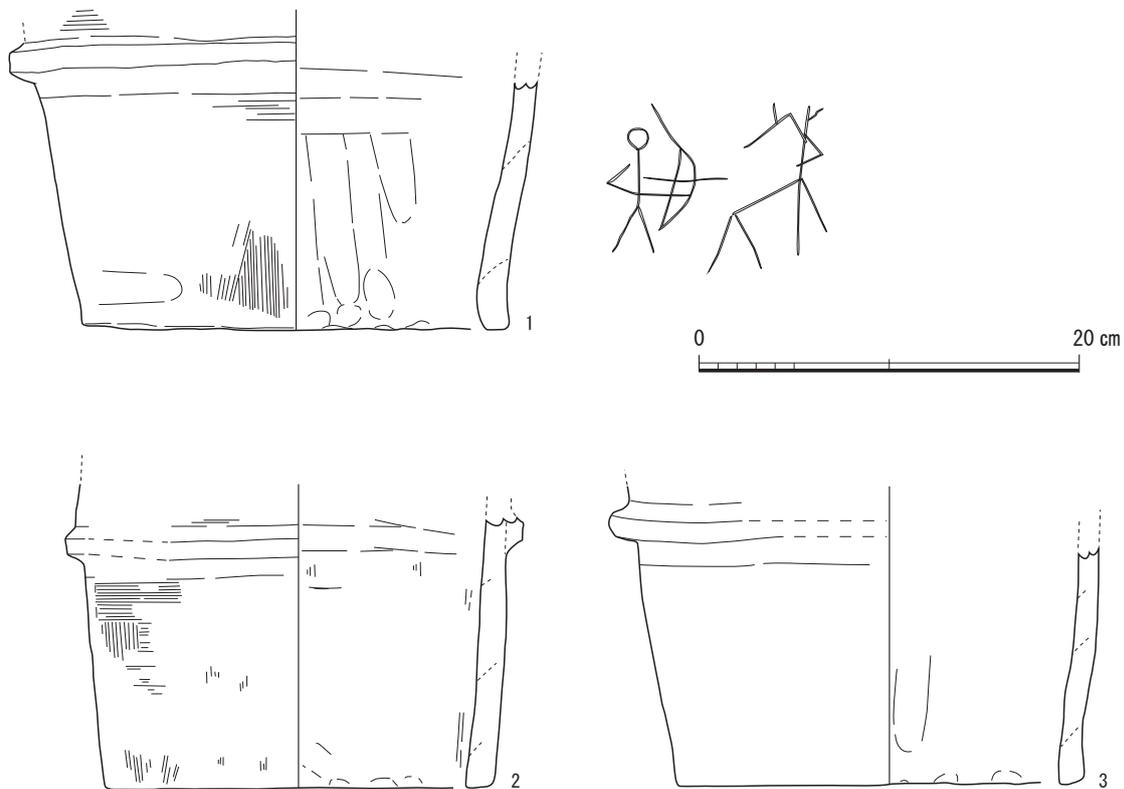
以上、由良川中流域では、古墳時代前期から前方後円墳の築造が開始されるが、継続せず、中小規模の方墳が展開していく。中期中葉以降、私市円山古墳の築造以降に、小規模な前方後円墳が築造され、後期になると基本的には、小型の円墳をもつ群集墳が一帯に広がっていく。同時期の集落跡については、不明な部分が多いが、後期以降に建物跡なども検出されるようになっていく。

3. 水内古墳出土の埴輪

水内古墳は前述したように校庭の整備及び道路の拡幅工事を契機に発見された古墳であり、これらの工事以前に旧陸軍工兵隊の工事によって墳丘が破壊されていたと考えられている。墳形・規模等は一切不明な古墳である。埴輪列が検出されており、円筒埴輪が約30cm間隔で数個分の破片として採集され、現在、3点が復元されている^(注3)。

今回、図化できた資料はすべて底部資料であり、3点ともにほぼ全周しており、破壊された古墳に原位置を保って、底部のみが残っていたものと想定できる。普通円筒埴輪か朝顔形円筒埴輪かの判断は困難である。

1は底部高14.3cm、底部径22.5cmを測り、突帯形状は断面M字形を呈する。内外面ともに摩耗が激しく、外面はヨコハケ及びタテハケを施している。静止痕などを確認できなかった。内面はユビオサエ、タテナデ及び突帯貼り付け時のヨコナデを施している。全体的に黄褐色を呈しており、黒斑は認められないため、窖窯によって焼成されたものと判断できる。また、最下段には人と鹿を線刻しており、人が雄鹿に向かって弓矢で狩猟している場面を表現していたと考えられる。人は頭部を円形で、胴部から右足までを1本の線で線刻し、短い直線で左足を線刻する。胴部の線刻後に右腕を刻んでいる。線刻の切り合いから右腕の線刻以前に弓矢を線刻している。弓は弦を引いておらず、いわゆる弓構えをしていると考えられる。雄鹿は、角から頭部の一部、頸部、前脚までを1本の線を引き、その線を中心への字状に角を描き、逆くの字状に頭部の輪郭を描き、その後、前脚・胴部・後脚を線刻していく。人・鹿とともに頭部のみを輪郭で表現し、そのほかを1本の線で表現している。



第2図 水内古墳の円筒埴輪

2は、底部高13.0cm、底部径20.5cmを測り、突帯形状はM字形を呈する。外面には一次調整タテハケ後に、最下段の上部には二次調整ヨコハケを施しており、静止痕も確認できるためB種ヨコハケと考えられるが、摩耗が激しく、細分化できない。内面は底端部にユビオサエ、全体的にハケ調整を施し、1と同様に突帯部内面には、ヨコナデを確認できる。全体的に黄褐色を呈し、黒斑をもたない。

3は、底部高13.9cm、底部径21.5cmを測り、突帯形状はM字形を呈する。内外面ともに摩耗が激しく、調整が不明瞭だが、内面のユビオサエとタテナデを確認できる。全体的に黄褐色を呈し、黒斑をもたない。

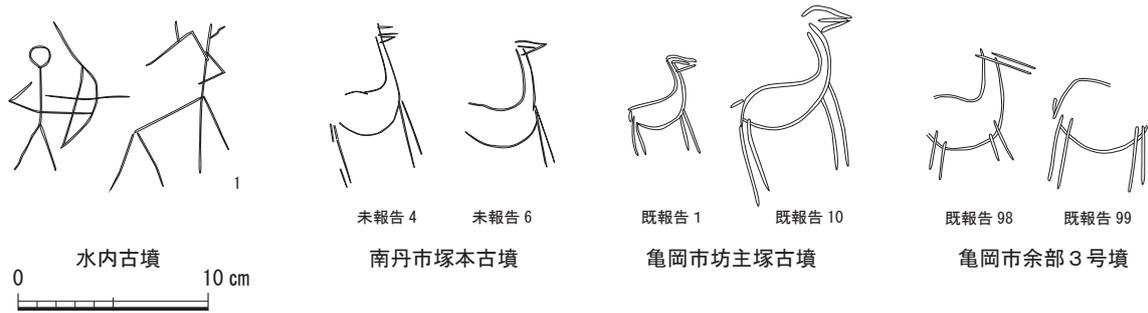
以上、水内古墳の埴輪についてまとめると、底部高は資料数の制約から参考数値に留まるが、平均13.7cm、中央値13.9cmを測り、約1cm程度の誤差に収まり、非常にまとまりをもっている資料といえる。突帯設定技法を確認はできなかったが、凹線技法を用いていたと想定できる。基本的に外面にはB種ヨコハケをもつが、細分化は困難であった。底部の全面にはB種ヨコハケが施されず、一部タテハケのみを施している。さらに黒斑をもたない資料であるため、川西編年Ⅳ期、古墳時代中期中葉から中期後葉に位置づけられる。大きな特徴として最下段に狩猟の場面を線刻で表現している埴輪があり、周辺の古墳から出土した埴輪では確認できない特徴をもっている。

4. 図像が線刻された円筒埴輪

前項では、水内古墳出土の円筒埴輪について詳細を報告し、時期的な位置づけを検討した。ここでは図像が線刻された円筒埴輪について周辺地域と比較・検討を加えたい。

現在、由良川流域においては、埴輪に人や鹿などの図像を線刻した資料を確認できていない。範囲を広げると隣接する南丹地域や丹後地域において確認できる。南丹地域では、古墳時代中期中葉から後葉にかけて築造された南丹市塚本古墳や亀岡市坊主塚古墳、亀岡市余部3号墳出土の円筒埴輪に鹿の線刻が施されており、丹後地域では、古墳時代前期後葉にかけて築造された京丹後市網野銚子山古墳や京丹後市神明山古墳、与謝野町作山2号墳で確認でき、鹿の線刻や船の線刻が円筒埴輪に施されている。

これらの線刻の中でも同時期の南丹地域の鹿の線刻に焦点をあてて、比較・検討する。南丹地域の鹿の線刻は全てに角がなく、雌鹿を表現しており、非常に類似性の高いものとなっている(第3図)。線刻の大きさは古墳内でもバラつきがあるものの、頸部から胴、尾までを2本の線を湾曲させながら描き、頸胴部の輪郭を線刻する。前脚と後脚を計4本の直線で表現する。頭部表現は、塚本古墳と坊主塚古墳では2本の線をくの字状に配置し、さらにその中に1本の線を描いている。余部3号墳では2本の線を並行して表現しており、ともに頭部を輪郭で表現していると考えられる。頭部の描き方には差異があり、やや写實的に描かれていると考えられる塚本古墳・坊主塚古墳の資料から余部3号墳の資料がより簡素化しており、普通円筒埴輪の諸特徴でも時期的変化と捉えることができる。また、塚本古墳の詳細な検討では、鹿の線刻を施す多くの円筒埴輪はハケメパターン・諸特徴が一致しており、大半の資料が固有の製作者によって描かれていたと



第3図 丹波地域における図像の線刻

想定でき、呪術的な意味だけではなく、ヘラ記号と同様に生産上の個体識別の意味を兼ねていたと考えられる^(注4)。

一方、今回、報告した水内古墳の鹿の線刻は、頸部から尾までを単線で表現しており、頭部は逆くの字状に2本の線で、輪郭を描く。これらの表現は、南丹地域の線刻と異なる表現を用いており、全国でも類例を確認できていない。南丹地域と直接的な影響関係から伝播し、描かれたものでないことは明らかである。同時期の畿内地域では、頭部・頸胴部を単線で表現するA a類が多く出土する畿内中樞部と頭部・頸動部の輪郭を複数の線で表現するB c類が出土する三島地域に分かれているとされ^(注5)、南丹地域は三島地域の影響化のもとに描かれたと想定でき、2条突帯3段構成の円筒埴輪の製作にも大きく関わっていたと考えられる。それらの折衷で表現されている水内古墳の線刻はどこからの影響によって行われたのか不明である。また、人の線刻については、出土数が限られており、周辺地域の古墳では確認できない。今後の資料増加を待ちたい。

さらに線刻方法のみならず、雌鹿が一頭のみ線刻される南丹地域と狩猟の場面として描かれた雄鹿では、意味合いなども大きく異なる。通常のヘラ記号とは異なり、呪術の意味が内包されているであろう図像の線刻について、南丹地域の資料は基本的に円筒埴輪の口縁部など埴輪樹立後も目視できる部分に描かれ、樹立後の視覚的効果も付与されているものと考えられる。一方で、最下段に描かれる水内古墳の線刻は樹立後に目視できず、樹立後の視覚的効果が得られず、埴輪製作時か、樹立以前に視覚的効果を得ることができる。図像の描かれた埴輪が誰に向けたものなのかを検討する上では、重要な資料といえる。

5. 由良川中流域の埴輪生産

ここからは由良川中流域を中心に埴輪生産について概観していく。現在、綾部市・福知山市で埴輪をもつ古墳は20数基にとどまり、多くの資料が表採資料であり、発掘調査による出土資料は数量が限定される。

埴輪の樹立開始時期は、古墳時代中期前葉から中期中葉にかけての菖蒲塚古墳・聖塚古墳からである。菖蒲塚古墳では副葬品や埋葬施設の構造などが不明なものの、出土埴輪は普通円筒埴輪のほか、朝顔形円筒埴輪が出土している。円筒埴輪には、外面にタテハケとナナメハケを施しているものと二次調整ヨコハケ(B種ヨコハケか?)が確認でき、円形の透穴を穿ち、黒斑を有する。

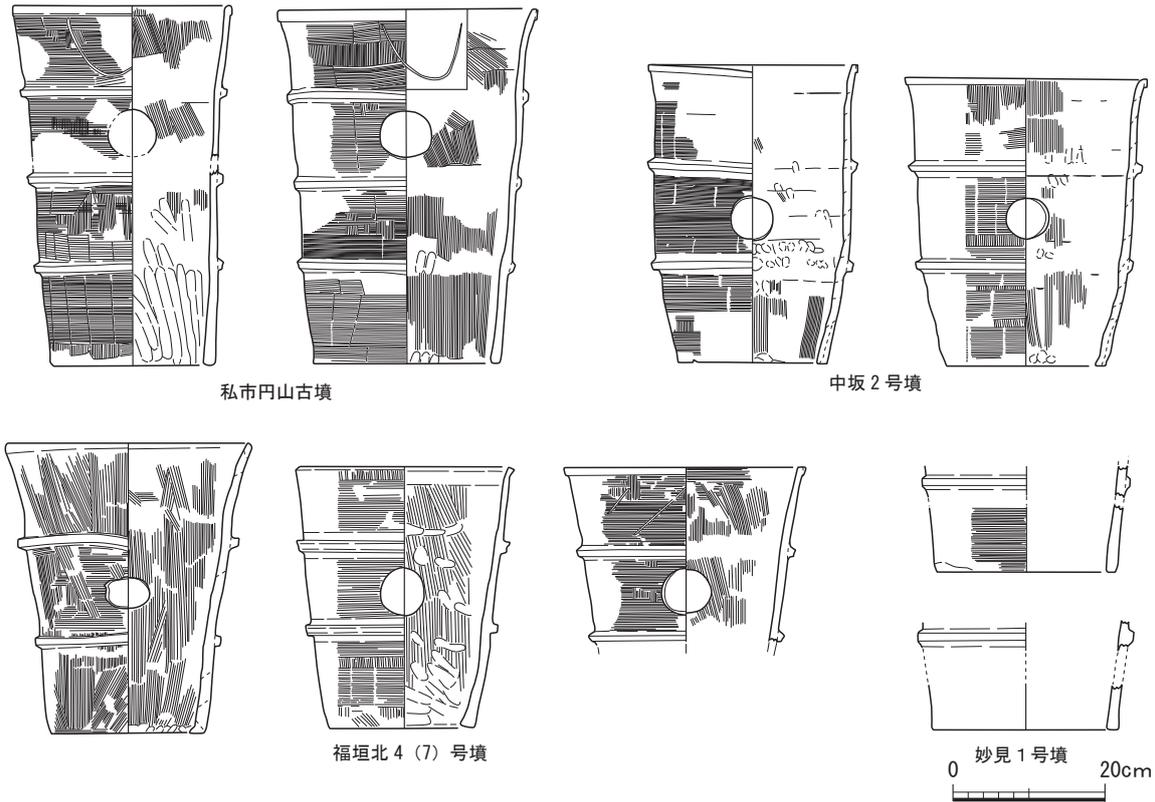
底部高が約13～15cmで、突帯間隔が13.4cm、口縁部高も7.4～13.1cmを測る。^(注6) 聖塚古墳では、仿製神獸鏡片や鋳留冑、革綴短甲、刀、劍、鎌などの鉄製品の破片などが見つかっている。仿製神獸鏡片の推定製作時期や鳥舌鎌から中期中葉でも早い段階の副葬品組成として位置づけられている。^(注7) 埴輪としては、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、蓋形埴輪、短甲形埴輪が出土している。^(注8) 円筒埴輪の外面にはB種ヨコハケを施し、円形の透穴を穿ち、黒斑を有する。底部高は約15.8cmを測る。一方、朝顔形円筒埴輪は、底部高が17.4cm、突帯間隔が17.6cmを測り、異なる規格で作られている。両古墳は、ほぼ同時期と考えられる。B種ヨコハケをもち、黒斑を有する点から川西編年Ⅲ期に位置づけられる。また、副葬品からは聖塚古墳が後出する私市円山古墳とほぼ近い時期に位置づけられており、埴輪の製作時期とも矛盾がないと判断できる。

私市円山古墳では、墳頂部に計3基の埋葬施設が検出されている。第1埋葬施設からは三角板革綴衝角付冑や三角板革綴短甲、頸甲、肩甲、鉄劍、鉄鎌、胡籙金具などの武具類や玉類・鏡などが出土しており、第2埋葬施設からは、武具類、玉類、鏡類のほか、副室より農工具類が出土している。第3埋葬施設からは、武具類や農工具類が出土し、多種多様な副葬品がみついている。墳丘や造出部からは普通円筒埴輪のほか、朝顔形円筒埴輪や家形埴輪、蓋形埴輪、短甲形埴輪が出土している。^(注9) 普通円筒埴輪は3条突帯4段構成の普通円筒埴輪であり、底部高は12.7～13.1cm、突帯間隔は10.7～11.7cm、口縁部高11.5～11.7cmとなり、底部高が1cm程度高く、そのほか、突帯間隔・口縁部高は等間隔に設定しており、底部高>突帯間隔を呈している。口縁部は貼付口縁をもち、外面には一次調整タテハケ及びB b種ヨコハケをもち、内面はタテハケ、ナデ調整、ユビオサエを施している。非常に規格性の高い普通円筒埴輪が樹立されていた。硬質に焼成された須恵質の円筒埴輪も出土している。黒斑がなく、B b種ヨコハケをもち、底部高>突帯間隔を呈する点から川西編年Ⅳ期でも古相に位置づけられよう。

そのほか、B種ヨコハケをもつ埴輪は福知山市中坂古墳群、福知山市福垣北4号墳(7号墳?)、福知山市妙見1号墳から出土している。

中坂古墳群では、1号墳(方墳：9m)からは複数の家形埴輪が出土しており、2号墳(方墳：12m)からは2条突帯3段構成の普通円筒埴輪が出土している。^(注10) 底部高は12.8～13.4cm、突帯間隔は12.9～13.0cm、口縁部高12.1～13.4cmとなり、ほぼ等間隔に突帯を設定しており、底部高=突帯間隔となっている。口縁部は貼付口縁を呈している。外面には一次調整タテハケ及びB b種ヨコハケをもち、基本的に全面にB b種ヨコハケを施す。内面はタテハケ・ユビオサエを確認できる。2段目に円形の透穴を穿ち、黒斑を有さない。底部=突帯間隔となっているため、Ⅳ期でも新相に位置づけられる。

福垣北4号墳(7号墳?)では、4号墳・7号墳の間の周溝内から普通円筒埴輪の破片が出土しており、どちらに樹立されていたのかは不明である。5個体分が報告されている。^(注11・12) 2条突帯3段構成の円筒埴輪が出土している。底部高は12.2～13.0cm、突帯間隔は11.1～12.5cm、口縁部高は11.6～13.1cmとなり、ほぼ等間隔に突帯を設定している。口縁部は貼付口縁のものと普通口縁のものが確認でき、外面には一次調整タテハケ及びB d種ヨコハケをもち、底部にタテハケのみの



第4図 由良川流域のIV期の円筒埴輪

ものもある。内面はタテハケ・ナデ調整を施す。2段目に円形の透穴を穿ち、黒斑を有さない。底部＝突帯間隔となっているため、IV期でも新相に位置づけられる。

妙見1号墳については破片資料のため、詳細が不明であるものの、底部の外面にはB種ヨコハケを施されている。^(注13)

現状での由良川中流域のIV期の埴輪についてまとめたい。IV期でも古い様相を呈するのが私市円山古墳出土の普通円筒埴輪である。3条突帯4段構成であり、口縁部に貼付口縁をもち、外面にB b種ヨコハケを主体に施す。規格は底部高>突帯間隔を呈する。やや時期が新しくなると2条突帯3段構成の円筒埴輪が確認でき、口縁部に貼付口縁をもつものと普通口縁をもつものが確認できる。同じくB b種ヨコハケを主体に施すが、古相から新相への時期的変化の中で、規格が3条突帯4段構成から2条突帯3段構成と変化し、底部高＝突帯間隔へ変化していく点が挙げられる。IV期新相の特徴をもつ円筒埴輪でも、さらに底部外面を一次調整タテハケのみを施す個体が散見できる。外面調整の省略化が進んでいるとするならば、さらに時期差と評価できるかもしれない。今回、報告した水内古墳の円筒埴輪でも底部外面は大部分が一次調整タテハケに留まっている。資料が少なく、断定は困難であるが、IV期内でも新相として位置づけできる可能性が高く、古墳時代中期後葉に該当する。

畿内地域でのIV群の埴輪の規格性について、王権中枢古墳群の大型前方後円墳や陪塚では6条突帯7段構成、あるいは7条突帯8段構成のものが主として用いられる。周辺地域の前方後円墳では4条突帯5段構成、中小規模古墳では3条突帯4段構成に加え、2条突帯3段構成のものも

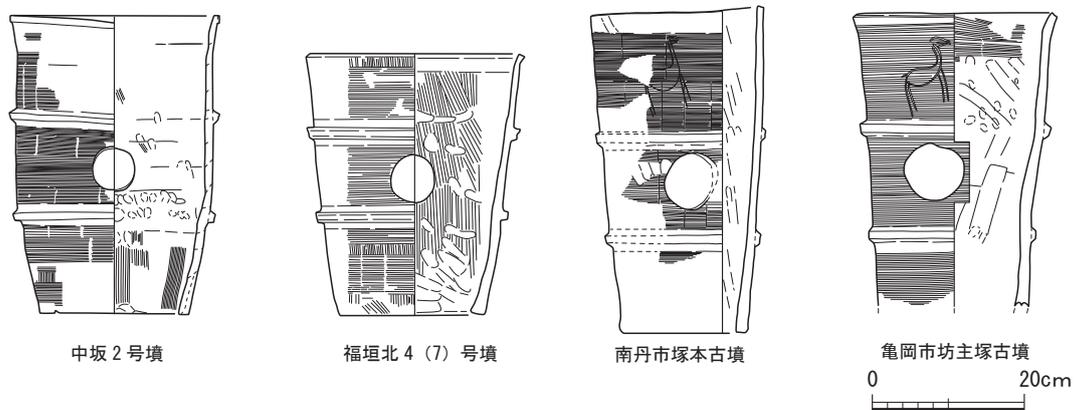
用いられ、段数構成の幅が最も広がる時期とされている。^(注14)これらと連動するように中規模程度の私市円山古墳では3条突帯4段構成を用い、小規模となる方墳や円墳では2条突帯3段構成を用いている。王権との関係性の中で埴輪生産が行われ、由良川中流域でも中期中葉から後葉にかけては同一の枠組みの中で埴輪生産を行ったものと評価できる。

後期になると稲葉山10号墳では普通円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪、家形埴輪、馬形埴輪、人物埴輪(巫女・武人・鷹匠・楽人)が出土しており、中期にみられた2条突帯3段構成の普通円筒埴輪が出土せず、4条突帯5段構成、5条突帯6段のものが出土している。多彩な形象埴輪は、新たな埴輪生産が導入されたものと考えられる。内外面には、タテハケを施し、透穴は方形や円形に穿つ。最下段突帯は断続ナデ技法が施される。^(注15)新たな技法や多様な器種の導入は埴輪生産の大きな変化を示したものと評価できるが、生産は継続せず、埴輪生産が終焉を迎えることとなる。

6. 丹波地域の2条突帯3段構成の普通円筒埴輪

由良川中流域のⅣ期新相の普通円筒埴輪の特徴として、2条突帯3段構成の規格が生産されていくことを述べた。これまでの円筒埴輪の研究において段数構成による階層序列が明らかになっている。由良川中流域内においては、3条突帯4段構成の円筒埴輪をもつ私市円山古墳を頂点として、下位の小規模な古墳においては、貼付口縁などの形態的属性を継続させながら、2条突帯3段構成の円筒埴輪をもち、階層序列を円筒埴輪で表現している。

隣接する南丹地域においてもⅣ期に2条突帯3段構成の普通円筒埴輪が生産されるようになる。由良川中流域の資料と比較して、やや径が小さく、口縁部高がやや高く、全体形状が異なり、貼付口縁を確認できない(第5図)。南丹地域の2条突帯3段構成の埴輪生産については、普通円筒埴輪の規格や線刻の表現方法、ハケメパターン、ヘラ記号、各部位の属性などをもとに検討した結果、高槻市新池遺跡など摂津地域からの直接的な影響で新たに生産が開始されたと評価でき^(注16)た。中期に突出した規模の古墳が築造されていない南丹地域では、同古墳内で配列等を不明なもの、2条突帯3段構成の円筒埴輪と併せて、4条突帯5段構成や3条突帯4段構成の普通円筒埴輪も同一古墳内に樹立されている。円筒埴輪の段構成としては最小単位となる2条突帯3段構成



第5図 丹波地域の2条突帯3段構成の普通円筒埴輪

成の円筒埴輪を用いるが、南丹地域では、より上位の階層序列を表現した古墳は確認できず、直接的な影響を受けた摂津地域内を意識し、生産した可能性もあろう。

同時期に2条突帯3段構成の普通円筒埴輪を生産するという共通点は、丹波地域内で確認できるものの、詳細に検討するとやや異なる様相を確認でき、さらに鹿の線刻表現の検討でも述べたように直接的な影響関係の中で生産されたものではなく、ともに異なる地域からの影響で生産された可能性が高い。

7. おわりに

ここまで水内古墳の埴輪を報告し、それらの位置づけを検討する上で、由良川中流域の埴輪生産について概観した。由良川中流域では、中期中葉までいわゆる首長墓と評価できる古墳しか樹立されなかった埴輪が、中期中葉以降、私市円山古墳の築造を契機に小規模古墳への導入が開始され、一時的に生産が活発化していく。これらの中で、水内古墳でも埴輪が樹立されるようになり、狩猟の場面が表現された埴輪が生産されたと考えられる。さらに同時期に埴輪生産が活発化する南丹地域と比較し、隣接地域ながら異なる様相を明らかにできた。

これらの生産体制の変化は各古墳の埴輪を詳細まで検討し、隣接地域を含め、考察していくことで明らかにできる課題であり、由良川中流域の古墳時代の評価、ひいては畿内周縁地域の埴輪生産を明らかにできると考え、今後の課題としたい。

謝辞 本稿を作成に於いて福知山市、京都府立丹後郷土資料館に多大なご協力いただいた。記して謝意を表したい。
(きたやま・だいき＝当調査研究センター主任)

注1 西岸秀文 1991「由良川流域の古墳時代集落跡概観」『京都府埋蔵文化財論集第二集～創立十周年記念誌』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注2 桐井理揮 2019「6. 総括 由良川下流域の地域社会と阿良須遺跡」『京都府遺跡調査報告書 第177冊』(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注3 福知山市史編さん委員会 1976『福知山市史』

注4 北山大熙 2023「IV期の南丹地域の埴輪生産」『埴輪論叢』12号 埴輪検討会

注5 小澤麻帆 2022「図像をもつ埴輪に関する予察的検討」『埴輪論叢』第11号 埴輪検討会

注6 谷口智樹・義則敏彦 1983「多田古墳群」『丹波の古墳Ⅰ－由良川流域の古墳－』山城考古学研究会

注7 阪口英毅・下垣仁志・諫早直人・河野正則・川畑純・金宇大・土屋隆史・新宮領奏絵 2013「綾部市聖塚古墳出土遺物報告-京都大学総合博物館収蔵資料-」『古代学研究』第197号 古代学研究会

注8 注6に同じ

注9 鍋田勇・大崎康文・高野陽子・石崎善久 1989「私市円山古墳」『京都府遺跡調査概報』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注10 黒田恭正・杉本宏 1983「中坂古墳群・他」『丹波の古墳Ⅰ－由良川流域の古墳－』山城考古学研究会

- 注 11 石井清司 1988「福垣北古墳群」『京都府遺跡調査概報』第 31 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注 12 田代 弘 1989「福垣北古墳群」『京都府遺跡調査概報』第 36 冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注 13 海老瀬敏正・石井清司・常磐井智行 1983「妙見古墳群」『丹波の古墳 I - 由良川流域の古墳 -』山城考古学研究会
- 注 14 木村 理 2022「古墳時代中期の円筒埴輪」『埴輪の分類と編年』埴輪検討会
- 注 15 石井清司・杉本 宏・常磐井智行 1983「稲葉山古墳群」『丹波の古墳 I - 由良川流域の古墳 -』山城考古学研究会
- 注 16 注 4 に同じ

図版出典 第 1 図：国土地理院 web サイトを加工して筆者作成、第 2・3 図：筆者作成、
第 4・5 図：各報告書より再トレース

軒平瓦の瓦当面に生じるバリの痕跡について

川嶋泰輔

1. はじめに

古代から中世にかけての瓦は寺院や官衙・国衙などに使用されていた(第1図)。その製作は粘土を型に合わせて成形して焼成する方法であり、『延喜式』の木工寮の掘埴・作瓦の項にて明記された(小林1964、森2001)。

院政期になると、地方国司(受領)が私費で中央の政治施設の造営に関与して、その代償に官職を受ける売官制度(成功)が行われる。当時の瓦は、丹波・讃岐・播磨・尾張などに所在する地方窯と興福寺ないし法隆寺の大寺院が保有している生産窯、さらには木工寮の中央造営官司に付属する中央官衙系瓦屋において生産され、天皇が発願した六勝寺などへと供給された(上原1978a・1982・1995)。

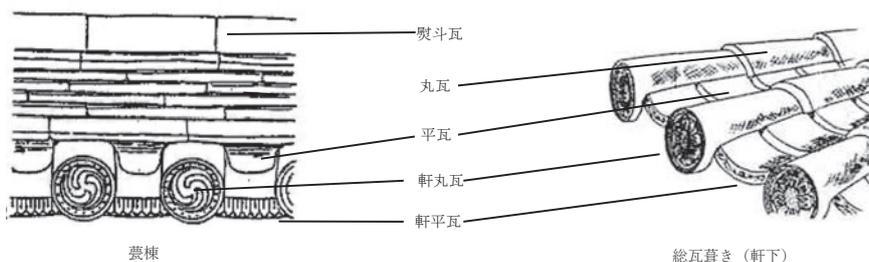
本稿では、中央官衙系瓦屋産の軒平瓦において、なぜバリの痕跡^(注1)が瓦当面に生じるのかについて写真観察や民俗調査から考えたい。

2. 研究史の現状と課題

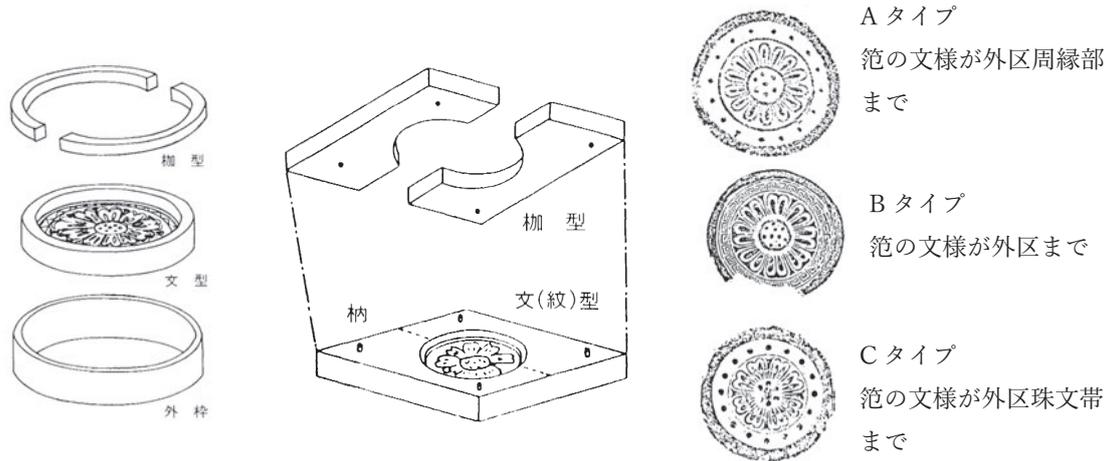
軒瓦の瓦当文様に生じる範傷や文様構成から年代観を言及する研究は、枚挙に暇がない。平安時代中期から後期にかけて従来みられない文様は国風文化の影響を受けてつくられたと石田茂作氏が述べた(石田1938)。一方で、前期から文様系譜にみられない新たな文様は国風文化の影響から作成されたと上原真人氏が提示した(上原1980a・1980b)

また、軒平瓦の剣頭文の配置方法は円弧を等分にならべる方法から直線的に剣頭を下に向ける、あるいは剣頭の先を積み重ねる文様へと変化する。その背景には、範の作成者による、瓦当文様の最小の単位である単位文様とそれを構成する意匠の認識の違いにより生じた(上原1978b)。

一方で、軒丸瓦の瓦範の押印時に残る痕跡について、着眼する研究が認められる(星野1953、木村1969、近藤1982)。製作時に使用される柵型の痕跡とそこから創出される文様の範囲に関する研究が行われ(星野1953・1981)、この分類をもとに平安時代の各時期の変遷が示された(木村



第1図 屋根構造(上原1997a、潮見1977)



第2図 伽型の使用方法と痕跡(星野1953、近藤1982)

1969、近藤1982、第2図)。

ここまで述べてきたことをまとめると、瓦当文様の文様構成とその変化に着手した研究(石田1938、上原1980a・1980b)、軒丸瓦の瓦当文様と製作技術からどの箇所まで残るのかについて追及する研究(星野1953・1981、毛利光1990)の大きく二つに大別できるだろう。しかしながら、軒平瓦の瓦当面に残る痕跡を焦点とした論考がみあたらない。よって、京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行った常盤仲之町遺跡^(注2)の出土瓦から瓦当面に残るバリの痕跡について遺物と民俗調査から検証する。

3. 対象遺跡と対象資料について

(1) 対象遺跡

常盤仲之町遺跡は京都市右京区に位置し、広隆寺旧境内の東側に接する。平安時代後期から鎌倉時代にかけて貴族の御堂や墓所、領地として利用された。その一例に、後鳥羽上皇が藤原公経の所領を伊賀局のために再建したという記録が残る(『仁和寺日次記』承久元年八月十一日条)。

1976年に日本電信電話公社の社員寮の建設のために行われた調査では、平安時代から鎌倉時代にかけて4棟の掘立柱建物と瓦が集散的に廃棄された土壌が確認された(鈴木1978)。なかでも、一括して廃棄されたSX8から出土した瓦には被熱をうけた痕跡があり、調査担当者の鈴木廣司氏は火災時に廃棄されたものだと示した。

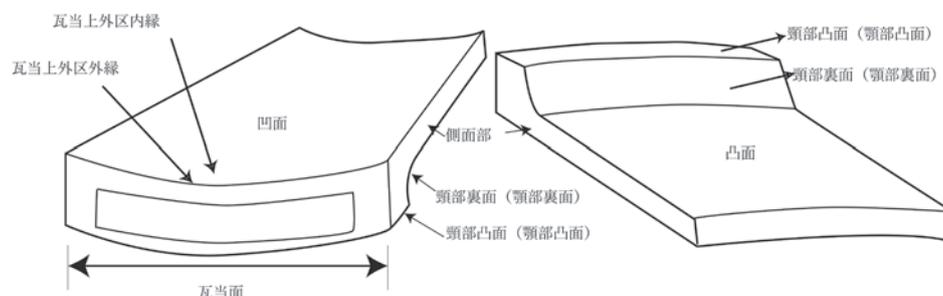
(2) 対象資料

今回、取り扱う資料は比較的良好で一括性の高い、SX8から出土した中央官衙系瓦屋産の軒平瓦である。この資料はすべて完成された段階の折り曲げ造りで作成され、12世紀後半以降の特徴を有する(上原1978a・1995)。この技法は、木村捷三郎氏によって「平瓦の広端面を折り曲げて瓦当部とし、範を横から押し当てて施文する方法で、瓦当角が直角またはそれに近くなる。平瓦部と瓦当部は共土で作られる」と定義されている(木村1980)。

なお、調査を担当した鈴木氏は、出土瓦の胎土や製作技術、さらには色調の観点を基準に平安時代末期から鎌倉時代中期とした。その後、史跡大覚寺御所跡の築地跡の周辺部から軒瓦がまと



第3図 軒平瓦の製作技術(鈴木ほか2019)



第4図 軒平瓦の部分名称

まって出土する。この出土状況から、上原氏は常盤仲之町遺跡の年代観が史跡大覚寺御所跡よりも先行することを主張した(上原1995・1997b)。その根拠に軒平瓦の製作技術からみた型式変化^(注3)と銘瓦と組み合わせる軒丸瓦の瓦当面の長さを提示した上で、上原氏は常盤仲ノ町遺跡SX8の年代を13世紀前半^(注4)と比定した。

4. 資料の検討

ここでは常盤仲之町遺跡のSX8の軒平瓦のうち、瓦当面に生じるバリの痕跡が製作時のどの段階で生じるのかを明らかにしたい。

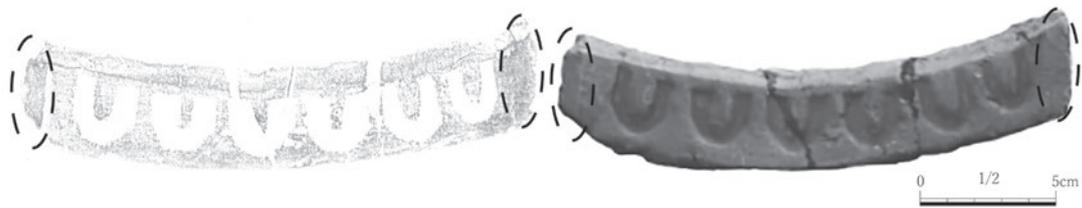
(1) 製作技術の復元

はじめに、既存の民俗事例から製作工程についてまとめる。1) 生地段階、2) 成形段階、3) 瓦当面の接続方法、4) 凹型台での成形段階という作業工程をふまえる(第3図)。

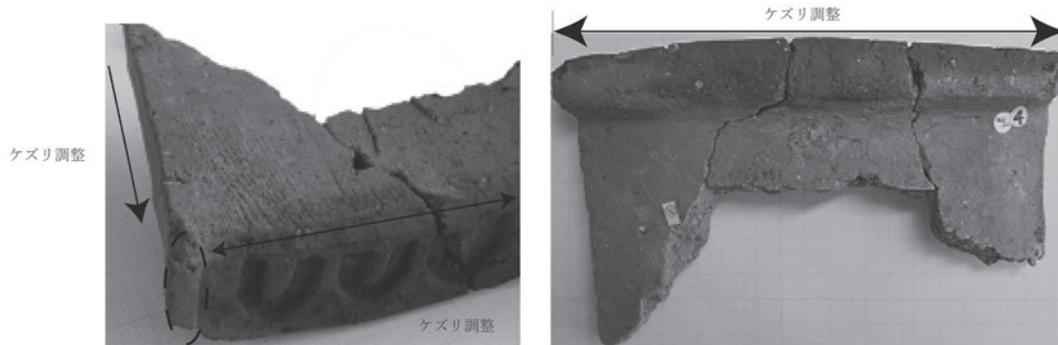
以下、折り曲げ造りの各工程について述べる。第1工程は、糸切りを使ってアラジ(粘土)を獲得する(①)。第2工程は、布を敷いた凸型台の上にそのアラジをのせる(②-1)。第3工程は、瓦当部を成形するために凸型台の上にある布と一緒に折り曲げ(②-2)、瓦範を押印して文様を創出する(③)。第4工程は、アラジの半乾燥後、凹型台の上のせて、叩き板などを用いて各部の調整を施す。その際、瓦当上外区外縁は型に合わせることなくケズリ調整が、側面部には凹型台に沿ってケズリ調整が行われる(④)。その後は瓦を乾燥させた後に焼成する。

(2) 技術の痕跡

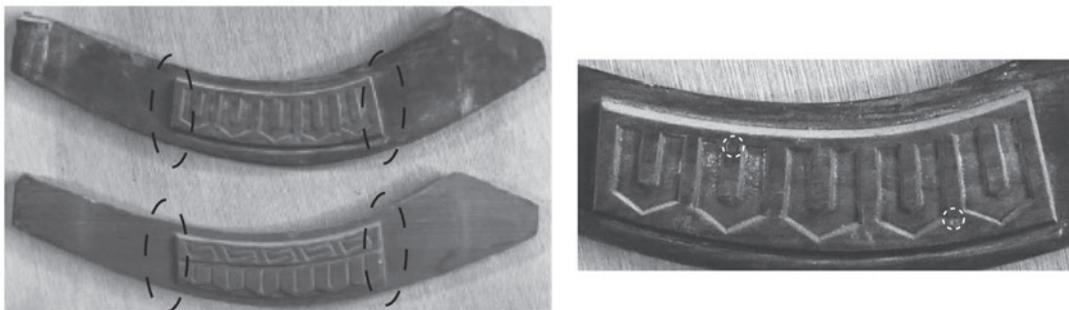
これらの製作工程の根拠となる、製作技術の痕跡については第6図で示される。具体的には、布目圧痕の痕跡が瓦当面にあり、両端部にはバリの痕がみられる(第5図)。その上部にあたる瓦当上外区外縁には横方向のケズリ調整の痕を有する。また、下部の頸部凸面は横方向のナゲ調整ないしケズリ調整の痕を残し、側面部は狭端部から広端部にかけてケズリ調整が行われたこともわかる(第4～6図)。



第5図 瓦当面にある突出した痕跡(S=1/2)



第6図 製作技術の痕跡



第7図 浅田製瓦工場の瓦範

上記の^(注5)痕跡から第3段階の瓦範を押印した際に生じたと筆者は考察する。その根拠に、瓦当面の調整は範を押印するのみで、ケズリ調整の痕などは一切無いこと、さらには瓦当面の左右の両端部には凸む痕跡を有することがあげられる(第5図)。では、バリの跡が如何にして生じたのかについて、浅田製瓦工場が保有する木範の観察結果から追求したい。

5. 浅田製瓦工場での民俗調査について

明治44(1911)年に京都市伏見区で創業した浅田製瓦工場は、現在でも伝統的な方法を用いて瓦の生産をしている(印南1986、浅田2011、青江2014、鈴木ほか2019)。

浅田製瓦工場が保有している瓦範には、二つの木で瓦範を作成したもの一つの木で瓦範を作成したもの^(注6)がある(第7図)。前者は瓦範を付け足すために釘を打った痕跡が残るが、後者はそれが見当たらない。両者の共通点は文様部分とそれ以外の箇所^(注6)に段差が生じる点にある。

先述した民俗資料の瓦範と考古資料の瓦との関係性は、粘土状の生瓦に瓦当文様が彫刻された瓦範を押印することで文様部分が浮かび上がるため、考古資料の瓦のネガ・ポジの表現が逆とな

る特徴を有する。よって、瓦範の文様箇所にある凹みは瓦の凸みに該当すると考える。すなわち、軒平瓦の瓦当面のバリの痕は、瓦範を押印したときに生じたと言え、瓦当面の長さが瓦範よりも長いために生じたであろう(第5・7図)。

6. まとめ

本稿では軒平瓦の瓦当面に残るバリの痕跡について考察した。今回の考古資料と民俗資料を踏まえると、瓦範を押印する際に瓦当面の長さが瓦範よりも長いために生じたと筆者は考える。とくに、瓦当面の上部にあったバリの痕跡は、瓦当上外区外縁は木型を使用せずにケズリ調整がされるが、側面部には凹型台に沿ってケズリ調整の痕がみえる(第6図)。つまり、瓦当面の左右にみられるバリの痕跡は、^(注7)側面部の型に沿って整形するために残ったものだと筆者は考察する。一見して、細部の痕跡に過ぎないが、これまで探られてこなかった側面について明らかにできる可能性を提示できた。今後は瓦当面の長さも含めた、^(注8)形態との相関関係について分析することも課題である。

謝辞 本稿を執筆するにあたり、株式会社京瓦の浅田昌久氏には懇切丁寧なご教授をうけました。さらに浅田氏を紹介してくださった立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻の木立雅朗教授、高正龍元教授には感謝の意を表する次第であります。資料の実見に際しては、京都市埋蔵文化財研究所の山本雅和氏および関晃史氏にご配慮を賜りました。最後にこのような未熟な研究成果を掲載する場を受託してくださった京都府埋蔵文化財調査研究センターの小池寛氏、肥後弘幸氏には末筆ながら深謝申し上げます。(かわしま・たいすけ＝公益財団法人滋賀県文化財保護協会技師)

注1 愛知県で三洲瓦を生産している伊達屋では余った土をとる作業を「バリ取り」という。ここでは、瓦当面に生じる突出した粘土のことをここではバリと仮称する。

注2 遺跡地図には常盤仲之町遺跡と明記されているが、1978年に刊行された『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第3冊には常盤仲ノ町集落跡遺跡と記されている。本稿では、遺跡地図の用語を用いる。

注3 常盤仲ノ町遺跡の軒平瓦は頸部凸面から接合部にかけて曲げシワを残すものと横方向のナデで調整するものが共存し、史跡大覚寺御所の軒平瓦では横方向のナデで調整をする(上原1995)。奈良県の東大寺東塔院跡から出土した「東塔廊瓦嘉祿三年造之」銘と組み合う軒丸瓦の文様構成から年代観を提示した(上原1995・1997b)。

注4 常盤仲之町遺跡からは中央官衛系瓦屋産と和泉系瓦屋産の軒瓦が出土している。その年代観は前者を13世紀前半、後者は12世紀後半とした(上原1995、山崎2001)。

注5 常盤仲之町遺跡から出土した中央官衛系瓦屋産の軒平瓦のうち、12個体中6点に瓦当面の左右の両端部にバリの痕跡が残る(鈴木1978、東・加納2006、前田・尾藤2008、前田2009、近藤・布川2012)。SX 8からは報告書に記載された5点のうち、2点で先述した痕跡がみられる。

注6 一つの木で瓦範を作成したものの裏面には形徳の文字が残る(第7図)。浅田昌久氏から形徳という彫師が製作した証であると、ご教示をうけた。

注7 瓦当面にバリの痕跡が残る要因の一つに、中央官衛系瓦屋産の製品にみられる小型化の影響だと挙げられる(上原1982、近藤1985)。小型化とは12世紀中葉から13世紀後半にかけてみられる、瓦

当面の大きさが縮小する現象のことである(上原1982)。12世紀中葉の栢杜遺跡八角円堂を皮切りに、13世紀前半の常盤仲之町遺跡には瓦当面の端部にバリの痕をもつ瓦が窺える。つまり、瓦当面の端部に突出した痕は瓦範と比べて瓦当面の長さが長いために生じたといえる。

注8 常盤仲之町遺跡からは瓦当面の左右にバリの痕跡がみられる、軒平瓦が出土した(鈴木1978、東・加納2006、前田・尾藤2008、前田2009、近藤・布川2012)。そのうち、瓦当面の長さの中央値が17.5cmであり、バリの痕跡が残らないものと比べて2.5cm長いことが判明した。

参考文献

- 青江智洋 2014『特別展わぎの極意は道具にありー山城の瓦づくりー』京都府立山城郷土資料館
- 浅田晶久 2011「京瓦の物性と伝統技法の「磨き」の研究」京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科先端フ
ァイプロ科学専攻博士論文
- 東 洋一・加納敬二 2006「常盤仲之町・上ノ段遺跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6
- 石田茂作 1938「古瓦に表はれた藤原時代の動向」『夢殿』18 鶴故郷舎
- 印南敏秀 1986「2. 南山城の瓦づくり」『山城郷土資料館報』4号 京都府立山城郷土資料館
- 上原真人 1978a「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』第13・14号(財)元興寺文化財研究所
- 上原真人 1978b「第4章 考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告 第1冊ー京大農学部遺跡BG36区ー』京
都大学埋蔵文化財研究センター
- 上原真人 1980a「11・12世紀の瓦当文様の源流(上)」『古代文化』32巻5号(財)古代学協会
- 上原真人 1980b「11・12世紀の瓦当文様の源流(下)」『古代文化』32巻6号(財)古代学協会
- 上原真人 1982「平安後期の軒瓦に関する基礎的研究」『考古学論考ー小林行雄博士古稀記念論文集ー』平凡社
- 上原真人 1995「京都における鎌倉時代の造瓦体制」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎
- 上原真人 1997a『瓦を読む』講談社
- 上原真人 1997b「瓦類」『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告ー大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査ー』嵯峨
御所大覚寺
- 木村捷三郎 1969「平安中期の瓦についての私見」『延喜天曆時代の研究』古代学協会
- 木村捷三郎 1980「解説」『坂東善平収蔵品目録』(財)京都市埋蔵文化財研究所
- 小林行雄 1964「造瓦技法」『続古代の技術』縞書房
- 近藤喬一 1982「瓦の範と瓦当」『考古学論考ー小林行雄博士古稀記念論文集ー』平凡社
- 近藤章子・布川豊治 2012「常盤仲之町・一ノ井遺跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-11
- 鈴木廣司 1978「常盤仲ノ町集落跡遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第3冊(財)京都市埋蔵文化
財研究所
- 潮見 浩 1977『図解 古代の技術』有斐閣選書
- 鈴木久史ほか 2019『京瓦ー生産者の足跡ー』京都市文化財ブックス第33集
- 星野猷二 1953「造瓦に関する実証的研究」『古代学研究』第10号 古代学研究会
- 星野猷二 1981「鏡瓦製作と分割型」『考古学雑誌』62巻2号 日本考古学協会
- 前田義明・尾藤德行 2008「常盤仲之町・広隆寺旧境内」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-3
- 前田義明 2009「常盤仲之町遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2008-21
- 森 郁夫 2001『瓦』法政大学出版局
- 毛利光俊彦 1990「軒丸瓦の製作技術に関する一考察ー範型と枷型ー」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 山崎信二 2001『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊

18世紀後半から出現する底部に刺突痕を有する 陽刻表現の土人形について

加藤雄太

1. はじめに

京都で出土している土人形を観察していると、18世紀半ばから陽刻から陰刻への表現の変化が確認できる。しかし、18世紀後半から出現する小型の一部の資料は陽刻の表現を有している。この資料群は型の合わせ目がケズリ調整で一旦、18世紀初頭段階で見られたような特徴を有している。土人形の古様を呈しているように思えるが、底部に刺突痕が残っており、18世紀初頭段階で確認できる資料に底部の刺突痕はないため年代が異なることが分かる。

この底部に刺突痕を有する小型の陽刻表現の土人形は、18世紀後半から出現する同時代の土人形たちと同様に大阪や四国などの地域をはじめ、全国的な出土が確認できる。一部の地域ではあるものの、各地で出土している土人形を見ると、京都の土人形と似た表現であるが、胎土が異なっている資料や底部に刺突痕を有するなど作りが似ていても京都では見かけない表現の資料があることがわかってきた。

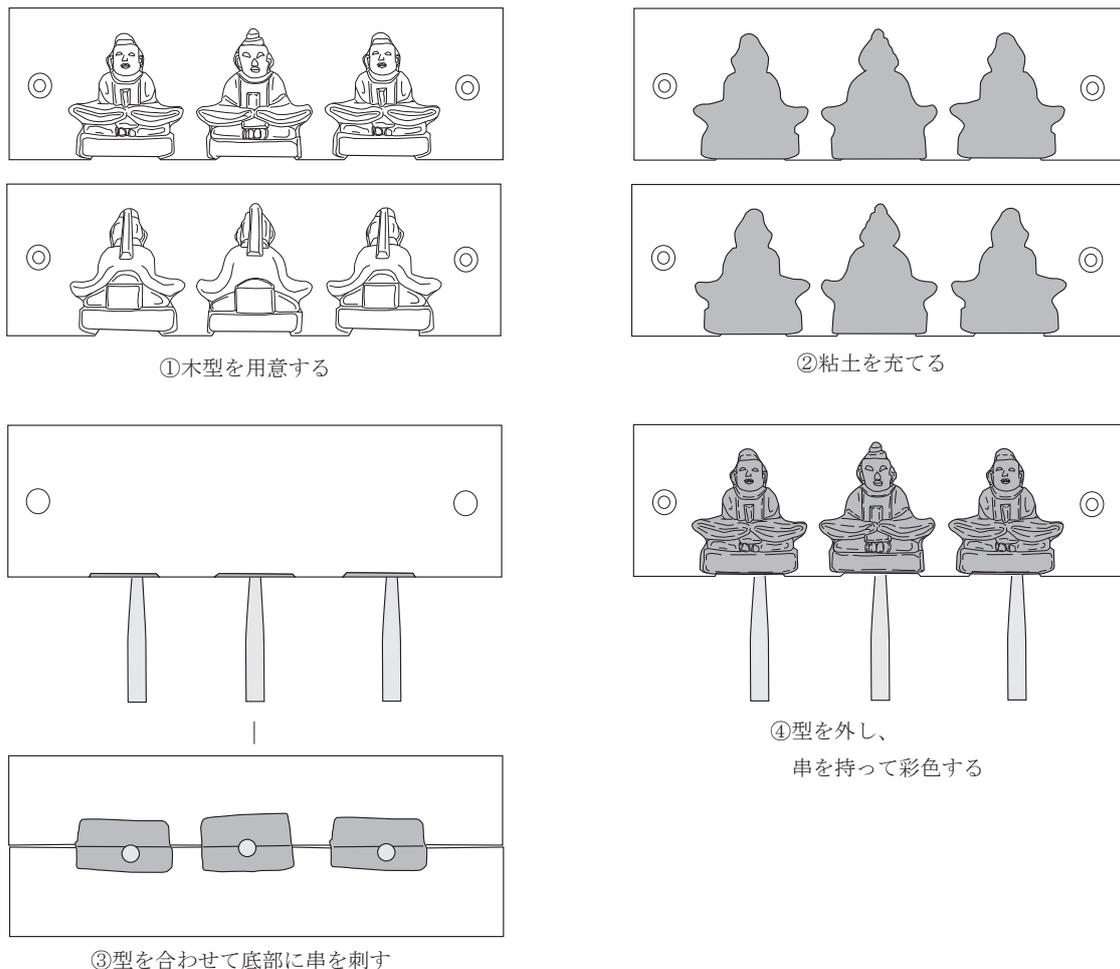
こうした事例は、全国各地の土人形生産地において、京都の「型」を模倣している可能性や京都的な土人形の作り方を模倣している可能性が指摘できるのである。しかしながら、各地の事例に対応するためには、一度京都の資料を取りまとめてどのような状況にあるのかを確認しておく必要があることに気づいたのである。

そのため本稿では、18世紀後半から京都で出現する底部に刺突痕を有する陽刻表現の土人形資料群を集成することを目的とし、そのバリエーションを確認するものである。

2. 検討資料の特徴

今回集成をおこなう資料の特徴について整理しておきたい。取り扱う土人形資料は、陽刻表現が主体の資料群である。そのほかケズリ調整^(注1)で、底部には刺突痕を有している。この底部の刺突痕は串などを刺して土人形を固定し、串を持って土人形に直接手を触れないように彩色を施すための工夫の痕跡であると考えられる。

当該資料群は、内部が中実であるので串を刺して固定することができる。土人形の中に串が勢いよく貫通してしまった痕跡を残すものがある。型抜きしてから刺すのは型を崩さないように配慮しなくてはならず、力を入れにくい。指紋も陰刻の資料のようによく残るはずだが残存しない。このため、実際は木型に土を充てて、表と裏の両凹型を合わせてから開口している底部に串を刺したのだと推測できる(第1図)。同時代の陰刻の中空の資料群は器壁の厚さは5mm前後程度しかなく、底部に刺突痕を有する資料が確認できるものこちらは串で固定して彩色をするためで



第1図 土人形の成形手順

はなく、焼成時に内部の空気を抜くための孔として設けたものと考えられる。しかしながら、中空の資料のすべてに施されているわけではなく、土玉が内部に入れている資料にも確認できることから土玉の音がよく聞こえるようにした工夫かもしれない。これは今後の課題である。

3. 出土遺跡概要

今回検討する資料が出土した地点と遺構についてまとめる。

同志社女子大学が所在する常盤井殿町遺跡の東半分には、万治4(1661)年から幕末に至るまで、撰家である二条家の屋敷が位置した。調査は幾度か行われているが、2007年度に行われた調査では4層におよぶ二条家邸の遺構面が確認され、その中から本論で取り扱う資料が出土したS K 2098とS K 2148を取り上げる。S K 2098は南北4.5m・東西3.5m以上の規模で方形に掘り込まれた土坑である。多くの遺物が焼土と共に出土しており、火災後の整理に伴って掘削された土坑であると考えられている。S K 2148は一辺3.3m規模の土坑で瓦が含まれるS K 2098と同じ性格をもつ土坑である。火災は天明8(1788)年の天明の大火であると考えられる。

平安京左京北辺四坊は天正13(1585)年に豊臣秀吉が行った京都改造事業の一つとして形成された公家町にあたる。試掘6区、調査区26区の合計14,678㎡に及ぶ調査では複数の公家屋敷地から

付表 出土した土人形

番号	器種	遺跡	遺構	性格	番号	器種	遺跡	遺構	性格
1	天神	平安京左京北辺四坊B区	土壙B687	公家町	22	稲荷狐	平安京左京北辺四坊D区	土壙D130	公家町
2	天神	平安京左京北辺四坊G区	SK348	公家町	23	稲荷狐	伏見城跡	埋葬1153	墓地
3	天神	平安京左京北辺四坊D区	土壙D130	公家町	24	稲荷狐	伏見城跡	埋葬1153	墓地
4	天神	伏見城跡	埋葬1153	墓地	25	狛犬	平安京左京北辺四坊D区	土壙D130	公家町
5	童子	平安京左京二条四坊	井戸82枠内	町屋	26	狛犬	常盤井殿町遺跡	SK2148	公家町
6	袈裟童子	常盤井殿町遺跡	SK2098	公家町	27	狛犬	寺町旧域・御土居跡	掘り下げ	公家町
7	虚無僧	寺町旧域・御土居跡	攪乱	公家町	28	犬	伏見城跡	埋葬1153	墓地
8	唐人	伏見城跡	埋葬1153	墓地	29	洋犬	平安京左京北辺四坊C区	SK606	公家町
9	袈裟	平安京左京北辺四坊D区	土壙D130	公家町	30	洋装の犬	寺町旧域・御土居跡	井戸754	公家町
10	袈裟	平安京左京北辺四坊C区	SK549	公家町	31	猿	平安京左京北辺四坊D区	土壙D130	公家町
11	大黒天	平安京左京北辺四坊C区	SK625	公家町	32	飾り馬	平安京左京北辺四坊G区	池G253	公家町
12	西行	平安京左京北辺四坊D区	土壙D130	公家町	33	馬	平安京左京北辺四坊D区	土壙D130	公家町
13	赤子	伏見城跡	埋葬1153	墓地	34	牛	平安京左京北辺四坊C区	土壙D130	公家町
14	座り童子	伏見城跡	埋葬1153	墓地	35	鶏	平安京左京北辺四坊A区	整地A 3	公家町
15	座り丸頭巾	平安京左京北辺四坊D区	溝D158上層	公家町	36	鶏	平安京左京北辺四坊D区	土壙D130	公家町
16	男性	平安京左京北辺四坊C区	SK548	公家町	37	鳥	平安京左京北辺四坊A区	整地A3	公家町
17	男性	平安京左京北辺四坊C区	SK548	公家町	38	鯛車	平安京左京北辺四坊D区	溝D158下層	公家町
18	丸頭巾	伏見城跡	埋葬1153	墓地	39	灯籠	平安京左京北辺四坊A区	整地A 3	公家町
19	女性	平安京左京北辺四坊C区	SK549	公家町	40	御堂	平安京左京北辺四坊D区	土壙D130	公家町
20	女性	平安京左京北辺四坊C区	SK548	公家町	41	御神輿	平安京左京北辺四坊D区	土壙D130	公家町
21	稲荷狐	平安京左京北辺四坊D区	SD491上層	公家町	42	五重塔	伏見城跡	埋葬1153	墓地

多くの土人形が出土している。整地A 3は調査地南東隅で検出した屋敷廃絶時の整地で、19世紀前半から中頃を中心とした遺物が出土している。土壙^(注2)B 687は南北約12m・東西約9mを測る土坑で、広範囲に窪んだところをゴミ穴として利用したものがある。19世紀前半の遺物が出土している。C区からは以下の土坑から出土した遺物も取り上げている。SK548(C区)、SK549(C区)、SK606(C区)、SK625(C区)。D区からは以下の土坑から出土した遺物を取り上げている。土壙D130、溝D158上層、下層、SD491上層(D)。池G253は漆喰張りの池で東西に長いひょうたん形をしている。19世紀前半の遺物が出土している。土壙G348は南北約6.7m・東西約1.7mの長方形土坑で、土師器皿が大量に廃棄されている。道路上に穿たれており、19世紀前半の遺物が出土した。

平安京左京二条四坊の調査は、京都市御所南小学校校舎の新築工事に先立って実施されたものである。当地は貞享元(1684)年以降、豊前小倉藩主小笠原遠江守の屋敷になっている。調査では藩邸の一部と町屋が19軒ほど確認されている。当調査からは井戸82枠内から出土した資料を取り上げる。拙著(加藤2022)から同遺構の年代はおおよそIV期(18世紀後半)と判断できる。

伏見城跡の調査は伏見区総合庁舎整備事業に先だって実施された。調査地を含む街区には日蓮宗寺院の真福寺が位置しており、調査地南部は墓域にあたる。埋葬1153は墓地西半部で検出された遺構である。一辺35cmの方形木棺で長辺55cm・短辺45cm以上を測る。土葬で被葬者は性別不明の一歳児である。副葬品には伊万里小椀、ミニチュア白磁小椀、赤絵小椀2点のほか土人形をはじめとする土製品が20点出土している。江戸時代中期から後期(18世紀中葉～19世紀前葉)の墓地である。

寺町旧域・御土居跡の調査は、上京区丸太町通河原町で実施した元春日小学校跡地新校舎整備事業に伴う発掘調査である。当地は宝永5(1708)年の大火までは寺院が位置し、大火後改変され一時期町屋が形成された後、半家の高辻家の屋敷となる。井戸754のほか攪乱と掘下げから出土している。

以上の遺跡から出土した資料を取り上げる(付表参照)。一部出土状況があいまいな資料が含まれるものの、主として18世紀後半から19世紀前半の年代が与えられるものと考えている。

4. 資料

各地から出土した資料は42点ある。器種(モチーフ)と遺跡、遺構、性格を表にまとめている。取り上げた資料はすべて二枚型で、合わせ目をケズリ調整した、底部に刺突痕を有する一群である。型は基本的に陽刻であると考えているが、3、4、14のように陰刻ともとらえ得る資料がある。

1・2は共に天神である。束帯を陽刻で表現する。背面の裾の幅が異なるほか、平緒の伸び、笏の幅が異なる。ほぼ同じ表現をした別型の資料である。3・4も天神である。主に陽刻表現を有するが袍の脇に沈線が入る。背面に2条の盛り上がる表現があり衣冠か束帯かは判別できない。台座にあたる部分に網状の表現、4条の平緒の幅、笏の規格、背面の縦方向の盛り上がる部位の長さが異なっている。また袍の脇に広がる沈線も引きが異なっており、1・2の天神と同様に同じ表現を指向した別の型と言える。なお沈線はその端部の稜がすどく、型抜きした後に施したようにもみえるが判然としない。

9と10は共に袴を着ている姿を表現しているが、背面にみえる袴の表現の違いなどが確認できる。16と17は規格差が確認できる。頭部が欠損しているので判断ができないが18と同じモチーフかもしれない。羽織を留める紐の結び目の表現がそれぞれ異なっている。19と20も同様に衣服の表現にわずかな違いがある。もっとも、こうした表現の違いは型抜きした時点での素地の乾き具合や保持したときの力の入れ方、型合わせをした際の力の加え方、出土した時点での土人形の摩耗具合などによって、多少はブレてくるものであるので、厳密に合致する、しないをみているわけではない。

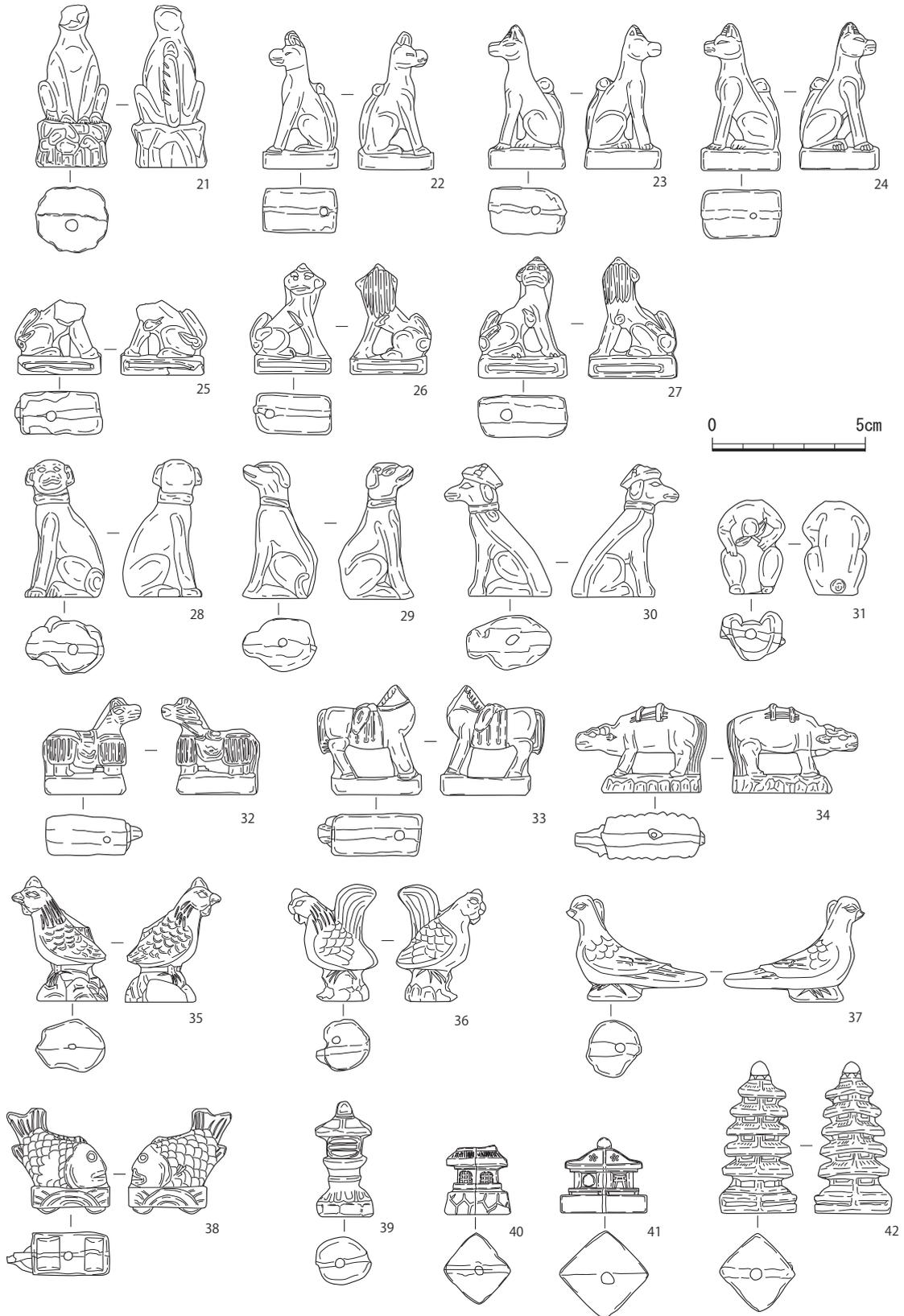
22～24の稲荷狐は、22の規格が23・24と比較して一回り小さいでいくつかの規格の異なる人形を作っていたことが分かる。25～27は狛犬であるが、26は他よりも一回り小型で、25と27も尾っぽの違いなどから別の型由来ではないかと考えられる。35と36は鶏で、鶏冠が大きく36は尾羽が大きくいずれも雄鶏と考えられるが、頸部羽毛の表現や羽・脚部の位置、座っている岩状の台座の表現が異なっている。

39～42はそれぞれ建物、構造物を表現している。四面ある資料を二枚の型で表現するため、二面を一枚の型で作出している。これらは裏と表ともに同じ表現を有しているが、削り込みなどがわずかに異なっているので、別に作出した凹型に粘土を充てて作出していると考えられる。

ほぼ同じ表現であっても微妙な差異が確認できた。このことから、同じモチーフのほぼ同じ構



第2図 出土した土人形1 S = 1/2



第3図 出土した土人形2 S=1/2

図であっても複数の元型を用意して同時並行で生産していた可能性が指摘できる。たしかに、鶴渡河原人形の伝世する木製の凹型も同じ構図のモチーフが複数長方形の板に掘り込まれている資料が確認できる。また、『広益国産考』にも土型ではあるものの複数の雌型に土を入れて土人形を作っている様子がうかがえる(第4図)。このことから複数の凹型を用意して効率的に生産するモデルが構築されていたとみえる。

5. まとめ

18世紀後半から出現する底部に刺突痕を有する中実の陽刻表現の土人形について集成作業を行った。拙著で示すところのⅣ期を主体とする

年代が与えられる資料群で、同時代の主要な資料は陰刻表現で内部が中空であることから別の工人や生産地を想定し得る資料であることを指摘していた。現状においても、このところは判然としないものの、本集成を通してバリエーションの幅や同じ表現であっても微細な違いがあることなどが明らかとなった。微細な型の違いについては生産状況を想定できる成果であり、他のⅣ期資料と似た環境が整備されていたことが推察できる。そして同じ表現の型を複数個用意して生産する体制を整えるにあたっては、陽刻の土人形では凹型を同時に作出したい数だけ彫刻して作出しなくてはならないが、Ⅲ期以降主体となる陰刻の土人形は原型を作出したのち、これを型おこしして雌型を必要分用意するだけで済む能率の違いが一層浮き彫りになったと思う。

京都において陰刻が主体となった後に陽刻の資料がなぜ出現したのかについては、Ⅳ期以降土人形のバリエーションが増加したことに関係があると考えている。つまり増加する土人形需要に対応するため生産者が増加したものの、新作となる原型の供給が間に合わず凹型(木型)の土人形も選択されたのでないか。^(注3)このように考えているのは、前稿(加藤2024)の他、大坂や四国の土人形が本集成作業で言及した資料とよく似た資料を18世紀後半以降に作っているところにある。原型を作るよりも材木などから凹型を作る方が簡易で参入障壁が低かったのであろう。そして全国的な土人形需要の増加を充足し得る土人形の土・木型の両素材による大量生産が行われた結果、本集成にあるような土人形が生み出されたのではないだろうか。

今回のまとめに際しては仮説に仮説を重ねることとなってしまった。本論で言及したような現象が実際上起こっていたのかをみていくためにも大坂や四国、そしてその他の地域の土人形についてもその状況を理解していく必要があると考えている。



第4図 廣益国産考

(かとう・ゆうた=当調査研究センター主任)

- 注1 表型と裏型を合わせた際に生じる型バリを工具などを用いて処理した調整のこと（加藤 2022）。
- 注2 加藤 2022 では土壙 F687 とし記載していたが、土壙 B687 の誤りである。
- 注3 土の原型の作出は非常に高度で専門的技術が要求されたという。従前より土人形を生産していた職人からの注文で原型職人の手が回らず、新規で土人形事業を始めた職人らは土とは別の選択肢として木型を選んだのかもしれない。

参考文献

- 加藤雄太 2022 「近世京都の土人形の基礎的研究」『日本考古学』第 54 号
- 加藤雄太 2024 「近世土人形の陽刻と陰刻」『京都府埋蔵文化財情報』第 145 号
- 同志社大学歴史資料館編 2010 『常盤井殿町遺跡発掘調査報告書－近世二條家邸を中心とする調査成果－』
同志社大学歴史資料館調査研究報告 第 8 集、同志社女子大学
- （公財）京都市埋蔵文化財調査研究所編 2004 『平安京左京北辺四坊』
- （公財）京都市埋蔵文化財調査研究所編 1996 『平成 5 年度京都市埋蔵文化財調査概要』「平安京左京二条四坊」
- （公財）京都市埋蔵文化財調査研究所編 2007 『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-27
- （公財）京都市埋蔵文化財調査研究所編 2016 『寺町旧域・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
2015-16
- 大蔵永常 1949（初出 1859）『広益国産考』岩波書店

瀬戸内技法の流入 ～石器製作技術の不易流行～

面 将 道

1. はじめに

本共同研究は、旧来の伝統が新たな技術(瀬戸内技法)をどのように受容するのかを明らかにすることを目的とし、平成30年～令和5年まで実施した。瀬戸内技法成立前夜における瀬戸内地域を中心に、東は中部地方、西は九州地方のAT下位の石器群を中心に実見し、在来の石器製作技術を明らかにする。中部地方では、発見されている日本最古の石刃技法をもつ八風山遺跡と近い時期の石刃をもたない石器群である竹佐中原遺跡を比較し、石刃技法という新たな技術が既存の石器製作技術に与えた影響について考察する。最後に、東南九州地方の金剛寺原遺跡と瀬戸内地方の七日市遺跡にみられる横長のナイフ形石器に注目し、瀬戸内技法の流入について検討する。なお、石器群の実見は、付表1のとおり実施した。

付表1 実見した石器群

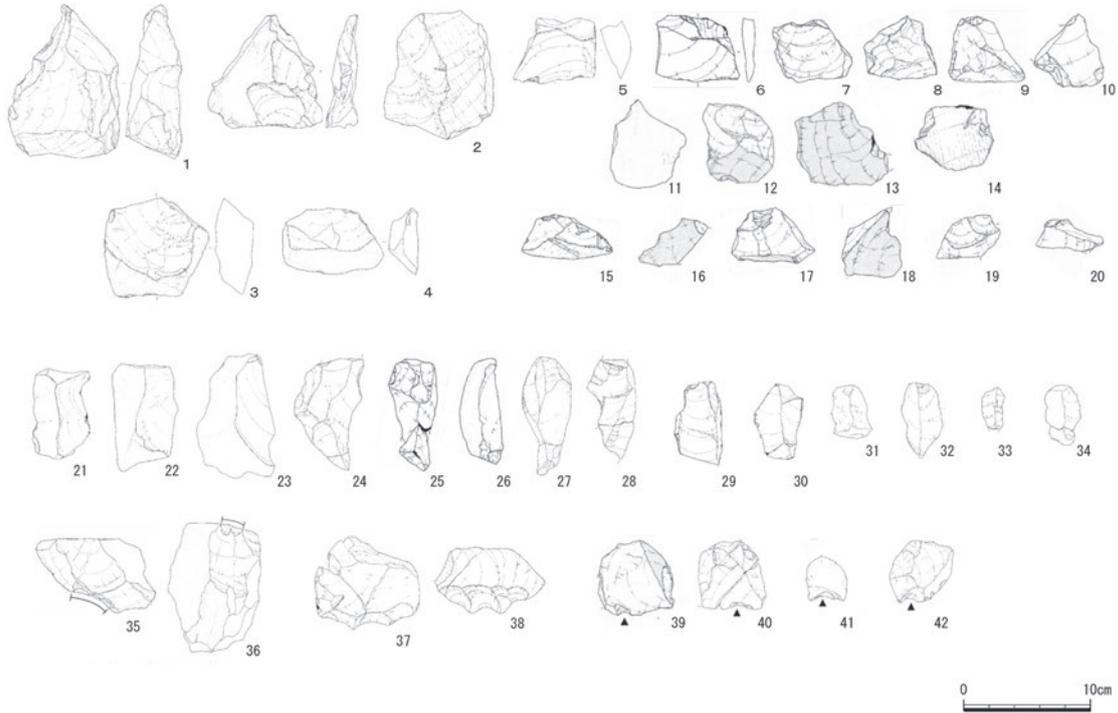
年度	遺跡名	時期	主な石器石材	主な剥片石器
平成30年	沈目遺跡 地蔵平遺跡	AT 下位 AT 上位 下位	輝緑凝灰岩 黒曜石・安山岩	「類ナイフ状石器」、スクレイパー、 挟入石器 ナイフ形石器、台形石器、角錐状石器
令和元年 (平成31年)	竹佐中原遺跡	AT 下位	ホルンフェルスなど 変成岩	「刃器」、挟入石器、鋸歯状石器
	八風山遺跡	AT 下位	ガラス質黒色安山岩	ナイフ形石器、搔器、削器、 刃部磨製石刃、石刃
令和2年	七日市遺跡	AT 下位	チャート サヌカイト	
令和3年	—	—	—	—
令和4年	—	—	—	—
令和5年	金剛寺原第1遺跡 第2遺跡	AT 上位	流紋岩 頁岩	ナイフ形石器、スクレイパー

2. 石器群の様相

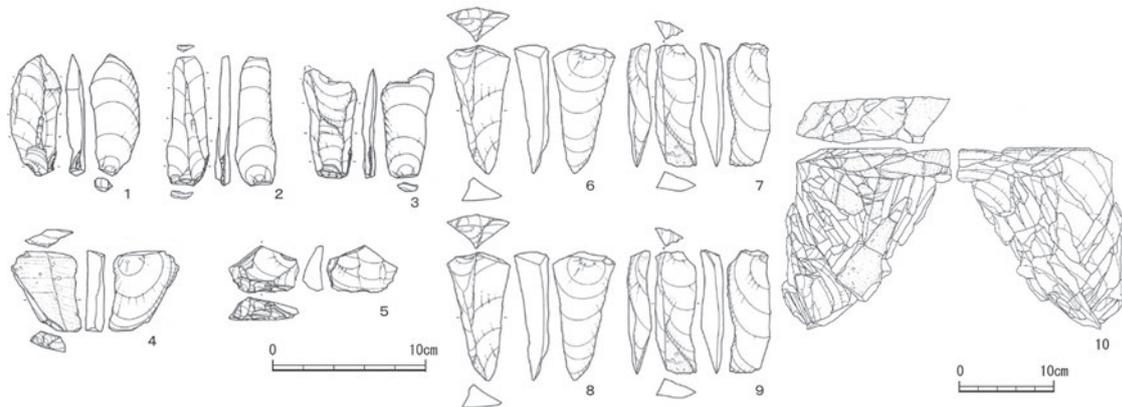
本項では、これまでに実見した石器群の特徴について各遺跡ごとに整理し、特徴を検討する。

(1) 中部地方の石器群①(竹佐中原遺跡・第1図)

竹佐中原遺跡は、長野県南信州地域、天竜川右岸標高約600mの丘陵上に位置する。主として硬質なホルンフェルスをもちいた素朴な二次加工による「刃器」、鋸歯状石器、挟入石器などの剥片石器、大型の礫塊石器で組成される石器群である。本遺跡の剥片のほとんどは不定形で厚手であるが、石刃技法の内在をうかがわせる石刃状剥片が一定数みられる。石核についても、分割礫状に打ち割られたものがある一方、規則的かつ連続的な剥片剥離が読み取れるものがあることから、石刃技法とまではいえないものの、剥片の定型化を指向した剥片剥離技術が想定できる。



第1図 竹佐中原遺跡出土石器



第2図 八風山遺跡出土石器

(2) 中部地方の石器群②(八風山遺跡・第2図)

八風山遺跡は長野県東信地方、関東山地北部の八風山に位置する。八風山は良質なガラス質黒色安山岩の産地として知られ、本遺跡の主要な石器石材である。ナイフ形石器、搔器、削器、刃部磨製石刃、石刃などの後期旧石器時代後半期のように定型的な剥片石器を有する。剥片は縦長の石刃で、石核こそ真正の石刃技法とは異なるものの、分割礫の小口から規則的に剥離する石刃核であり、剥片剥離技術が定型化している。

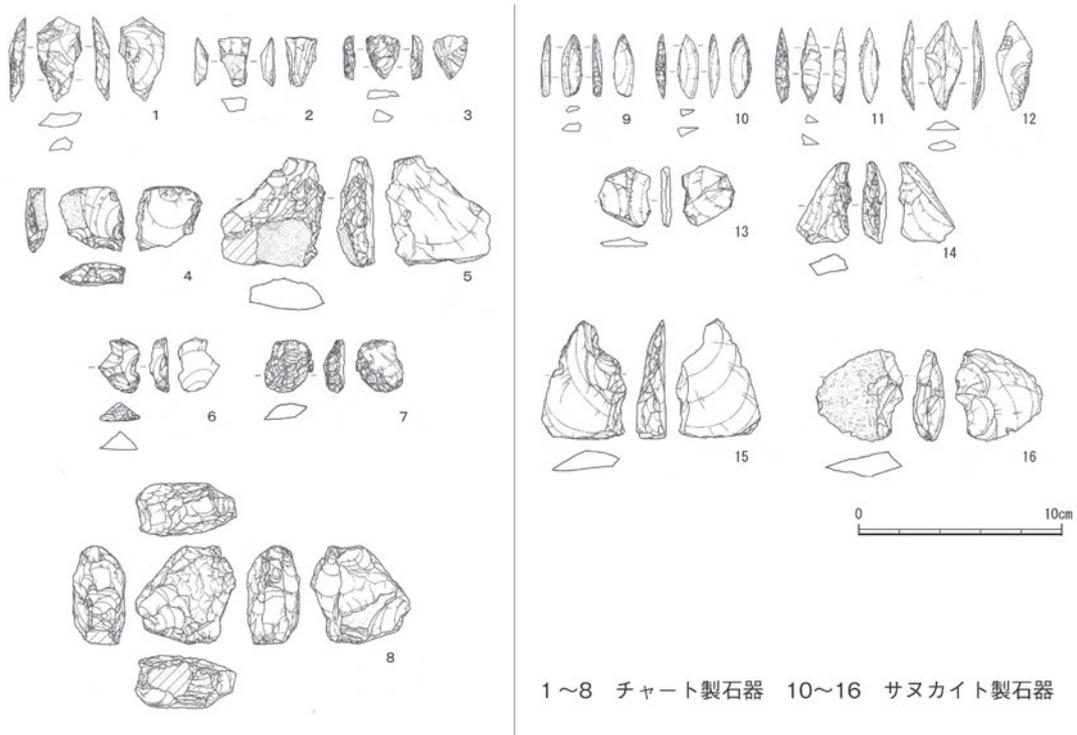
(3) 近畿地方の石器群①(七日市遺跡・第3図)

七日市遺跡は、兵庫県中東部の「氷上回廊」と呼ばれる日本国内で最も標高の低い標高約95mの分水嶺に位置する。チャートを石器石材の主体とする石器群で、サヌカイトをもちいた有底横長のナイフ形石器、台形石器、スクレイパー、抉入石器に特徴付けられる。本遺跡の剥片のほと

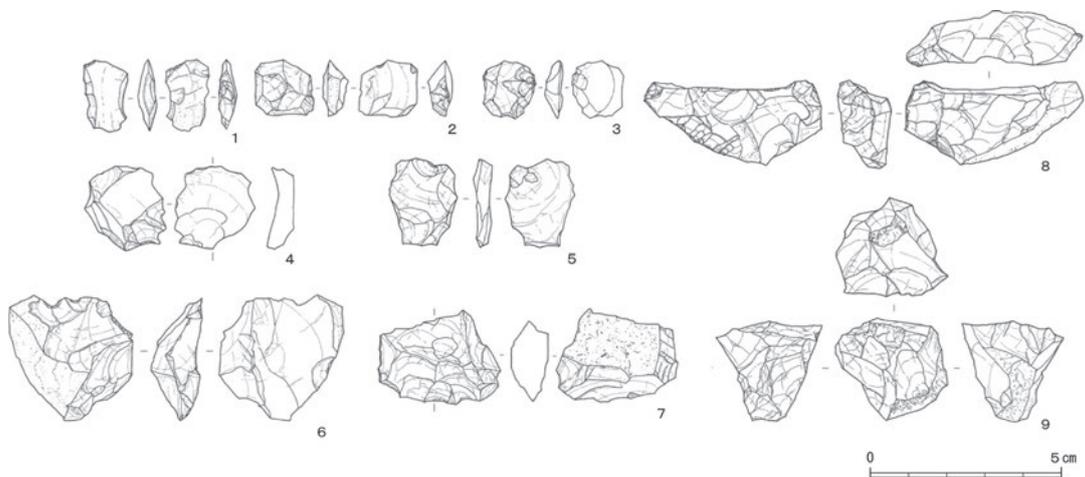
んどは寸詰まりの不定形で、規格的な剥片を志向する様子はみられない。サイコロ状石核、両極打法による楔形石核が大部分を占め、頻繁な打面転移による不定形剥片の生産が主体であったと想定できる。剥片石器は、不定形剥片を素材剥片として、縁辺への刃潰し状の微細剥離、器厚調整のための水平剥離などが認められるほか、抉りこみ状の剥離など、単純な剥離面で構成されている。また、サヌカイト製の石器に特徴的な有底横長剥片をもちいたナイフ形石器が確認できることから、瀬戸内技法への技術的な模索が始まっていたと考えられる。

(4) 近畿地方の石器群②(上野遺跡・第4図)

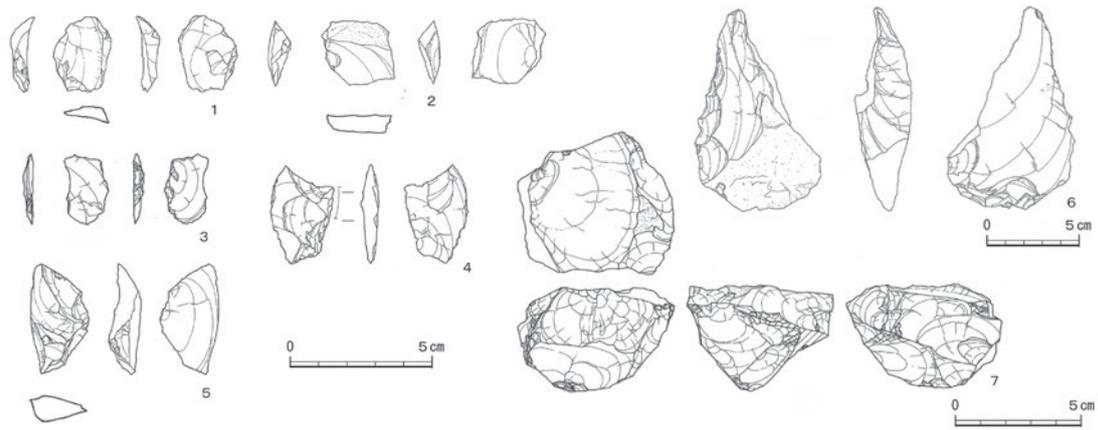
上野遺跡は、丹後半島の北端に発達した標高約25mの海岸段丘上に位置し、チャートを主な石器石材とする石器群である。台形石器、鋸歯縁石器、抉入石器に特徴付けられる小規模な石器群



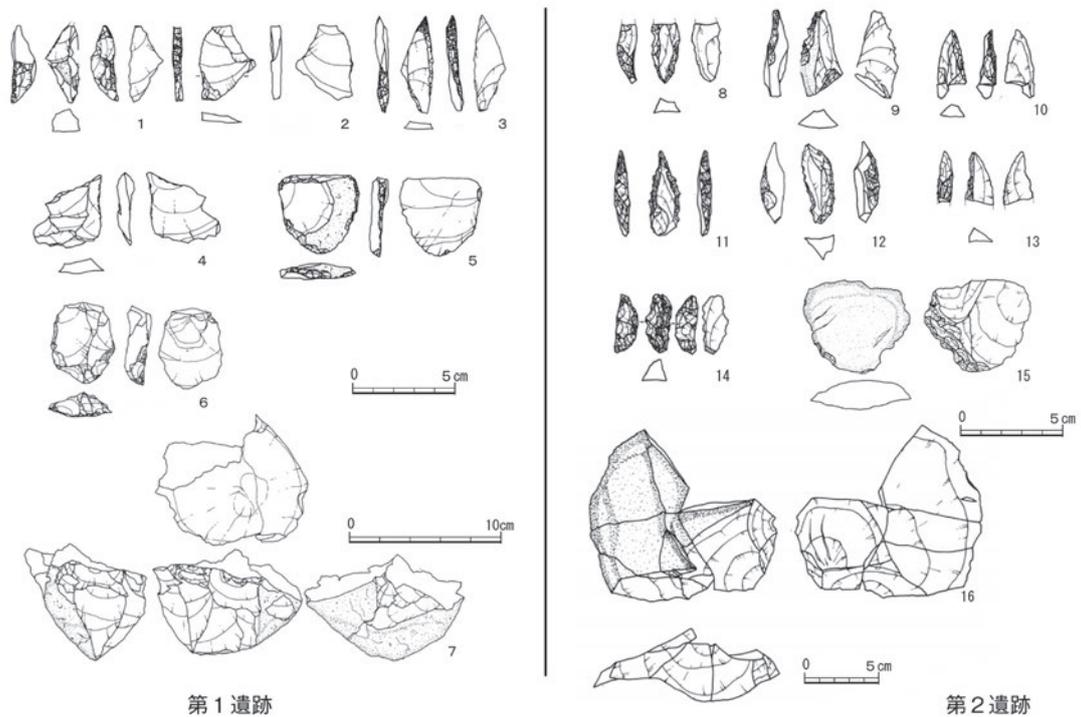
第3図 七日市遺跡出土石器



第4図 上野遺跡出土石器



第5図 沈目遺跡出土石器



第6図 金剛寺原遺跡第1遺跡・第2遺跡出土石器

である。剥片石器の素材剥片は、不定形な小ぶりの剥片で、石核も頻繁な打面転移によるサイコロ状を呈し、剥片を剥離する段階から定型的な石器を製作する意図は読み取れない。剥片石器は、剥片の素状を良く残し、縁辺にごく単純な二次加工を施している。二次加工は素朴で、型式学的に分類が難しい石器が多く確認できる。

(5)九州地方の石器群①(沈目遺跡・第5図)

沈目遺跡は熊本県中部に位置し、標高約29mの舞ノ原台地南縁部に立地する。輝緑凝灰岩が用いられる石器群で、剥片石器は大ぶりの「類ナイフ状石器」、スクレイパー、抉入石器で組成される。剥片は不定形でブロック状のものが大部分を占め、剥片に規格性はみられない。石核も頻繁な打面転移によって多面体となっている。剥片石器については、縁辺への素朴な二次加工に留まっている。

(6)九州地方の石器群②(金剛寺原遺跡・第6図)

金剛寺原遺跡は宮崎県南東部、宮崎平野の標高約120mの垂水台地上に位置する。流紋岩、頁岩が用いられる石器群で、第1遺跡は縦長剥片を素材としたナイフ形石器、スクレイパーで組成され、特にスクレイパーはサイドスクレイパー、エンドスクレイパー、ノッチドスクレイパーなど多彩である。第2遺跡では、横剥ぎのナイフ形石器、スクレイパー、角錐状石器で組成されている。剥片は石刃技法を基本とした縦長の定型的なもので、AT下位の様相とは大きく異なる。

(7)九州地方の石器群③(地蔵平遺跡)

北部九州地方に稀な多文化層遺跡であり、ATを挟んで4枚の文化層が存在している。AT下位から直上の文化層までは主要な利器の変化はないが、その上の間層を挟んだ文化層から、角錐状石器や横剥ぎのナイフ形石器、剥片尖頭器が出土している。

3. 各地方におけるAT下位の様相

以上の整理から竹佐中原遺跡、七日市遺跡、沈目遺跡の3つの遺跡は、①硬脆な石材を選択する、②単純な面構成の剥片石器を製作する、③頻繁な打面転移によるサイコロ(多面体)状石核を有する点で共通する。これら革新的な石器製作技術である石刃技法あるいは瀬戸内技法の出現以前の伝統的な石器群は、硬脆な石材をもちいた簡易な加工の剥片石器を製作する便宜的な石器生産体制であったといえる。次いで地域ごとのAT下位の様相について考察を進める。

(1)中部地方

竹佐中原遺跡の石器群には、八風山遺跡にみられる石刃が含まれていない。本遺跡にみられる石刃状の縦長剥片は、偶発的に剥離されたものも含まれるが、本遺跡で主として用いられる石材はホルンフェルスであり、石材の特性上、製作者が意図しない偶発的な破損がたびたび生じたことは想像に難くない。これを踏まえて石刃状剥片を積極的に評価するならば、石刃技法という新規技術の導入期にあたる石器群の様相を示しているのだろうか。竹佐中原遺跡の次の段階とも言える八風山遺跡では、石刃技法が完全に定着し、定型的な剥片剥離が安定しておこなわれている。しかし、本遺跡で確認できる技法は、打面調整をおこなう典型的な石刃技法とは異なり、素材となる分割礫の小口面から打点をジグザグするように事前の剥離で生じた稜を取り込んで石刃を量産するものであった。小口面から剥離を進める点に注目すれば、後に瀬戸内地方に成立した瀬戸内技法との関連を想定できる。また、石器製作に用いられている石材がサヌカイトに似たガラス質黒色安山岩である点も非常に示唆的である。

(2)近畿地方

七日市遺跡と上野遺跡は、両遺跡ともに伝統的な石器組成を基本としているが、七日市遺跡に瀬戸内技法の遡源ともいえるべき、サヌカイト製の有底横長剥片をもちいたナイフ形石器が確認できる点は極めて重要である。七日市遺跡の段階においては、サヌカイトをもちいた有底横長剥片、ひいては国府形ナイフ形石器の量産を模索しつつある石器群だといえる。一方、上野遺跡の石器群には、七日市遺跡のような石器の定型化を意図する様子は見当たらない。AT下位の伝統を色

濃く残した石器群であるといえよう。

(3)九州地方

沈目遺跡では、剥片剥離技術と剥片石器の整形加工にAT下位の伝統が読み取れるが、石器群を構成する各器種が大ぶりで、竹佐中原遺跡と共通する。大型かつ素朴な石器で組成することは研究史上では、遺跡を取り巻く環境の違いと評価している。しかし、中部地方と九州地方で気候や植生が同様のものではあったとは考えにくい。沈目遺跡と竹佐中原遺跡でもちいられている石器石材は、近畿地方にみられたチャートに比べ、剥離のコントロールがより難しく意図しない破損が発生するため、剥片を安定して剥離することができず、結果として大型の剥片石器が残されることになったのではないだろうか。一方、同じAT下位に属する地蔵平遺跡の資料群は、伝統の要素が薄く、続く後期旧石器時代後半期のような石材選択と石器生産が早期になされていたといえる。

AT下位における新規技術の流入は、中部地方でみられるように、剥片や剥片石器の形状の模倣が先行し、石材の選択に影響をあたえることが指摘できる。近畿地方では、石材は共通するが、剥片や剥片石器に定型的な技術を模索する集団が出現している。中部地方とは異なり、瀬戸内技法は内的な要請によって誘起した技術であるといえよう。最後に、瀬戸内技法が成立した直後の金剛寺原遺跡における技術流入について確認し、本研究のまとめにかえたい。

4. 瀬戸内技法の流入について

金剛寺原遺跡第1遺跡はAT直上のほぼ純粋な石刃技法の石器群であり、いわば石刃を伝統とする遺跡である。第2遺跡は第1遺跡の様相に加え、瀬戸内技法に関連する横剥ぎのナイフ形石器をともない、新規技術が流入した痕跡が読み取れる。伝統的にもちいられている石材で横長の剥片を狙った石核が出土していることから、瀬戸内技法を意識した剥片剥離がおこなわれつつあったといえる。この状況は、剥片や剥片石器の形状の模倣が先行している段階といえるだろう。なされつつある。一方、地蔵平遺跡では、AT降灰後に横剥ぎの剥片をもちいた剥片石器が出現している。しかし、主要な器種組成は通時的に変化しないことから、新旧の技術は並存することを示しているのだろう。

本研究では、旧習の技術をもつ集団が新技術を取り入れる様相について、AT下位の石器群における新技法の受容状況から、剥片剥離技術や器形の模倣が先行し、瀬戸内技法の流入についても同様であることと、新旧の技術は並存することもあわせて指摘した。資料数を増加させることで仮説を検証し、より詳細に石器製作技術の不易流行のありさまを追うことができよう。

(おもて・まさみち=当調査研究センター主任)

挿図出典：第1図 長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター 2010『長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 85、第2図 佐久市教育委員会 1999『八風山遺跡群』佐久市埋蔵文化財調査報告書 75、第3図 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2004『七日市遺跡』兵庫県文化財調査報告 272・兵庫県立考古博物館 2012『丹波市 七日市遺跡』兵庫県文化財調査報告 420、第4図 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2024『上野遺跡(第1～4次)』京都府遺跡調査報告集 193 第5図 城南市教育委員会 2002『沈目遺跡』城南町文化財調査報告 12、第6図 宮崎市教育委員会 1990『金剛寺原第1遺跡・金剛寺原第2遺跡』

デジタルカメラ写真測量等を使用した発掘現場の遠隔図化支援に関する実証的研究

面 将 道

1. はじめに

遺跡の基礎資料となる遺跡平面図、遺構断面図などの図化作業の担い手となる調査補助員は、特にここ数年において減少の一途を辿り、旧来的な手作業による図化作業は極めて困難となってきている。しかしながら、図

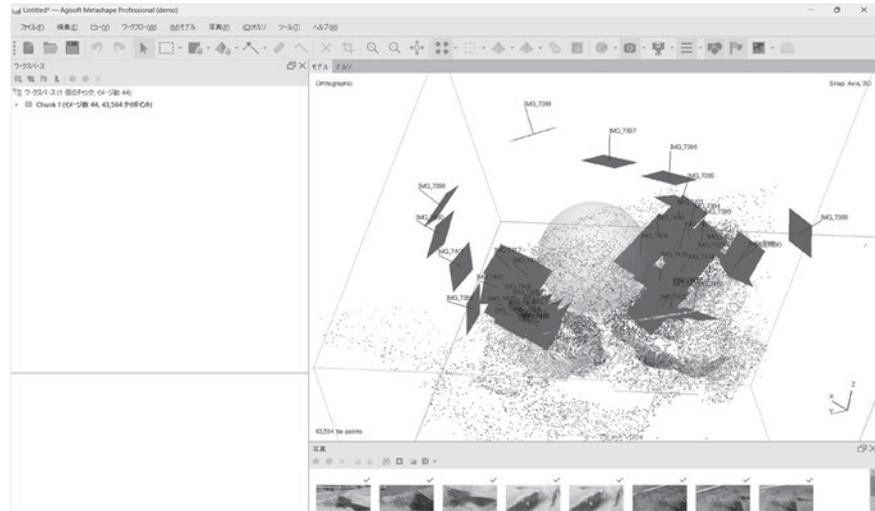


写真1 Metashape Professional

化作業の遅延による作業工程の遅滞は、埋蔵文化財行政の信頼を揺るがす事象であり、許されるべくもなく、従前と変わらない調査時間内での精確な調査成果が求められている。この問題を解消すべく、図化記録作業の迅速化を図るため、2010年代からデジタルカメラをもちいた三次元写真測量の導入が始まった。しかし、実際には測量機材をもちいた測量手法の作業手順の整理や、実際の作業にあたる現地担当者の習熟度、理解度に大きな差が生じ、全ての現場において広く三次元写真測量がおこなわれているとはいえない。そこで、本研究では現地調査担当者の支援体制を構築するための課題点の抽出を目的として実施した。

付表1 デジタル写真測量に必要な作業

	作業工程	作業場所	備考
①	写真撮影	屋外	オーバーラップ率80%を目安として撮影 撮影条件の均質化
②	地上基準点 (GCP) の計測	屋外	撮影対象に応じて設定
③	データ処理 (現地作業①・②の演算 処理)	屋内	演算処理の対象によっては、半日程度の時間が必要 PCでの作業となるため、電源の確保が必須
④	注記情報	屋外	土色・土質など (土層) 遺構の組み合わせ (平面図)
⑤	処理済みデータの図化	屋内・屋外	実見にもとづく観察の反映
⑥	⑤の成果物の製図	屋内	製図アプリケーションによる調製

2. 三次元写真測量の導入について

令和元年2月に文化庁が公表した『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について3』において、三次元写真測量をふくむ三次元デジタル測量は、「…取得が困難であった「実物の形状の詳細な記録」…」をなしうることが述べられている。しかし、この「実物の形状の詳細な記録」は三次元写真測量の基本的な作業が満足した場合に得られる成果であり、作業者が方法についての十分な理解が不可欠である。本項では、現地作業における三次元写真測量の支援が必要な工程について整理する。

現在、当センターで採用しているデジタル写真測量とは、Structure from Motion(SfM)と呼ばれる複数枚の重複した画像から、特徴点を抽出し、対象物の形状を復元する技術のひとつである。現地の作業では、①形状復元に必要なオーバーラップ率(約80%)を満たした複数枚の画像撮影、②復元されたモデルの大きさや位置情報を復元するため、グラウンドコントロールポイント(GCP)の設定が求められる。①、②で要件を満たしていない場合、不適切なモデル(記録)が生成されるため、非常に重要な作業であるといえよう。①、②の作業を経て、③コンピュータ処理による撮影対象の形状復元をおこなうことができる。なお、当センターではMetashape Professionalで形状復元とGCPの入力をあわせて実施し、作業の効率化を図っている。復元されたモデルは④現地での注記の反映を経て、⑤成果物として製図の作成にいたる(付表1)。これらの作業のうち、①、②、④は屋外での現地作業、③、⑤は屋内でコンピュータを使った作業となる。前項で触れたように、当センターで三次元写真測量を普及するにあたってのボトルネックは、③、⑤の工程で、この部分を支援する体制を構築する必要があることから次項の実験を試みた。

3. 三次元写真測量を用いた図化作業の支援に関する実験

三次元写真測量の図化について、屋内外にわたって作業が必要である点と、屋内でのコンピュータを用いた作業がある種の障壁となっている点について指摘した。遺跡、遺構の図化記録の作業的な性格を考えれば、本来的には即時即日の処理がなされるべきで、図化作業に関わる作業は、

付表2 使用した機材およびMetashapeの動作要件

	Metashape 動作要件	パソコン A (センターリース品)	パソコン B (著者私物)
C P U	4～12 コア Intel, AMD, Apple M1/M2, 2.0GHz 以上	Intel (R)Core (TM) i7-8700	Intel (R) Core (TM) i9- 13900H
メ モ リ	16～32 GB	32GB	16GB
G P U	NVIDIA もしくは AMD GPU (1024 以上の CUDA コア / シェーダープロ セッサユニット搭載)	NVIDIA GTX1650	NVIDIA RTX4060
演算処理にかか った時間	—	30 分	10 分
通信にかかった時 間 (アップロード)	—	16 分～30 分	7 分～10 分
通信にかかった時 間 (ダウンロード)	—	18 秒～20 分	3 分～10 分

担当者が現地において実施すべきであることは言うまでもない。しかし、室内作業で用いる機材は安定した電源を必要とすることや、ソフトウェアでの処理にかかる時間が想定以上で、現地でデータ処理ができない事例が発生することは想像に難くない。また、データ処理はソフトウェアによって全てが自動化されているわけではなく、

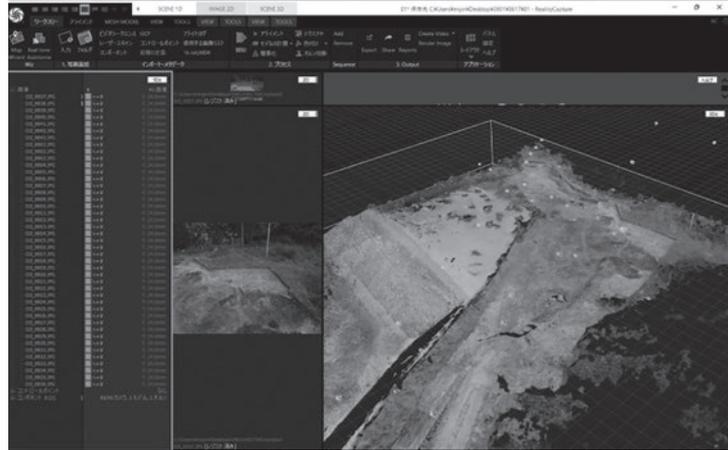


写真2 Reality Capture

適宜の調整が必要であり、かつ一定の習熟を要する。これらの問題点を抱えつつも、伝統的な調査補助員の手作業による図化の体制が崩壊しつつあり、三次元写真測量への切り替えはもはや不可避の状況であるといえよう。そのため、三次元写真測量における電源の確保や作業の習熟について問題点を解消すべく、現地作業で得られたデータを現場から離れた場所でおこなう図化作業の遠隔支援の実証実験を実施した。あわせて、図化作業の要ともいえるデータ処理について、コンピュータの性能が演算処理にもたらす影響も検証した。

実験するにあたって使用した機材は付表2のとおりでOSはWindowsである。現場と遠隔地の通信にはモバイルルーターを介して実施した。今回使用した試料は、土層図の作図支援を想定し、80%のオーバーラップを確保して撮影した30枚の画像データ (JPEG方式) を用いた。データ総容量は約240MBで、外部サービスを利用し、現場から遠隔地へ相互のデータ受け渡しをおこなった。また、モデル作成の要件として、写真のアラインメント、高密度クラウド生成、テクスチャ生成、タイルモデル生成までを中品質 (中精度) で実施した。

本研究で用いている機材の性能については、両者ともにMetashape Professionalの開発元であるAgisoftが公開している動作システム要件を満たしているが、演算処理にかかる時間について大きな差が認められた。これについては、特に画像処理装置であるGPUの性能差が如実に反映された結果であると考えられる。センターリース品でも処理にかかる時間は30分程度であり、実用にひとまず耐えうるといえるだろう。

データの送受をともなう遠隔地図化支援を実施するにあたって、最も重要な部分である通信にかかった時間は、両者ともに大きなばらつきがみられた。通信に用いた機材であるモバイルルーターの性能あるいは、データの通り道の広さともいえるネットワーク帯域幅の広狭を反映した結果であろう。今回は、付表1の③までのフォローアップを意識した実験であり、現地観察に基づく結果の反映までは検証していない。土層図でいえば土色や土質、平面図においては遺構番号の反映や建物プランの復元といった情報は、デジタルモデルから読み取ることが難しく、現地との情報交換は不可欠である。その際、安定した通信環境を整備することで作図支援の速度向上に大きく寄与できるものと考えている。

4. おわりに

本研究が目指す三次元写真測量を用いた図化作業の遠隔支援体制は、通信環境に問題がみられたものの、現在の状況でも十分に構築が可能であることを確認した。デジタル写真測量をおこなう際には、適切な画像データを取得する必要がある、モデル構築に適した写真撮影については、現地で撮影せざるを得ない。三次元写真測量は、現地での作業精度がデジタル処理で得られる成果物に直接的に反映されるため、遠隔地支援体制を構築する以前に、デジタル写真測量の方法について最低限の理解を担当者間で共有しなければならないだろう。

また、近年では条件付きではあるものの、本研究でもちいたソフトウェアと似たような環境でフォトグラメトリをおこなえるソフトウェアが無償で使用可能となっている（Reality Capture^(注1)など）。フォトグラメトリがより手軽となり、デジタル写真測量に必要な作業の習熟をおこなうことができつつある。今後は、遠隔地支援体制の構築と、デジタル写真測量の方法を啓発する方策について模索を進めていきたい。

本研究の目的とは異なるが、デジタル写真測量による図化作業がより多くの現場でなされた場合、図面作成にかかわる作業のすべてがデジタルボンとなることが想定される。マイラー原紙に直接書き込むことで記録された実体をもつ情報に比べ、電気信号に過ぎないデジタルデータは極めて脆弱で、その保管については、今後より活発に広く議論すべきであろう。

(おもて・まさみち＝当調査研究センター主任)

注1 RealityCapture は 2024 年 4 月から年間総収益が 100 万米ドル（約 1.4 億円 2024 年 9 月現在）を超える企業及び個人以外が無料で制限なく使用可能（要 Epic Games アカウント）。

参考文献

- 鳥海幸一 2022『フォトグラメトリの教科書』技術の泉シリーズ インプレス R&D
- 津留宏介、村井俊治 2020『デジタル写真測量の基礎～デジカメで三次元測定をするには 改訂第2版』日本測量協会
- 三戸部秀樹 2019「(公財)山形県埋蔵文化財センターにおけるデジタル技術の利用例について」『研究紀要』第11号 (公財)山形県埋蔵文化財センター
- 国土地理院 2017『無人航空機 (UAV) を用いた公共測量～ UAV 写真測量～』
- (独) 国立文化財機構奈良文化財研究所 2020『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用』奈良文化財研究所研究報告 24
- (独) 国立文化財機構奈良文化財研究所 2023『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用』奈良文化財研究所研究報告 37
- 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会 2017『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について 1 (報告)』
- 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会 2017『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について 2 (報告)』
- 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会 2019『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について 3 (報告)』

京丹後市平遺跡の古墳時代調査成果の整理

菅 博 絵

1. はじめに

平遺跡は、京丹後市北部の宇川河口左岸の日本海に面した砂丘上に位置する縄文時代から中世にかけての集落遺跡である(第1図)。遺跡の周辺には中世の山城である平城跡や宇川上野城跡、中世城館である宇川中山城、旧石器時代～平安時代の複合遺跡である上野遺跡などが所在する。

平遺跡は、開墾中に土器が出土することに気づいた地主が地元宇川中学校教諭へ連絡し、峰山高校教諭へ通報されたことにより発見された。昭和37年に同志社大学酒詰伸男教授へ峰山高校教諭から縄文土器らしきものを見つけたので調査を希望するという旨の連絡があり、同年12月に同志社大学考古学研究会による試掘調査が実施された。試掘調査の結果、古墳時代の遺物を含む掘り込みと縄文時代後期から晩期の遺物を含む層が層位的に検出された。昭和38年に同研究会が前年度の試掘調査地を拡張して調査(第1次調査)し、昭和40年に帝塚山大学考古学研究室が昭和38年のトレンチの東側に平行したトレンチを設定して調査を実施した(第2次調査)。調査の結果、縄文時代前期から古代までが層位をもって堆積していること、東日本の縄文土器が含まれることが確認された。縄文時代の標式資料として「平式土器」が設定された^(注1)。

平成8年には一般国道178号線丹後リゾート関連道路(丹後半島周遊道路)の改良事業に伴い当調査研究センターが発掘調査を実施した(第3次調査)。調査の結果、調査区北東隅の包含層から縄文時代早期から晩期の土器が層位的に出土したため、土器編年を示すとともに平遺跡における縄文時代の集落の変遷を復元した。また、調査区西側では古墳時代の祭祀遺構と考えられる礫敷



第1図 遺跡位置図
(国土地理院 1/25,000 地理院タイル)

遺構や溝、土器溜まり、中世の水田遺構などが検出された(第2図)^(注2)。

本論では、第1次調査から第3次調査の古墳時代の調査成果を整理し、第2次調査で出土した須恵器の一部を紹介する。

2. 古墳時代の遺物包含層

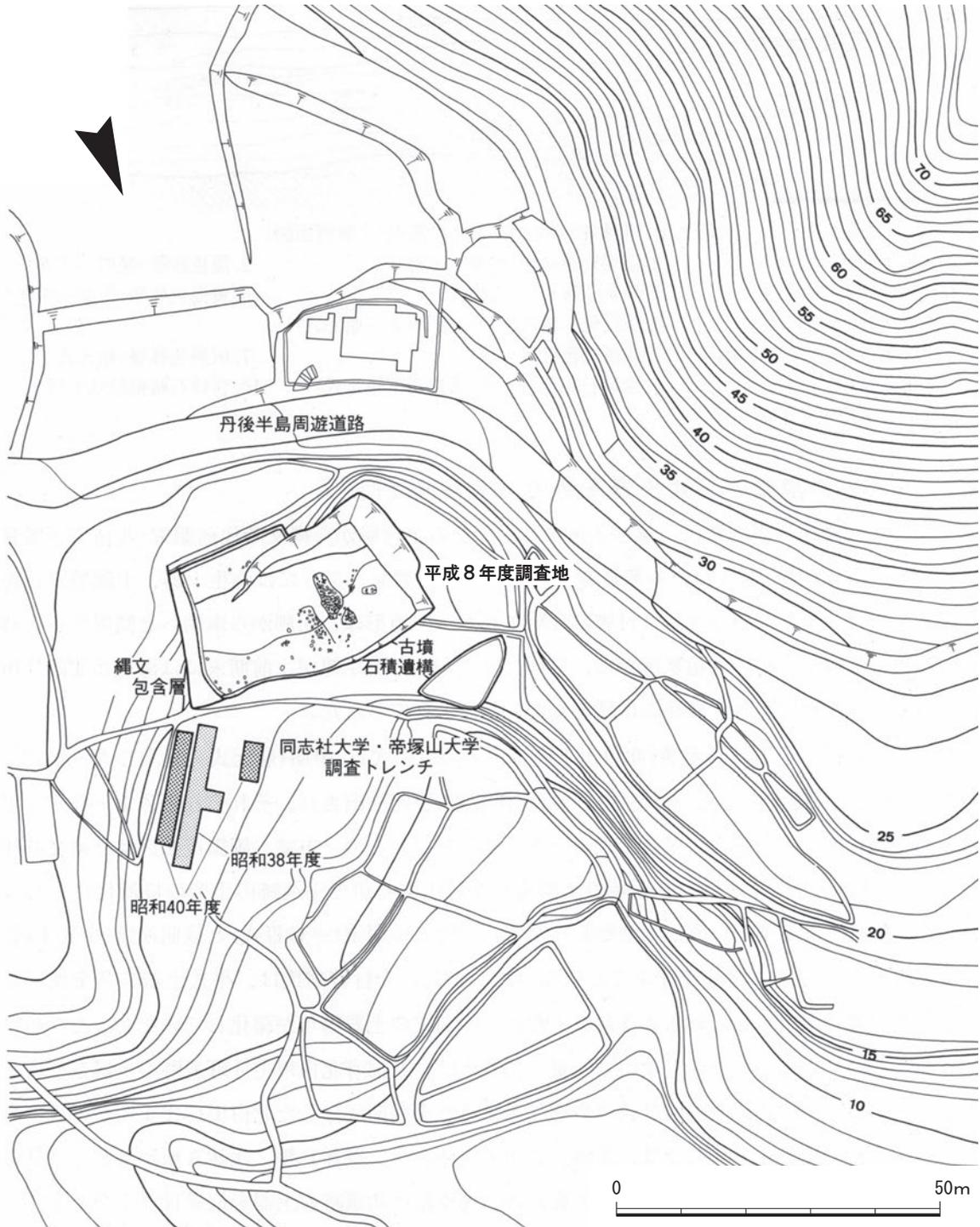
昭和37年度の試掘調査では、2m四方のトレンチを3か所に設定して試掘調査を実施し、長さ3m・幅1.5mの掘り込みから須恵器と鉄製品残片等が出土した。

翌年の昭和38年度の本調査では、幅3m・長さ23mの「ト」の字状のトレンチを設定し、

付表1 平遺跡調査回数一覧

回数	調査期間	調査面積	調査機関	報告書等
試掘	昭和37年12月中旬	(16㎡)	同志社大学考古学研究会	同志社考古第3・4号
1次	昭和38年5月	(78㎡)	同志社大学考古学研究会	
2次	昭和40年7月28日～昭和40年8月10日	(72㎡)	帝塚山大学考古学研究室	京都府丹後町平遺跡調査概要 京都府遺跡調査概報第79冊
3次	平成8年8月26日～平成8年12月15日	1,000㎡	当調査研究センター	

() の調査面積はトレンチを設定した長さから算出

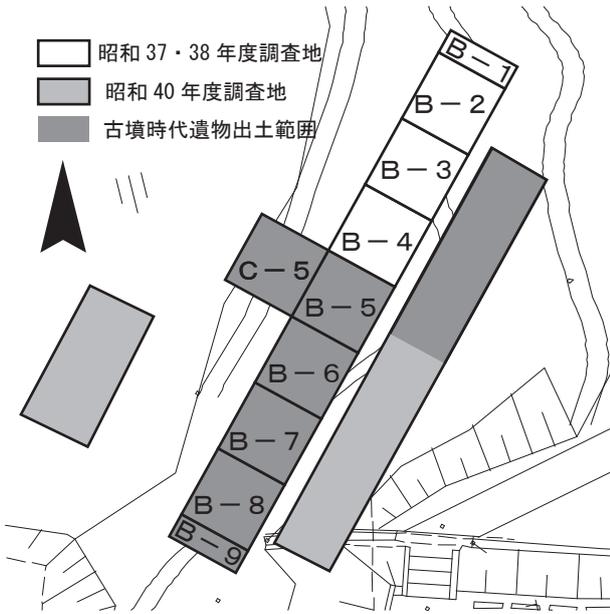


第2図 調査地位位置図(河野1997に一部加筆)

一区画 3 m 四方、両端は 3 m × 1 m の区画を設けた。区画名は、北から B-1 ~ 9 区とし、5 区の西側に C-5 区とした。B-6 ~ 9 区・C-5 区から須恵器、土師器が縄文晩期の土器と共に出土した(第 3 図^(注3))。

第 2 次調査では、2 層上層・淡黒褐色層から弥生土器、須恵器、土師器、縄文晩期の土器がともに出土した(第 4 図網掛け部分^(注4))。

第 3 次調査では、古墳時代中期末~後期の溝と礫敷遺構から田辺編年 TK23 型式併行期の須恵器や土師器、丹塗り土器、ミニチュア土器、製塩土器、土錘、土玉、白玉が出土した。

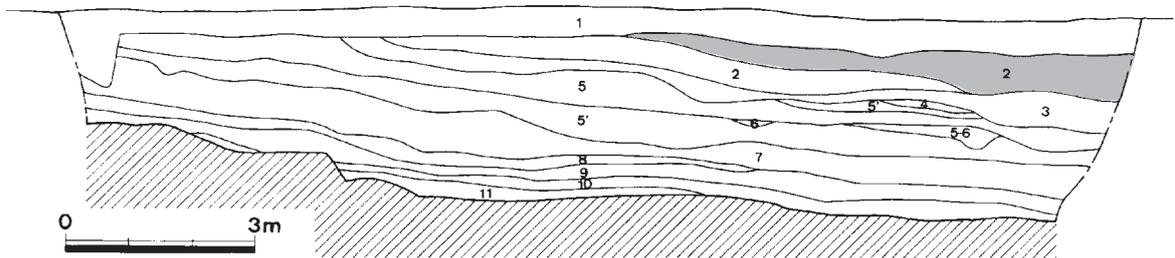


第 3 図 第 1 次調査区画設定および古墳時代遺物出土範囲図

第 1 ~ 3 次調査地の地形から、第 1・2 次調査のトレンチは北から南に向かって低く傾斜し、第 3 次の調査地は南から北へ向かって低く傾斜する地形であり、第 1・2 次調査のトレンチと第 3 次調査の調査区の間には、南東から北西に向かって低く傾斜するくぼ地または谷地形があったと推定される。第 1・2 次調査の縄文土器とともに須恵器・土師器が出土した 2 層上層と第 3 次調査の古墳時代遺構検出層は同一層であると考えられ、遺跡の北東側には、縄文時代晩期の層の上に弥生時代~古墳時代の包含層が広く堆積していると推測される。

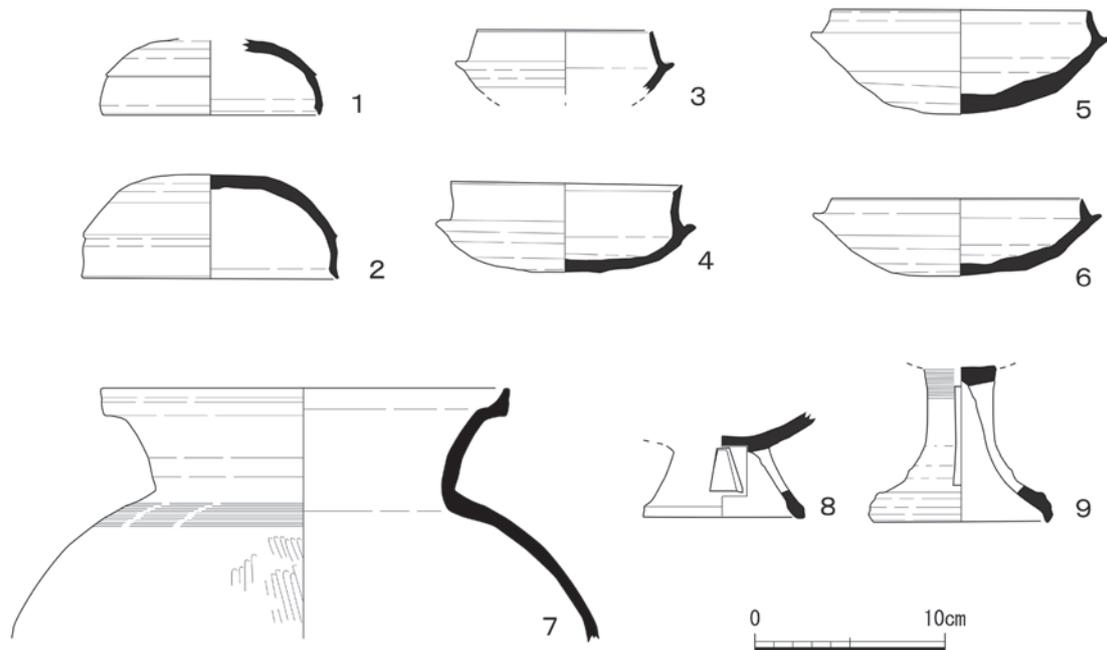
3. 第 2 次調査の出土須恵器

第 2 次調査で出土した須恵器について概観する。遺物はいずれも 2 層上層から出土したもので



- | | | |
|--------------------|-------------------------|------------------|
| 1. 黒褐色層 | 2. 淡黒褐色層 (古墳~縄文晩期) | 2. 黒褐色層 (晩期: 下層) |
| 3. 灰黒色砂層 (平式) | 4. 黒色砂層 (元住吉山式) | 5. 黄褐色砂層 (中津-平式) |
| 5-6. 黒褐色砂層 (平式) | 6. 灰白色~暗灰色砂層 (黒木II~船本式) | |
| 5'. 黒褐色砂層 (後期: 上層) | 5' 淡黒褐色砂層 (下層) | |
| 8. 黒褐色層 (大歳山式) | 9. 含碎石黒色粘土層 (北白川下層III式) | 10. 含碎石暗褐色粘土層 |
| 11. 含碎石黄褐色粘土層 | | |

第 4 図 第 3 次調査土層断面(河野1996に一部加筆)



第5図 第2次調査出土須恵器

ある(第4・5図)。

1・2は杯蓋である。1は器径が11.2cm、器高が4.2cmを測る。2は器径が13.4cm、器高が5.5cmを測る。肩部に鋭い稜を持ち、口縁端部はわずかに凹む。外面は肩部まで回転ヘラ削りを施す。田辺編年のTK23・47型式併行期と考えられる

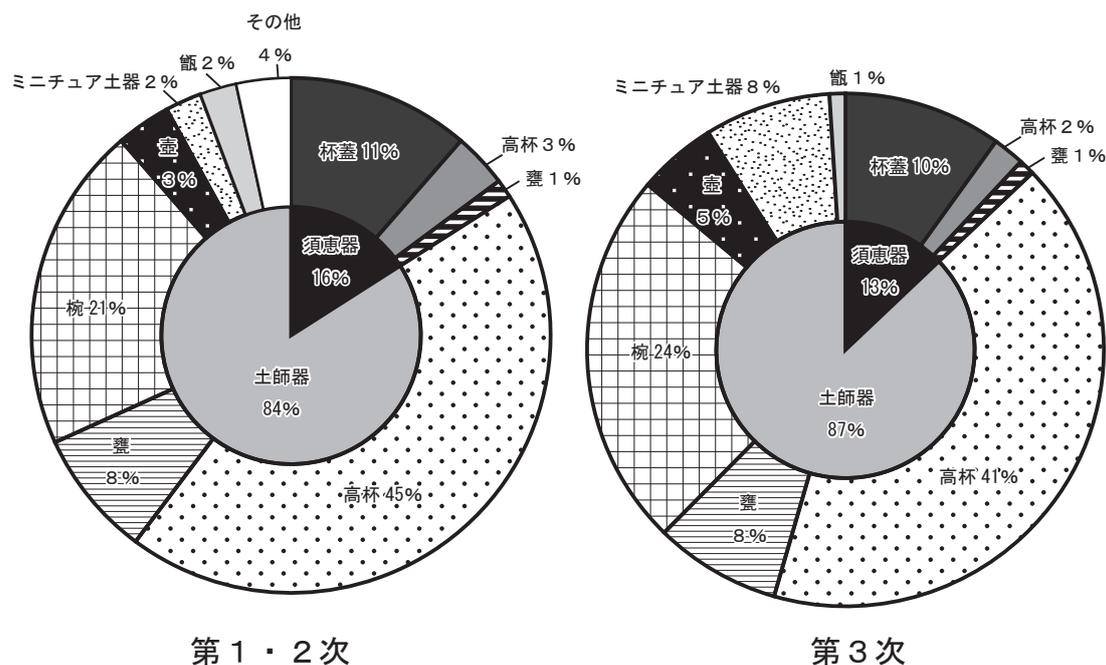
3～6は杯身である。3・4はかえりが高く立ち上がり、受け部付近まで回転ヘラ削りを施す。田辺編年のTK23・47型式併行期と考えられる。5は3・4と比較すると立ち上がりがやや短く、口縁端部は丸くおさめる。器径が13.6cm、器高が5.5cmを測り、回転ヘラ削りを体部の中ほどまで施す。田辺編年のMT10型式併行期と考えられる。6は器径が13.1cm、器高が4.2cmを測る。立ち上がりは短く、口縁端部は丸くおさめる。田辺編年のTK43型式併行期と考えられる。

7は甕である。肩部にカキメを施し、体部には平行タタキを施す。内面は口縁部から頸部は回転ナデを、肩部から体部へは同心円タタキを施す。口縁部から肩部にかけて自然釉が付着する。

8・9は高杯である。いずれも3方の方形透かしを持つ。8は田辺編年TK23・47併行期と考えられ、9は田辺編年MT15併行期と考えられる。

4. 古墳時代の遺物の組成

第1・2次調査で出土した土器を検討していく。なお、高杯については、杯部または脚部のみのものは、二重計上を避けるため脚部のみを集計した。その結果、須恵器が蓋杯10点、高杯3点、甕1点、計14点が出土し、土師器は、高杯39点、甕7点、椀18点、壺3点、ミニチュア土器2点、甗2点、底部1点、蓋1点計73点が出土している。須恵器が16%で土師器が84%と圧倒的に土師器が多く出土し、その中でも土師器高杯が45%と最も高い割合を占め、次に土師器椀が21%となる(第6図)。



第6図 第1・2次調査出土土器の器種比率

次に第3次調査で出土した須恵器を検討する。須恵器が、蓋杯10点、高杯2点、甕1点、計13点が出土し、土師器は、高杯42点、椀24点、壺5点、甕8点、ミニチュア土器8点、甌1点、計101点が出土した。須恵器が13%、土師器が87%と土師器が多く出土し、報告書内でも指摘されるとおり土師器高杯が41%と高い割合を占め、次に土師器椀が24%と第1・2次調査で出土した土器とほぼ同様の割合を示す。

第1・2次調査と第3次調査では、出土場所が包含層か遺構埋土の差があり、一概に遺跡の傾向を示しているとは言い難い。しかし、土師器高杯や椀といった食膳具が高い割合を占め甕や甌といった調理具が少ない点、土器の表面が摩滅を受けていない点、土師器高杯・椀において丹塗りしたものが認められる点が共通する。

5. まとめ

第1～3次調査区では、南東から北西に向かって低く傾斜するくぼ地または谷地形の中に縄文時代前期から晩期までの土器が層位的に堆積する。これらの土器は表面が摩滅しておらず付近に集落があったと推定される。古墳時代の土器も縄文土器と同様に表面が摩滅を受けておらず付近からの流入と考えられる。第1・2次調査で検出した古墳時代の遺物は、第3次調査で出土した土器と同一時期のものを含んでおり、出土した土器の器種も類似することから第3次調査で検出した遺構からの流入あるいは、東側砂丘段丘面から流入したものと推測する。

須恵器においては、田辺編年のTK23・47併行期からTK43併行期と時期幅をもつ須恵器が出土しており、長期間調査地の付近で人間活動が行われたと考えられる。

また、土器の組成は土師器の高杯や椀の食膳具が多数の割合を占め、丹塗り土器・ミニチュア土器の存在など、一般的な集落遺跡と異なる様相を持つ。試掘調査で検出した方形の溝の存在、

聞き取り調査においてトレンチを設定した畑地にはかつて小山があり完形の土器や鉄刀が出土したとの報告があることなどから、第1・2次調査地付近には古墳もしくは、第3次調査で検出したような礫敷遺構や土器を供献する溝などの祭祀遺構が存在した可能性が高い。

平遺跡では、平成30年度に浜丹後線(上野平バイパス)民安関連道路新設改良業務に伴う発掘調査が実施された。今後縄文時代以降の遺物整理を進めることで遺跡の性格を明らかにしていく手がかりが得られるであろう。

謝辞 本稿を作成するにあたり資料調査に協力していただいた京丹後教育委員会に多大なご配慮とご協力をいただきましたこと、末筆であります厚くお礼申し上げます。

(すが・ひろえ = 当調査研究センター主任)

注1 堅田 直編 1966『平遺跡調査概要』考古学シリーズ I 帝塚山大学考古学研究室

注2 河野一隆 1997「1. 平遺跡」『京都府遺跡調査概報』第79集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注3 原 博 1964『同志社考古』第3・4号 同志社大学考古学研究会

注4 注3に同じ

注5 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群 I』研究編集第10号 平安学園

注6 注3に同じ

京都府文化財保護課の発足

磯野 浩光

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、簡易に述べると、府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用、研究、普及啓発などのために、府教育庁指導部文化財保護課の業務の一部を財団法人として整備したものである。昭和56年(1981)4月の業務開始以来、令和6年(2024)で設立43年を迎えた。初代理事長は、建築史家として著名な故・福山敏男博士(1905～95)である。では、その「母胎」とも言える府文化財保護課はいつ発足したのであろうか。

府教育委員会(以下府教委という)発足(昭和23年11月)後の事務局機構の変遷を見ると、昭和27年(1952)4月の機構改編で教育次長が置かれ、同年6月の機構改編では、府教委事務局は府教育庁と改められている。この時の機構図に初めて文化財保護課が記載されているので、昭和27年の機構改編で発足したのではないかと、ひとまず推測される。

初代課長は、日本古代、中世史学、古文書学の泰斗である故・赤松俊秀博士(1907～79)である。氏は第2次大戦前から府に勤務(学務部社寺課など)して、府内の文化財の調査、研究、保護に尽力し、戦後全国で初めて設置された文化財保護課の課長に就任したのである。同氏の略年譜には、昭和24(1949)年4月1日に文化財保護課長に補せられ、昭和26(1951)年8月15日に府を退職とあり、すでに昭和24年4月に文化財保護課は発足していたのかと思われる。

そこで改めて「京都府公報」を検索すると、昭和25年(1950)9月1日第2413号に次のとおりあり(原文は縦書)、この日に文化財保護課が発足したことが確認できるのである。

「 京都府教育委員会基本規則の一部を改正する規則をここに公布する。昭和二十五年九月一日 京都府教育委員会 京都府教育委員会規則第五号(略) 京都府教育委員会基本規則(昭和二十四年京都府教育委員会規則第一号)の一部を次のように改正する。
第十九條中「国宝保存課」を「文化財保護課」に改める。

附則 この規則は、公布の日から施行する。」

以上、小稿に係る府教委事務局の機構改編等は、次のとおりである。

	年 月 日	概 要	文化財保護行政の所管
1	昭和 23 年 11 月 1 日	府教委の発足等	成人教育部文化課
2	〃 24 年 4 月 1 日	機構改編	管理部国宝保存課
3	〃 25 年 4 月 1 日	〃	指導部国宝保存課
4	〃 25 年 9 月 1 日	国宝保存課を文化財保護課に改める	指導部文化財保護課
5	〃 27 年 4 月 1 日	両部長に代わり教育次長を置く等	文化財保護課
6	〃 27 年 6 月 24 日	事務局を教育庁に改める等	〃

よって、先の赤松氏にかかる昭和24年4月1日の発令は国宝保存課長のそれであり(同年5月4日の「京都府公報」に登載)、同25年9月1日に改めて文化財保護課長に発令された、とするのが正しいのである。赤松氏が初代の文化財保護課長であることは動かない。^(注4)

第2次大戦及び戦後の混乱は、文化財の保護にとっても大きな危機であった。昭和24年1月の法隆寺金堂壁画の焼損により、新法の制定が急がれ、昭和25年5月30日に文化財保護法が公布された。同法は、先行の史蹟名勝天然紀念物保存法(大正8年制定)、国宝保存法(昭和4年制定)及び重要美術品等の保存に関する法律(昭和8年制定)を統合した包括的な法で、同年8月29日に施行され、同日文化財保護行政を所掌する文化財保護委員会(行政委員会、文化庁の前身)が発足した。

府教委は、文化財保護行政の所管課を、国宝保存課(国宝保存法に依拠)と定めていたが、昭和25年7月2日に国宝金閣が放火で全焼したこともあり、国による新法の施行及び新機関の発足と軌を一にして、全国で初めて文化財保護課を設置し、^(注5)課員を2倍に増員して22名とし、^(注6)文化財保護行政の一層の推進を図ったのである。課の名称を新法に合わせる^(注7)とともに、体制を充実させたことに、府教委の文化財保護行政推進に対する強い決意と意欲が感じられる。なお、発足時の事務分掌は11項目であったが、^(注8)文化財保護法との整合等から5項目^(注9)となった。ちなみに発足後70年以上経過した令和6年7月現在、課員は54名^(注10)、事務(分掌)は8項目^(注11)である。

以上、府文化財保護課は、文化財保護法及び文化財保護委員会と同時に発足(昭和25年9月1日)したこと、全国で初めてその名を冠したことを簡単に紹介した。世界に誇る京都の貴重な文化財を次世代に良好な状態で引き継ぐことは、我々の重要な責務である。同じく文化財保護行政にかかる重要な経緯についても記録し、伝えていかねばならない。

(いその・ひろみつ=当調査研究センター理事)

注1 『京都府教育史 戦後の教育制度沿革』(京都府教育研究所 1956年4月)

『京都府教育委員会沿革小史(年表)』(京都府教育庁管理部総務課 1968年11月)

注2 林屋辰三郎「『寺宝調査』のころ」(『京博』第4号 京都国立博物館 1982年3月)

注3 『赤松俊秀教授退官記念国史論集』(1972年12月)。『国史大辞典』第15巻上(吉川弘文館 1996年6月)。
『親鸞伝の研究』赤松俊秀著作集第1巻(法蔵館 2012年4月)。なお、赤松氏は府を退職した翌8月16日に文部教官に任じられ、京都大学助教授に補せられている。

注4 以降、現在の石崎善久課長まで計17名の課長を数える(令和6年7月現在)。

注5 『文化財要覧 昭和26年版』284頁(文化財保護委員会 1952年3月)。奈良県は文化財保存課である。

注6 国宝保存課当時の職員は11名(『京都府職員録』、1950年3月)であったが、文化財保護課となった22名(『同』、1951年3月)に倍增されている。

注7 『京都府教育委員会所管行政理解のための手びき』(京都府教育庁 1955年8月)

注8 国宝保存課の事務分掌(「府教委事務局処務規程」、昭和25年7月11日施行)を適用。

注9 「府教育庁処務規程」(昭和27年9月20日施行)

注10 『京都府職員録』(2024年6月)

注11 「府教委基本規則」(令和5年4月1日施行)

令和5年度発掘調査略報

18. 平遺跡第7次

所在地 京丹後市丹後町平地内

調査期間 令和5年8月23日～令和5年12月11日

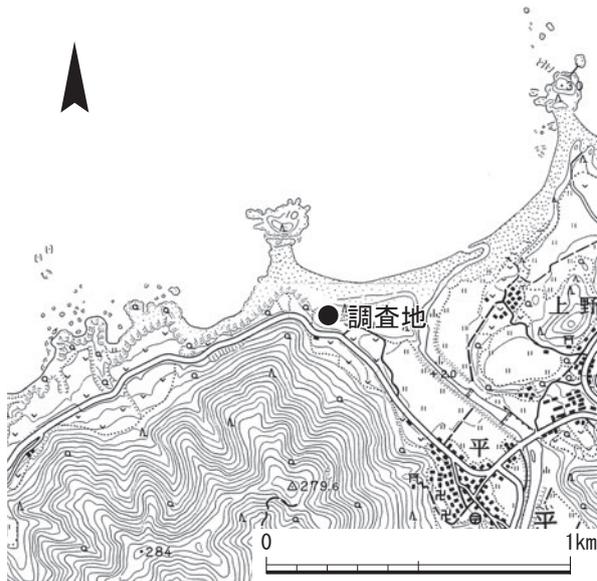
調査面積 1,180㎡

はじめに 平遺跡は、京丹後市北部の宇川河口左岸の日本海に面した砂丘上に位置する縄文時代から中世にかけての集落遺跡である。これまでの調査で、縄文時代早期から晩期にわたる遺物包含層や縄文晩期の埋甕、石組炉、古墳時代後期の礫敷遺構が検出されている。中でも縄文時代中期末の土器は平式土器として標式資料とされる。

今回の調査は、浜丹後線(上野バイパス)民安関連道路新設改良業務委託に伴い、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施したもので、令和4年度に実施した小規模調査で遺物包含層が認められたトレンチの周辺を拡張して面的調査を行った。

調査概要 今回の調査区は、谷部に立地し、令和4年度調査で古墳時代から縄文時代の遺物包含層を確認した3・4トレンチを包含する。調査の結果、中世の掘立柱建物1棟、複数の柱穴、溝1条、縄文時代から中世にかけての複数の土石流堆積層や谷堆積層を確認した。

調査区北西側では、西側段丘面から流入したと考えられる縄文時代前期～古墳時代後期の遺物を含む包含層が厚く堆積していた。調査区北側では、遺構面の大半が中世の遺物を含む土石流により消失していたが、古墳時代前期の遺物を含む谷堆積層がわずかに認められた。調査区南側では、桁行1間、梁行き3間の掘立柱建物を検出したほか、建物の復元には至らないものの柱根を含む柱穴を複数検出した。その下層からは、古墳時代中期と縄文時代晩期以前の谷堆積と土石流堆積層を複数確認した。



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 丹後平・丹後中浜)

堆積層を複数確認した。

まとめ 今回の調査では、縄文時代から中世にかけての複数の谷堆積と土石流堆積層、中世の建物跡を確認した。

調査地はたびたび土石流災害にさらされ、谷の方向が変わることが明らかとなった。谷堆積層から出土した土器が摩滅していないことから付近から流入したものと考えられ、周辺では、縄文時代～中世にかけて人びとの活動が行なわれたと考えられる。今回の調査では、平遺跡の土地利用を解明する上で貴重な知見を得ることができた。(菅 博絵)

19. カンジョガキ遺跡第4次

所在地 京丹後市大宮町周枳地先

調査期間 令和5年8月1日～令和6年2月29日

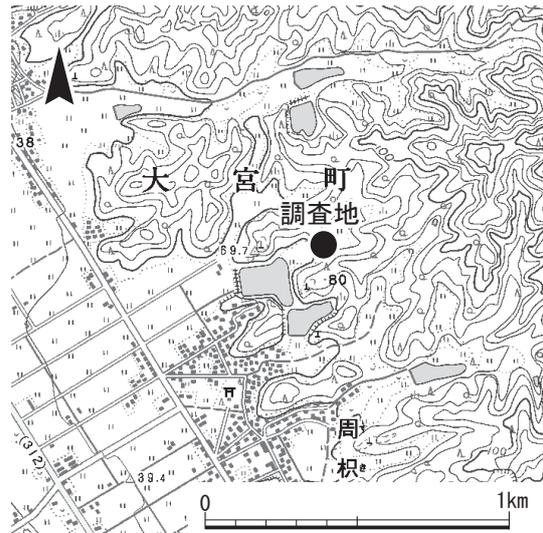
調査面積 3,000㎡

はじめに カンジョガキ遺跡は、竹野川右岸の丘陵部と谷部に位置する遺跡である。一般国道312号大宮峰山道路整備事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて調査を実施した。

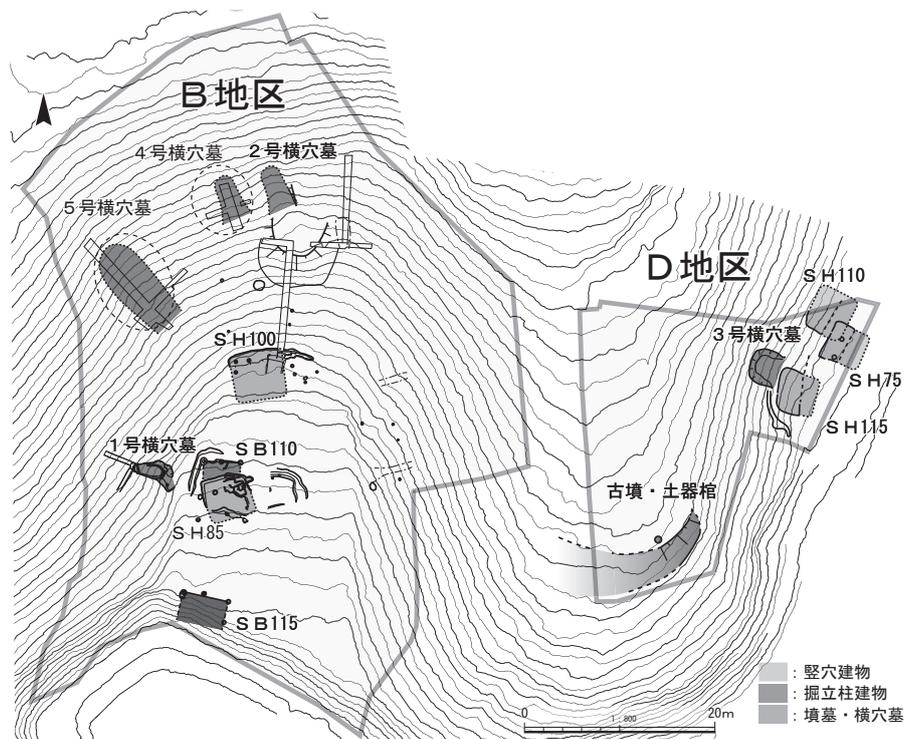
前年度検出した1号横穴墓北側斜面(B地区)、A地区北東側丘陵裾部(C地区)、A地区東端の北側丘陵裾部(D地区)、A地区南側の丘陵裾部(E地区)を対象とした。

調査概要

B地区 横穴墓1基(2号横穴墓)と地滑り等により横穴墓が流失したと考えられる痕跡2か所



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 峰山)



第2図 B・D地区遺構配置図

(4・5号横穴墓)を検出した。2号横穴墓は、フラスコ形の平面形を呈し玄室長2.2m・玄室最大幅2.4m、羨道長1.6m・幅1.1mを測り、羨道部の前面に土壇上に盛土した前庭部が付く。出土遺物から7世紀中頃に築造され、最終追葬は火葬骨の出土から8世紀前半と考えられる。

C地区 第3次調査で多くの遺構・遺物が検出されたため、丘陵斜面での遺構の広がりを確認するため2か所の小規模調査を実施し、遺構範囲を確認したのち面的な掘削を行った。少量の弥生土器と飛鳥時代を中心とした遺物が多く出土した。調査は令和6年度に継続して実施する予定である。



D地区3号横穴墓作業風景

D地区 面的な調査と合わせて小規模調査を実施し、調査範囲を確定し

た。丘陵東肩部付近で土器埋納土坑、その下方で削平された古墳の基底部と考えられる削り出し面を確認した。基底部から考えられる古墳の規模は約20mを測る。土器埋納土坑は、径0.65m・深さ0.38mを測り、土坑内に口縁を南西に向け古墳時代中期の土師器壺を横位で埋納していた。土器棺と考えられる。東斜面では3号横穴墓(巻頭図版)と方形竪穴建物4棟を検出した。横穴墓の玄室は、フラスコ状の平面形を呈し長さ1.6m、幅1.85mを測る。前庭部は、幅1.9m・長さ1.5mで「コ」字状に削り出している。2号横穴墓のように羨道部を有しない。出土遺物から7世紀後半に築造され、火葬骨が出土する8世紀前半に最終追葬されたと考えられる。竪穴建物は、一辺5m前後の規模を有するが、畑として開墾を受けたため全体の1/3～1/4程度が残存する。

E地区 開墾と圃場整備に伴う農道造成により遺構は確認されなかったが、少量の土師器片が出土した。

まとめ B地区とC地区で検出した1～3号横穴墓は7世紀前半から後半にかけて築造され、8世紀前半まで利用が続いた。平面形からも1号横穴墓から3号横穴墓にかけての変遷をたどることができる。

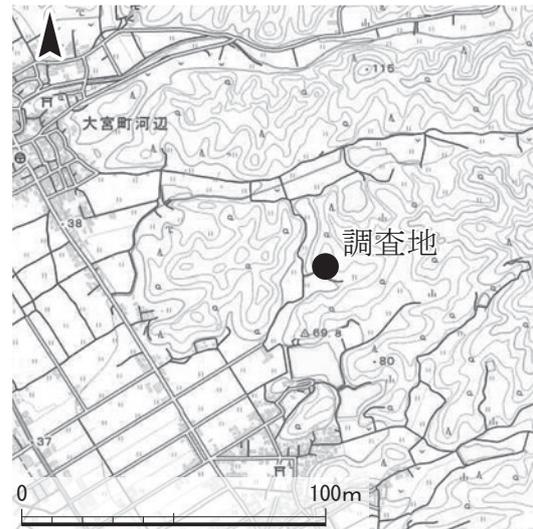
C地区では各横穴墓の築造時期に相当する土器が多く出土しており、D地区の竪穴建物は横穴墓築造以前の住居であった。集落と墓の立地や谷の利用を考える上で、重要な調査となった。

(増田孝彦)

こちゅうだ 20. 小中田古墳群第3次

所在地 京丹後市大宮町河辺地先
 調査期間 令和5年12月4日～令和6年2月29日
 調査面積 1,000㎡

はじめに 小中田古墳群は、竹野川の中流域の右岸に所在する35基からなる古墳群である。調査は、古墳群の南東丘陵部先端のA地区(第1次・第2次調査地)に対して、その東側の谷部に広がる平坦面と緩斜面をB地区(第3次調査地)として実施した。調査は一般国道312号大宮峰山道路整備事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 峰山)

調査概要 まず、合計150㎡の小規模調査区を谷部に2か所設定して調査を行った。その結果、対象地西側に幅3mの逆L字状で設定した1トレンチおよび対象地東側に幅3mの東西方向の長方形で設定した2トレンチのいずれからも古墳時代から平安時代頃の土師器・須恵器等が出土し、竪穴建物の可能性のある大型土坑や溝状遺構、ピット、焼土等を複数検出した。府文化財保護課と協議の上、谷部全体に調査範囲を拡大し、調査区名をB地区として面的な調査を行った。B地区は南にゆるやかに傾斜する谷地形を呈しており、東西も調査地中央に向かって緩やかに傾斜する。調査地中央から西側で褐灰色細粒砂の遺物包含層を切り込む遺構を複数検出したため、同層を遺構面として認識した。褐灰色細粒砂層の下には黒ボク層が堆積しており、その下層に明黄褐色のシルト層と粘土層が堆積している。また、1トレンチで検出した竪穴建物の可能性のある遺構は明黄褐色シルト層と黒ボク層を切り込み形成しており、複数の時期にわたって遺構が構築されている可能性が考えられた。B地区西半からは主要な遺構は検出できなかったが、調査地南端の谷部下から黒褐色粘土の方形を呈する遺構を2基検出した。南側の方形を呈する遺構からは古墳時代末から飛鳥時代の須恵器や木製品が出土している。

まとめ 第3次調査では、小規模調査において遺物の出土および遺構を検出したため、調査範囲を拡大してB地区として面的な調査を行った。B地区は谷地形であり遺物包含層と黒ボク層、明黄褐色のシルト層と粘土層を切り込む遺構を確認した。主要な遺構として柱穴、竪穴建物、溝、井戸を検出している。なお、B地区は令和6年度に継続して調査を実施している。(加藤雄太)

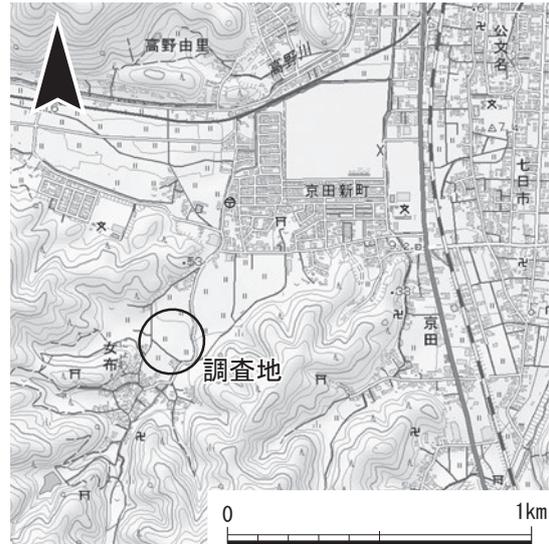
21. 女布遺跡第8次

所在地 舞鶴市女布

調査期間 令和5年11月6日～令和6年2月22日

調査面積 1,730㎡

はじめに 女布遺跡は弥生時代から奈良・平安時代にいたる集落遺跡である。今回の調査地は女布遺跡内の南西部で、南東側の丘陵には中世山城の女布城が築かれている。調査対象地は女布川の流れるなだらかな谷平野に位置し、標高は22～25mを測る。女布遺跡はこれまで弥生時代から古墳時代の竪穴建物や、7世紀後半の整然と並ぶ倉庫群とみられる掘立柱建物などが確認されている。今回の調査は、京都府中丹広域振興局の依頼を受け、府営農業競争力強化農地整備事業に伴って実施した。



調査地位置図(国土地理院 1/25,000)

調査概要 調査区は面的調査区2か所、トレンチによる小規模調査区5か所である。重機による耕作土の除去から始め、その後人力による掘削および精査を重ねた。耕作土直下のにおい黄褐色土の面から平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物5棟や土壇墓1基を検出した。掘立柱建物の柱穴は直径35～45cmの円形で、それらにより2間×3間、3間×3間、3間×4間などの建物が構成される。1棟を除き総柱建物である。建物の主軸は真北に対しいずれもやや東に振っている。土壇墓は隅丸方形で、中から中国製白磁碗1点と同皿4点が出土した。別の面的調査区でも2間×2間の総柱建物が検出され、建物のある範囲の広がり確認できた。5か所の小規模調査区からは古墳時代から鎌倉時代の遺物が包含層中から出土したが、遺構の検出はかなわなかった。なお、建物群の検出された同じ調査区から、およそ3万年前に現在の鹿児島県の始良カルデラから噴出した始良T_n火山灰の堆積状況を確認した。

まとめ 今回の調査で、総柱建物を主体とする5棟の掘立柱建物や土壇墓1基の存在が明らかとなった。掘立柱建物の建立時期は検出面から出土した土器などから平安時代末から鎌倉時代初頭と思われる。また土壇墓については、中から出土した中国製白磁碗と皿の形態から11世紀後半から12世紀初頭の平安時代末期と考えられる。これまでの7世紀後半の倉庫群とみられる建物群や今回の平安時代末の遺構群により集落の存続時期が広がり、集落の景観や性格を考える上で新たな知見が加わったといえる。なお、始良T_n火山灰の堆積状況は、谷部から流れてきたものではなく、更新世の低位段丘上に降下・堆積したもので、貴重な検出事例といえる。(黒坪一樹)

22. 千代川遺跡第35次K・L地区

所在地 亀岡市千代川町千原

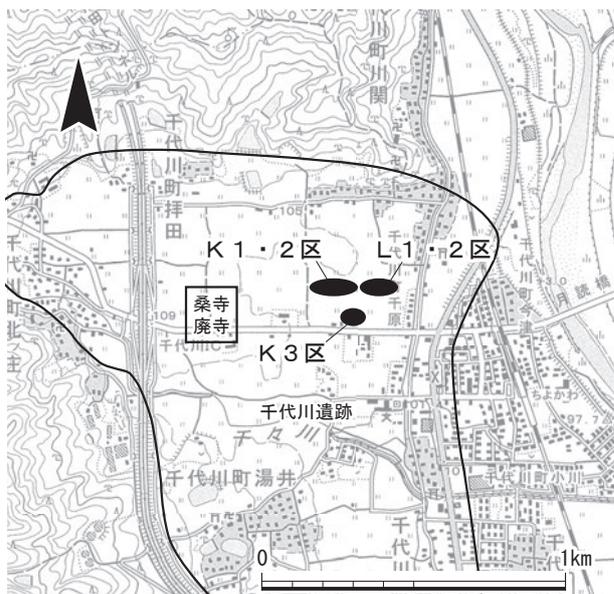
調査期間 令和5年5月11日～令和5年12月12日

調査面積 K地区：770㎡、L地区：560㎡

はじめに 千代川遺跡は、亀岡市千代川町の平地部一帯に広がり、遺跡を南北に二分するかのようには北西から南東方向に流れる千々川が形成する扇状地上に位置する。これまでの発掘調査で縄文時代から鎌倉時代にわたって集落が連綿と営まれていることが明らかになっている。また、遺跡北半部には桑寺廃寺が位置し、さらには現地地形・現地割・小字名などの歴史地理的見地から、周辺地を丹波国府跡に推定される説もある。京都縦貫自動車道に伴う発掘調査では、掘立柱建物跡とともに多量の緑釉陶器や墨書土器、木簡などが出土している。今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴い農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。

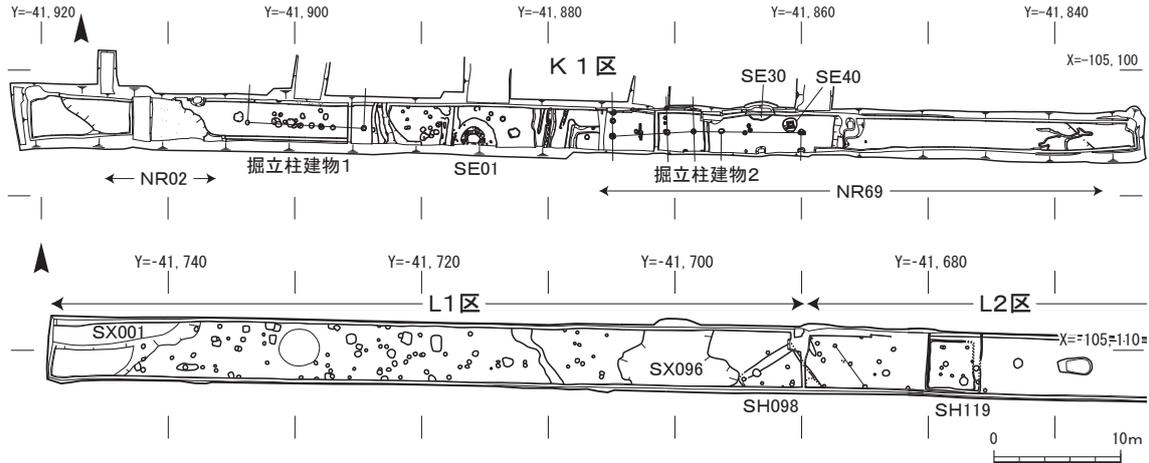
調査概要 K地区では、水路計画部分の面的調査(K1・K2・K3区)、L地区では水路計画部分の面的調査(L1・L2区)と小規模調査を行った。以下、面的調査のうち遺構の検出成果があったK1・L1・L2区についての概要を中心に報告する。

K1区では、トレンチ中央付近に安定地盤が認められ、東側には自然流路状の湿地NR69が広がる。中世の建物や井戸は、その埋土を切って掘削されていた。K1区で検出した主な遺構は、掘立柱建物2棟、井戸3基、溝3条、自然流路2条などである。掘立柱建物1は、トレンチ西側で検出し、柱間にばらつきはあるが、東西5間・南北1間以上の規模でトレンチ北壁に柱穴が観察できることから、北側に展開する建物とみられる。掘立柱建物2は、トレンチ東側で検出した



第1図 調査地位置図(国土地理院 亀岡 1/25,000)

もので、柱間にややばらつきがあるものの、東西6間・南北2間以上でトレンチの北壁・南壁ともに柱穴を観察できることから、南北方向に展開する建物とみられる。この建物を構成する柱穴には柱材や根石が残るものもあった。井戸SE01・30はいずれも石組みの井戸であるが、SE30については北壁断面にわずかにかかっているのみで、深さや構造についての詳細は不明である。SE40は横板組の井戸で、最下層には曲物が残存していた。溝はいずれも南北方向でやや浅い。建物・溝からは、いずれも中世の遺物が出土した。自然流路NR02では、特



第2図 K1・L1・L2区平面図

に東岸において杭列や有機物が多く残存し、土鍾なども出土していることから、流路内にしがらみのような構造物が存在していた可能性がある。自然流路NR69では、一部古墳時代の遺物も含まれていたが、全体的には中世の遺物が多く出土している。井戸SE40については、SE30及び掘立柱建物2とも近接していることから、遺物の時期を含めて慎重に検討する必要がある。

L1区及びL2区では、西側で地山を検出し、L1区で落ち込み状遺構や古代のピット群、L2区で古墳時代前期の竪穴建物2棟を検出した。西側で検出した落ち込み状遺構SX001では、上層の砂層で古代の須恵器が出土したほかは、ほとんど遺物が確認できなかった。東側で検出した落ち込み状遺構SX096では、埋土中に布留式土器、上層の砂層から古代の須恵器が出土した。また、調査区中央の黄褐色を呈した地山上ではピットを多数検出したが、建物の復元には至っていない。これらは古代(飛鳥～奈良時代)を主体とする遺構群と推測できる。

L2区の西側では竪穴建物2基を検出した。竪穴建物SH098は、北から西に35°主軸が振れる建物で、南側は調査区外となる。遺構の遺存状態は良くなく、支柱穴及び幅広の周壁溝を検出しただけである。出土遺物は土師器片を主体とするが須恵器片も数点出土している。竪穴建物SH119は、東西4.2m・南北4.7mを測る南北方向の建物で、西壁の遺存状態は良好であったが、東壁側は削平を受けていた。下層から柱穴(4本柱)のほか、先行建物の周壁溝を検出したことから、拡張が想定できる。埋土から布留式の土師器片が出土している。なお、SH119の西側ではピット群を検出しているが建物の復元には至らなかった。また、SH119より東側には包含層が堆積し、布留式甕・複合口縁壺・甑・高杯が良好な状態で出土している。

K1区とL1区間の地点であるK2区では、L1区西側で見られたSX001に対応する落ち込みは認められなかったが、安定した地盤が広がっており、柱穴や土坑を検出している。

まとめ K・L地区では、調査区南側に位置するK3区で旧河道による浸食が認められた。調査区北側のK1・2区及びL1・2区では安定地盤が認められ、東側のL1・2区には、古墳時代の竪穴建物や古代(飛鳥～奈良時代)を主体とする自然流路や柱穴などの遺構群が広がっていることを確認した。また、K1・K2区では、中世の掘立柱建物、井戸及び自然流路などを検出し、居住空間の広がりを確認した。(松井 忍)

23. 千代川遺跡第35次A地区

所在地 亀岡市千代川町北ノ庄

調査期間 令和5年9月25日～令和6年2月29日

調査面積 3,790㎡

はじめに 千代川遺跡は亀岡市の北方、大井川の西岸に位置し、なだらかな丘陵地から平地にかけて分布する縄文時代草創期～中世の集落遺跡である。今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴い農林水産省近畿農政局の調査を受けて実施した。

調査概要 A3区では、土器が伴わないので不明な点が多いが、縄文時代に遡る陥し穴と思われる土坑を3基検出した。

A地区の東側(A1区、A8区、A9区)で弥生時代後期～近世に至る大規模な流路を検出した。この流路は、昭和59年度の国道9号バイパス関係遺跡の調査(千代川遺跡第9次)で検出された谷状地形(流路：千代川遺跡第13・14次SR16001)と同じものであり、大きく蛇行しながら西から東へ流れる。この流路の下層から古墳時代前期の土器と、堰板や槽などの木製品が出土した。この流路の付近では、同じく古墳時代前期の竪穴住居も検出されている(A2地区)。この他にも流路が複数検出されており、古代から中世にいたる遺物が出土している(A6区、A小1～3トレンチ)。

A地区の広範囲にわたって、中世前半の掘立柱建物が検出された。特にA3区からA4区にかけて、土器を多量埋置した素掘り井戸、石組井戸、土坑などが見つかり、居住空間を形成していたことがわかる。土坑からは土師器皿と短刀とみられる鉄製品がL字形に並んで出土しており、墓の可能性もある。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 亀岡)

中世後半になるとA地区一帯は耕作地化したとみられ、耕作溝が多数検出された。近世では石を多量に詰め込んだ暗渠が検出され、引き続き耕作地として土地利用されていたことが確認できる。この状況が現代にまで踏襲され、現在の圃場に至っている。

このほか、A地区西側を中心として、古代の瓦・須恵器などが出土しており、近隣区域に古代の遺構があることが想定される。

出土遺物は、瓦器・土師器などの中世前半のものが遺構の分布に対応して、各地区で出土し、かつ出土量的に大半を占める。一方、古墳時代前期



第2図 千代川遺跡第35次調査A地区 全体図

の遺物については、大規模な流路の下層から土師器と多数の木製品が出土しているにもかかわらず、遺構としては限定的に確認されるのみで希薄な分布密度であった。中世後半以降の耕地化もしくは近世以降の大規模な土地改変に際して削平された可能性が想起されるが、遺構の分布状況と地形や検出面の断面形状の観点から別途検証が必要である。

まとめ 千代川遺跡A地区では遅くとも古墳時代前期以降、複数の流路に挟まれた微高地上に居住域が散発的に形成されるが、集落遺跡として広く展開するのは流路が埋没し始める中世前半からとみられる。しかし、中世後半には全面的に耕地化(畑地主体)し、さらには近世後半以降に大規模な土地改変がなされたうえで、田地主体の現代の景観に至ったとみられる。(中里伸明)

24. 拝田14号墳

所在地 亀岡市千代川町拝田

調査期間 令和5年10月19日～令和6年2月29日

調査面積 100㎡

はじめに 拝田14号墳は、亀岡市千代川町拝田に位置する丘陵東側斜面および一部平坦地に造営された拝田古墳群(全18基)のひとつである。拝田古墳群は、これまで奥壁部分に石柵を持ち、古墳時代後期中頃に築造されたと考えられる拝田16号墳を主とした、古墳時代後期中心の古墳群と考えられてきた。

令和3年度に京都府文化財保護課によって小規模調査が行われ、5か所にわたりトレンチが設けられたが、その際には古墳の墳形および墳丘規模について明確な成果を得られなかった。そのため、この2点について明らかにすべく、今回の調査に至った。

調査概要 今回の調査は、墳丘西半は、後世の削平がかなり進んでおり、墳丘の盛り土および外表施設の残存があまり期待できなかった。そのため令和3年度調査時の1～5トレンチの再掘削および部分拡張をするとともに、あらたに墳丘東半を中心に6～11トレンチを設け、すべて人力掘削で調査を行った。

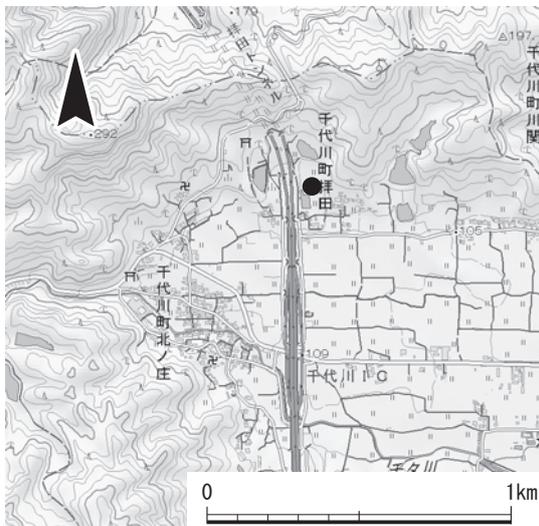
1トレンチでは、墳丘斜面中ほどと墳丘裾の2か所で、それぞれ約0.5m幅の範囲に帯状に並べられた葺石を確認した。トレンチ北端付近で溝状の落ち込みを確認し、堆積状況や位置から考えると周溝の肩である可能性が高い。

2・8・10トレンチは、調査当初それぞれ独立したトレンチを設定していたが、8・10トレンチにおいて周溝を確認したことから、墳頂部から周溝までの古墳造成の様相を検討するために各

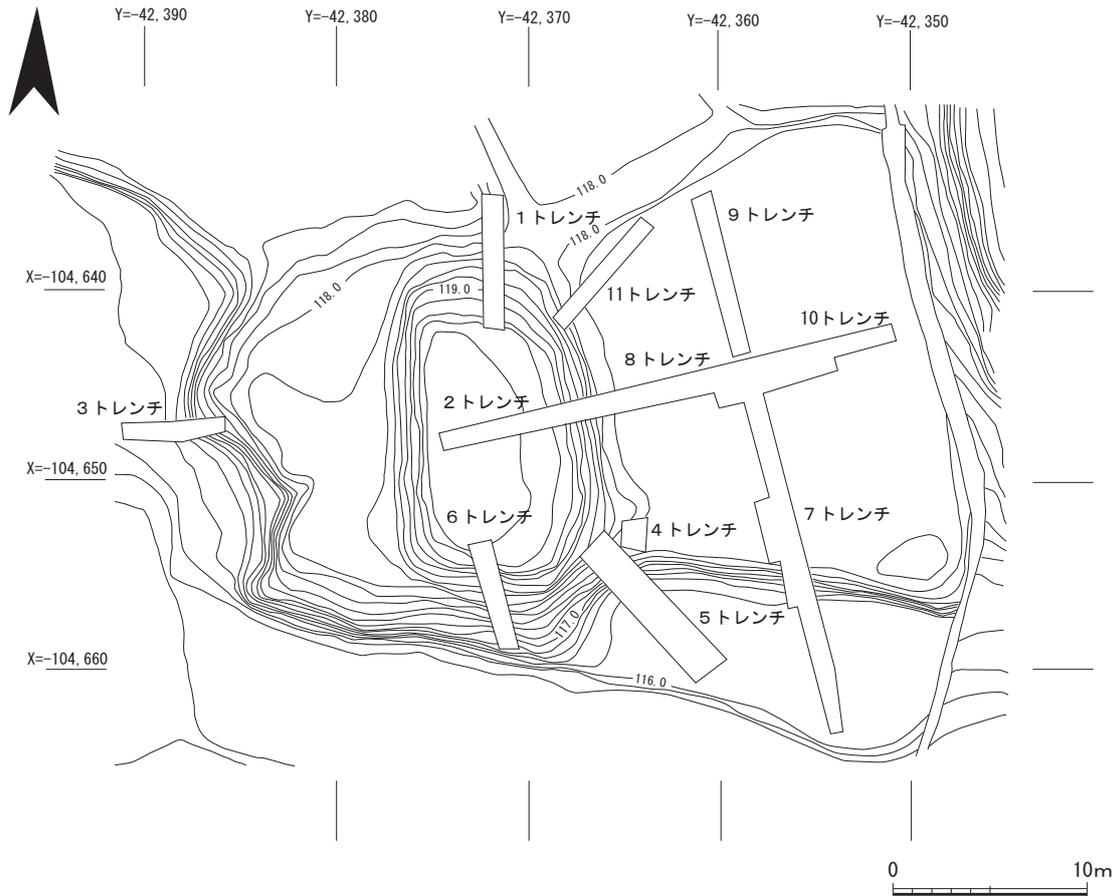
トレンチをつないで調査を進めた。墳頂部では墓壇掘形および木棺痕跡を確認し、木棺痕跡の内部では朱を検出した。周溝の内側では平坦面および埴輪の抜き取り痕を確認した。周溝内から多数の埴輪片が出土した。

5トレンチでは、トレンチ南東端付近で平坦面および埴輪の抜き取り痕、葺石および周溝の肩を検出し、周溝内から多数の埴輪片が出土した。

7・9トレンチでは、墳丘や外表施設の確認には至らなかったものの、トレンチの土層断面の検討から、中世以降に整地を行っていることが判明した。7トレンチ中央部において、埴輪片が集中



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 亀岡)



第2図 拝田14号墳トレンチ配置図

して出土したが、おそらく周溝の一部が整地により部分攪乱を受けていると考えられる。

11トレンチでは、埴輪列および周溝の肩を確認した。埴輪列は、周溝の肩の内側の平坦面で確認した。埴輪は1本ずつ穴を掘って据え付けられており、基部を埋めて10cm大の礫を周囲に並べて補強した様子が見て取れた。平坦面全体に5cm大の礫を用いた礫敷が施されていた。周溝内から多数の埴輪片が出土した。

3・4・6トレンチは、後世の削平および農地改変の際の石垣構築による攪乱を受けており、墳丘や外表施設の確認には至らなかった。

まとめ 今回の調査では、埋葬施設、外表施設(葺石・埴輪列・周溝)を確認し、埋葬施設は土層断面の検討から、二段墓壇を掘り込み、割竹形木棺を設置したものと推定できる。周溝はおおよそ6m幅であり、墳丘裾にあたる周溝の内側肩部には築造当初葺石が並べられていたと考えられる。周溝の外側肩までを墳丘に含めると、直径約40mを測る円墳となる。

古墳の築造時期は、出土した埴輪の様相から、古墳時代前期末から中期初頭にあたると考えている。円筒埴輪の外周調整および突帯の形状を見る限りは中期初頭と考えられるが、11トレンチで確認した埴輪列の円筒埴輪は基部が高く、前期末頃の様相を呈しているため、あまり絞り込めないのが現状である。今後出土埴輪の整理・分類を行い、検討を進めていく。(山本 梓)

25. 法貴北古墳群第3次・法貴古墳群第2次

所在地 亀岡市曾我部町犬飼・曾我部町法貴
 調査期間 令和5年5月8日～令和6年2月29日
 調査面積 1,650㎡

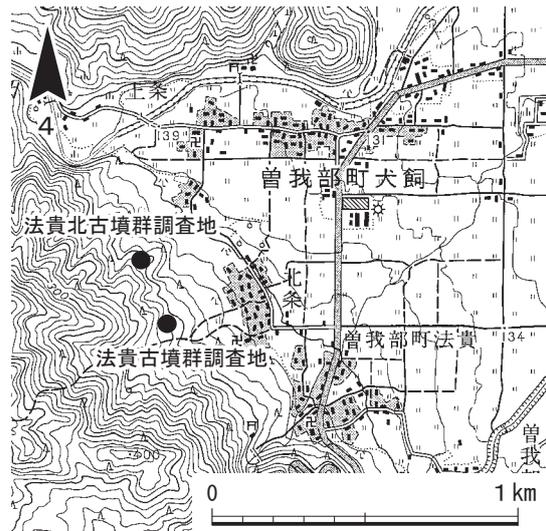
はじめに 法貴北古墳群・法貴古墳群は亀岡市曾我部町犬飼・法貴に所在し、亀岡盆地南西の霊仙ヶ岳の裾部に立地している(第1図)。令和5年度の発掘調査は、法貴北古墳群16トレンチ、法貴古墳群A地区・B地区の調査を実施した。

調査は国道423号(法貴バイパス)防災・安全交付金事業に伴い、京都府南丹土木事務所の依頼を受けて実施した。

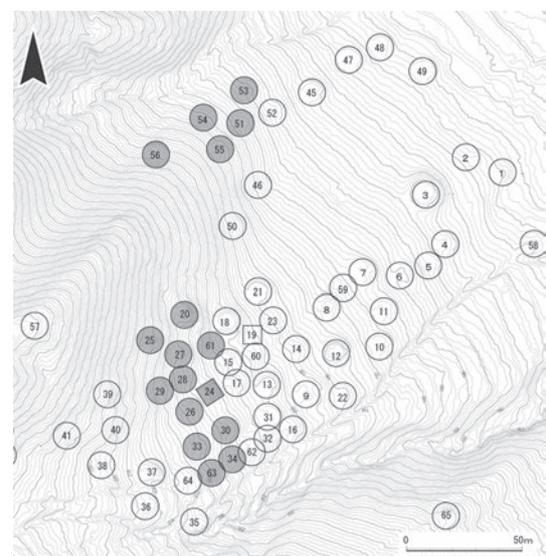
法貴北古墳群の調査 令和5年度に続いて16トレンチの24号墳を調査した。24号墳は、南東方向に開口する横穴式石室を持つ直径約7mの円墳である(写真1)。盛土内の列石は、墳丘山側(南西側)で良好に残存し、北東側にも一部続く。石室は無袖式で奥壁から2m程度が残存している。加えて石材抜き取り穴を検出しており、全長3m程度になる。石室内からは須恵器杯4点と平瓶1点が出土しており、遺物の年代から構築時期は7世紀前半頃と推測される。

法貴古墳群A地区の調査 前年度に引き続き56号墳と横穴式石室SX19の調査を行った。56号墳は西方向に開口する正方形プランの横穴式石室を持つ直径約14mの円墳である。墳丘は、山の斜面を削平して構築していた。また、墳丘内に人頭大の石材を検出した。石材の下からは、土師器甕が出土し、墳丘構築に際して祭祀が行われた可能性がある。墳丘が流失していた横穴式石室SX19では羨道部の石材抜き取り穴を確認し、石室全長は6.4mを測る。

法貴古墳群B地区の調査 20・24～30・33・34・61・63号墳の調査に着手した。石室床面付近まで調査を進めた一部の古墳について今回報告する。20号墳は、全長7.7mの両袖横穴式石室を



第1図 調査位置図(国土地理院 1/25,000 法貴)



第2図 法貴古墳群分布図(網部分が調査対象)

持つ古墳で、石室内から人頭大の礫を用いた礫敷と、追葬に伴うとみられる木棺痕跡を検出した。24号墳は全長6.5mの無袖横穴式石室を持つ方墳で、墳丘裾には二段に配置された列石を持つ(写真2)。27号墳は全長8.0mの無袖式横穴式石室を持つ円墳である。石室羨道部及び周溝のみ調査した。羨道部は天井が崩落しており、崩落土中から12世紀ごろのものとみられる瓦器が出土した。また、羨道入口付近の床面からは須恵器台付壺・甕、土師器片、耳環が出土した。33号墳は無袖式横穴式石室を持ち、閉塞状況から羨道部は完全に流出しているとみられる。閉塞付近に須恵器蓋杯・平瓶等が出土した。34号墳は無袖式の横穴式石室を持つ古墳で、崩落土中から12～13世紀ごろの土師器皿が出土した。床面付近からは須恵器蓋杯・平瓶、鉄刀、鉄鎌などの鉄製品が出土した(写真3)。63号墳は無袖式横穴式石室を持つ古墳で、床面よりも上の層で10世紀ごろの土師器が出土した。床面からは被熱により赤変化したと思われる石材と、炭化材、人骨細片、鉄釘が出土した。これらは再利用に伴うもので、古墳時代の遺物は小片が出土する程度である。



写真1 法貴北24号墳完掘状況



写真2 法貴24号墳石室入口部



写真3 法貴34号墳石室内遺物出土状況

まとめ 法貴北古墳群は、令和3年度から発掘調査を行い、昨年度で調査が完了した。4基の古墳を調査し、6世紀末から7世紀前半に造墓活動が行われたことが分かった。調査を実施したいずれの古墳でも墳丘内列石を確認できた。令和2年度に調査を行った法貴峠20号墳でも見つかることから、曾我部町内の古墳で普遍的に採用された墳丘構築方法と考えられる。

法貴古墳群では、丘陵斜面を大規模に造成して56号墳を築造していることが分かった。同古墳群内で初現的な古墳ではあるが、石室の開口方向や、その立地については更なる検討が必要である。B地区では、12基の古墳の調査を実施し、両袖式の横穴式石室を埋葬施設とする20号墳や鉄刀が副葬された34号墳などが確認されている。令和6年度も継続して調査を行っており、造墓活動や被葬者について今後の調査を期待したい。(増田慧子)

26. 長岡京跡右京第1282次・井ノ内遺跡

所在地 長岡京市粟生畑ヶ田

調査期間 令和5年11月6日～令和6年2月9日

調査面積 550㎡

はじめに 調査地は、長岡京跡右京三条四坊二・七町に位置する。また、縄文～古墳、奈良～鎌倉、江戸時代の集落遺跡である井ノ内遺跡にも含まれる。周辺のこれまでの調査では、縄文時代の竪穴建物、弥生時代の流路、古墳時代の竪穴建物等、奈良時代の建物群、長岡京期の建物群、中・近世の溝などが確認されている。今回の調査地内には、西四坊坊間東小路が含まれることから、その側溝の検出及び周辺の土地利用について明らかになることが期待された。本調査は、一般府道長法寺向日線防災・安全交付金事業に伴い京都府乙訓土木事務所の依頼を受け実施した。

調査概要 調査地は西側の丘陵地(西山)から東に向かって広がる段丘を覆う扇状地及び緩扇状地で、現地表面の標高は西端の4トレンチが44.6m、東端の1トレンチが41.9mで比高2.7mを測る。調査地は、東側から1～4トレンチとし、3トレンチは通路確保のため2か所のトレンチに分割して調査を行った。1トレンチは西半が耕作地造成の際に削平されて遺構密度が低く、中央から東側で中世の溝及び長岡京期から平安時代の遺物を含む掘立柱建物1棟、ピット数基などを検出した。2トレンチはトレンチ中央付近に柱穴が集中し、掘立柱建物1棟が復元できる。3-1トレンチは、最も遺構が集中しており、多数のピットから掘立柱建物1棟が復元できるほか、溝状遺構も確認している。遺構の年代はおおむね平安時代から鎌倉時代である。3-2トレンチは、中央より西側で安定したシルト層が途切れて礫層となり、遺構が希薄になる。安定した地山面が広がるトレンチ東側では、古墳時代の土坑・溝、飛鳥時代の竪穴建物、平安時代後期の井戸などを検出した。



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

なお、長岡京条坊復原によると、3-1トレンチから2トレンチにかけての調査地内に西四坊坊間東小路の両側溝が想定されていたが、いずれも確認できなかった。

まとめ 今回の調査では、古墳時代の土坑・溝、飛鳥時代の竪穴建物、平安時代後期から中世にかけての掘立柱建物・井戸等を検出した。中でも、平安時代後期の井戸からは多数の土器が出土しており、今後の乙訓地域における平安時代の土器を検討する上での貴重な成果となった。(松井 忍)

27. 長岡京跡右京第1286次・井ノ内遺跡

所在地 長岡京市井ノ内朝日寺11

調査期間 令和6年1月25日～令和6年2月29日

調査面積 400㎡

はじめに 今回の調査は、京都府立向日が丘支援学校改築工事に伴い京都府教育委員会の依頼を受けて実施したものである。

調査地は長岡京右京三条四坊八・九町にあたるとともに縄文時代から中世の集落遺跡である井ノ内遺跡にも含まれる。周辺の調査では、中世の建物跡や水田に伴う流路、奈良時代の焼成坑、長岡京期の井戸、坂川の古墳時代の旧流路が検出されている。

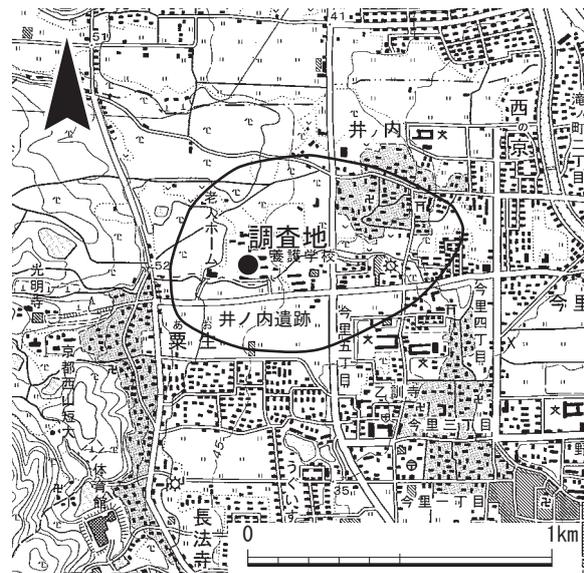
調査概要 調査地は西から東に緩やかに傾斜する段丘を覆う扇状地に位置するが、学校造成時に西側の高い段丘を削って東に盛土したために、現況は、東から西に向かってわずかに下がる地形となっている。校舎跡と中庭跡に東西に並ぶ3か所のトレンチを設定した。各トレンチは地山直上まで建物基礎解体に伴う盛土が堆積する。

1 トレンチ 東に位置するトレンチで、特別教室棟跡と南側中庭跡に東西8m・南北25mの長方形に設定した。遺構は認められなかったが、基礎解体時の埋土から須恵器甕片が少量出土した。

2 トレンチ 中央に位置するトレンチで、訓練棟跡と南側中庭跡に、東西5m・南北16mの長方形に設定した。トレンチ南側で土坑SK1を検出し、埋土から古墳時代後期の土師器甕片や須恵器高杯の脚が出土した。

3 トレンチ 西側に位置するトレンチで、プール跡と体育館跡南西隅に位置し、東西5m・南北16mのトレンチの南端に幅5mで東に8mのびるL字形に設定した。トレンチ全体に攪乱が及ぶが、トレンチ南東側で攪乱が深くなり、攪乱の範囲が体育館南西隅と一致することから体育館の基礎部によるものと考えられる。

まとめ 今回の調査では、2トレンチ南側から古墳時代後期の遺物を含む土坑を1基検出した。1トレンチと2トレンチでは、校舎(特別教室棟と訓練棟)跡南辺と並行して攪乱が深く及んでおり、校舎建築に伴う掘削が及んでいること、中庭跡においても学校造成時に削平のため遺構がほとんど残存していないことが明らかとなった。(菅博絵)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

28. 木津川河床遺跡第42次

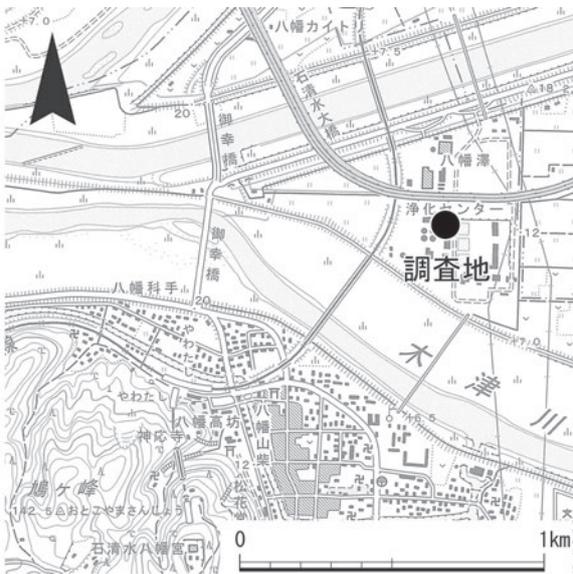
所在地 八幡市八幡一丁目

調査期間 令和5年11月6日～令和5年12月26日

調査面積 340㎡

はじめに 明治3年の付け替えによる木津川の新旧流路と現桂川に挟まれた東西約4.5km・南北約2.5kmの範囲は木津川河床遺跡として登録されており、川で洗われた遺物が採集される場所として古くから認識されてきた。三川合流地点に位置する木津川流域下水道洛南浄化センター内では1982(昭和57)年に木津川河床遺跡第1次となる発掘調査を嚆矢として多数の調査が実施されている。第42次となる今回は、洛南浄化センター内における急ろ放流渠整備に伴う発掘調査で、京都府流域下水道事務所の委託を受けて実施した。

調査概要 調査地は既施設に囲まれた南北26.8m・東西20.5mを測る逆L字形の場所である。事業者側による鋼矢板等の土留工事および現地表面から深さ4mの表土掘削終了後、当調査研究センターが調査地を引き受けた。調査地の層位は、調査引き受け高から0.7～1.2mの深さまでは、現代の造成・地盤改良およびその影響を受けた層であった。これらを除くすると、整地と判断される層(第10層)を検出した。第10層は、層中の全体に少量の細片化した土師器・陶磁器・瓦器片等中世の遺物を含んでいる。また第10層上面では、東西溝2条を検出している。第10層より下位は洪水性の自然堆積層である。近傍で行われた第10次調査では古墳時代前期の住居等を検出していることから、この標高に近い第15層上面で精査を実施したところ、地震による曲隆2か所と耕作に関わる複数並列する南北溝を平面や壁面で検出した。曲隆は、地震による液状化現象で発生した噴砂が地上まで噴出できず、地形の盛り上がりを形成したもので、盛り上りの高さは調査地



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

北端(S X05)は0.7mである。調査区南半部で検出したもの(S X07)は0.42mを測り、砂層が上方に向かって漏斗状に吹き上がる状況が壁面で確認できた。

まとめ 今回の発掘調査では地震痕跡である曲隆を2か所で確認した。整地層の一端を押し上げている点から、中世以降に発生した地震によるものである。地震液状化は震度5弱以上で発生しやすいとされ史料上の地震との安易な比定には警鐘が鳴らされているが、文禄5(1596)年の慶長伏見地震がひとつの候補となるであろう。(加藤雅士)

29. 栢ノ木遺跡第17次

所在地 綴喜郡井手町大字井手小字栢ノ木
 調査期間 令和5年11月20日～令和6年2月29日
 調査面積 900㎡

はじめに 今回の調査は、国道24号城陽井手木津川バイパス事業に係る栢ノ木遺跡の発掘調査に伴い、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した。栢ノ木遺跡は、木津川右岸の段丘上に立地している。当該遺跡の範囲内には、奈良時代から平安時代にかけての古代寺院である井手寺跡が位置している。

調査概要 今回の調査地は遺跡範囲のほぼ中央に位置する。調査トレンチは、対象地内の棚田ごとに計21か所(南北約250m)に設定した。

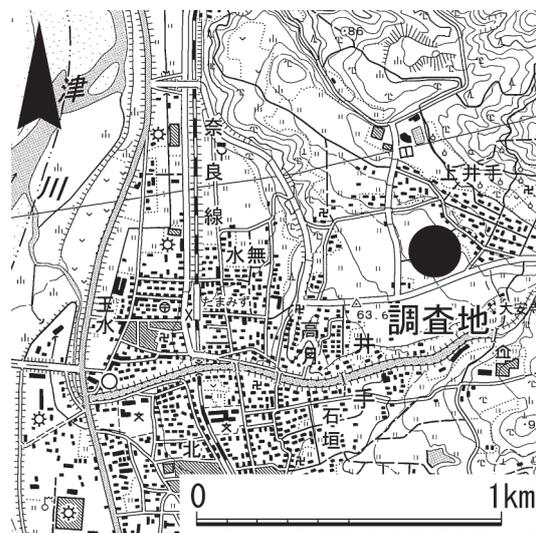
1～4・19・20トレンチは調査地の北側に設定したトレンチである。現地表面の下層では近現代の旧耕作土を確認した。旧耕作土の直下は、黄褐色の細粒砂混じりのシルト層であった。

19トレンチでは、溝と土坑を検出したが遺物は出土しなかった。旧耕作土と同じ灰褐色の埋土であったため、近世以降の耕作に伴う遺構と考えられる。20トレンチからは、近世の耕作土中から、奈良時代から近世までの遺物が少量出土したが、その他のトレンチでは顕著な遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

5～18・21トレンチは調査地の中央部から南側にかけて設定したトレンチである。いずれのトレンチにおいても奈良時代から近世までの遺物が出土した。

18トレンチでは、耕作土直下が礫層であり、遺構・遺物は検出されなかった。それ以外のトレンチでは、近世の耕作土の直下から整地層を検出した。整地層は棚田による削平のため、検出地点によって層厚が異なる。整地層からは、炭化物、焼土のほか、奈良時代の土師器と須恵器が出土した。整地層の上面から柱穴、土坑などを検出した。柱穴は掘立柱建物と考えられるが、規模は不明である。

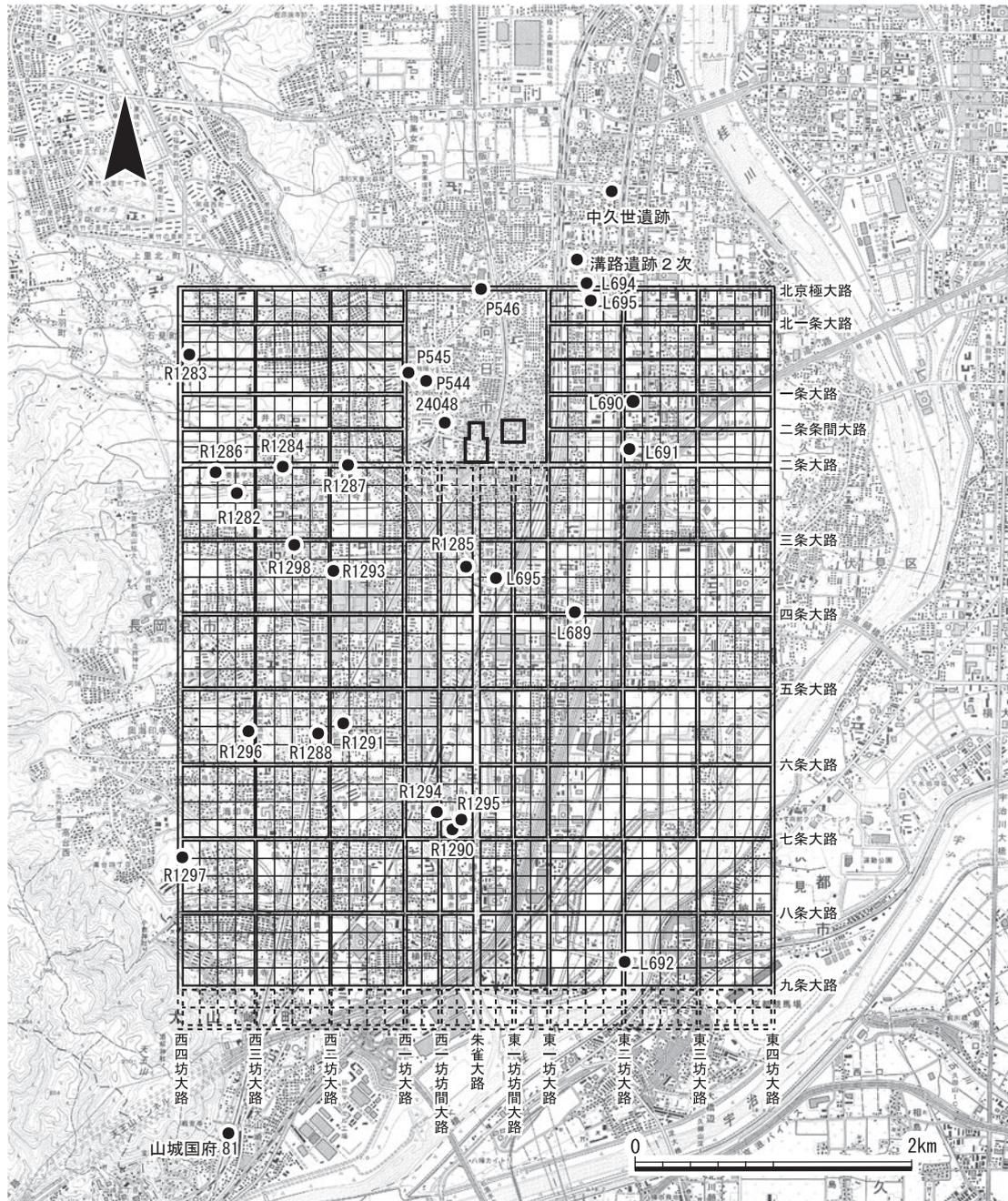
まとめ 1～4・19・20トレンチでは、現代の水田の直下は自然堆積層の地山であり、遺構は検出されなかった。その他のトレンチからは、奈良時代から中世の遺構と遺物が出土した。5～18・21トレンチでは、地形による傾斜を盛土によって整地した後に建物を造営していたと考えられる。今回の調査では、井手寺跡の東側に奈良時代の遺構が広がることを確認した。(福山博章)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)

長岡京跡調査だより・143

長岡京跡の発掘調査情報の交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的に、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。令和6年1月から令和6年7月までの例会では、宮域4件、左京域7件、右京域15件、京域外3件の合計29件の調査報告があった。その中で、調査の終了したものを中心に略述する。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域 現向日町競輪場内に計画されるアリーナ建設に伴う試掘調査(宮544次)、発掘調査(宮545次)が実施された。宮545次調査(向日市寺戸町)では、調査区の大部分が後世の開発で削平されていたが、重圏文軒丸瓦など多くの遺物を含む土坑などが一部検出された。宮546次調査(向日市寺戸町)では、北京極大路北側溝が検出され、その北側から築地痕跡を、さらに北側から宅地内溝が検出された。内裏西宮の東面回廊の検出を目的に行われた詳細分布調査第24048次(向日市鶏冠井町)では、東西2間分の複廊構造の柱が検出され、西宮の東西規模を明らかにする資料が得られた。

左京 左京691次調査(向日市鶏冠井町)では二条条間南小路の南北両側溝や、廃棄土坑、柱掘形が1mを越える南北2間の東西棟の掘立柱建物が検出された。左京692次調査(京都市淀水垂町・淀水垂大下津町遺跡)では、江戸時代前期の護岸遺構が検出された。護岸の土木資材として川船6艘が再利用されていた。船底板から舷側板までが結合された状態で出土し、現存していない江戸時代前期の淀川水系の水運業を担った和船の実態を明らかにする資料となった。

右京 右京第1282次調査(長岡京市井ノ内・井ノ内遺跡)の調査では、古墳時代の溝、竪穴建物、平安時代の井戸などが検出された。井戸内には平安時代後期の瓦器椀や土器器皿が沈められていた。右京1283次調査(京都市西京区大原野石見町・石見城跡)では、鎌倉時代の溝と井戸、室町時代の柱穴や石垣、外堀が検出された。右京1284次調査(長岡京市井ノ内)は、井ノ内稻荷塚古墳第8次調査として実施され、前方部の前面で幅3mの周溝が確認された。周溝内には地山を掘り残した幅1.5mの陸橋が確認された。周溝内から青磁椀を副葬する中世墓も検出された。右京1287次調査(長岡京市今里)では、長岡京期の併行する護岸された2条の東西溝と溝を跨ぐ橋脚などが検出された。橋脚のある北側の溝は、周辺の調査から宅地内溝と判断される。2町もしくは4町占地の離宮の存在が推定される地区で実施された右京第1288次調査(長岡京市天神)では、長岡京期の南北2間・東西2間以上の東西棟建物が検出された。右京1290次調査(長岡京市勝竜寺)では、長岡京期から平安時代初期と思われる東西5間以上の南庇をもつ掘立柱建物が検出された。右京1291次調査(長岡京市開田・開田遺跡)では、古墳時代の竈をもつ方形竪穴建物と長岡京期の東西3間・南北2間の掘立柱建物が検出された。右京1294次調査(長岡京市東神足・中世勝龍寺城)では、勝龍寺城北門の正面で幅2.8m・深さ1.9m以上を測る堀が検出された。

中久世遺跡(京都市南区久世中久世)では、上層遺構として、奈良時代後期から長岡京期の南北5間・東西2間の南北棟建物と南北2間・東西2間の掘立柱建物や柵列が検出された。下層からは弥生時代中期の円形竪穴建物5棟と方形竪穴建物1棟および土坑群と後期の方形竪穴建物4棟が密集して検出された。弥生時代の中久世遺跡のほぼ中心部にあたる。(肥後弘幸)

現地公開

(令和6年1月～令和6年7月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財の発掘調査成果を広く府民の方々に報告し、地域の歴史への関心を深めていただくため、当調査研究センターが実施している京都府内の発掘調査の成果について、現地説明会などの現地公開を行っている。

現地説明会



カンジョガキ遺跡現地説明会の状況

カンジョガキ遺跡 一般国道312号大宮峰山道路整備事業に伴い京丹後市大宮町で令和3年度から発掘調査を実施してきた。調査の終盤を迎えた令和6年2月3日に現地説明会を実施した。縄文時代前期から平安時代後期に至る調査成果の中から、古墳時代後期の建物群と飛鳥時代から奈良時代に営まれた横穴墓を中心に公開した。冬空の曇天の中、67名の参加を得た。



拝田14号墳現地説明会の状況

拝田14号墳 亀岡盆地を流れる大堰川右岸では、国営緊急農地整備事業に伴い大規模な発掘調査を実施している。拝田14号墳は、前年度府教育委員会が試掘調査を実施し、古墳時代前期末の盟主墳である可能性が明らかになった。今回の調査で2段築成の葺石・埴輪をもつ直径30mほどの円墳であることがわかり、令和6年2月17日に現地説明会を実施した。132名の参加を得た。



法貴古墳群現地説明会の状況

法貴古墳群 国道423号・法貴バイパスに伴う法貴古墳群・法貴北古墳群の発掘調査は4年目を迎えた。昨年度に引き続き夏場の令和6年6月1日の現地公開となったが、調査中の横穴式石室を12基を公開するという大規模な現地説明会となった。考古学を学ぶ学生や行政関係者も多数見学に訪れ、参加者は161人だった。麓から急な斜面を20分ほど登って、多数の石室を目の前に見た見学者は、担当者の説明に熱心に耳を傾け

ていた。なお、6月4日には、地元の曾我部小学校の児童を対象に説明会を実施した。

普及啓発事業 (令和6年1月～令和6年7月)

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、小学生を対象とした体験教室、出前授業、「関西考古学の日」関連事業などの普及啓発活動を行っている。

なお、埋蔵文化財セミナー、展覧会、体験教室、普及啓発冊子「もっと知りたい京都の遺跡」の作成については、京都府教育委員会からの委託事業として実施している。

(1)埋蔵文化財セミナー

埋蔵文化財セミナーは、京都府教育委員会と共催で年3回実施している。

第154回埋蔵文化財セミナー 亀岡市法貴北古墳群・法貴古墳群で群集墳の調査を実施していることを契機に、「ギャラリーかめおか」大広間1で、令和6年2月24日(土)に「群集墳の成立とその背景」と題して亀岡市教育委員会の後援を得て実施した。2本の報告と1つの講演及び座談会で構成した。

最初に当調査研究センターの竹村亮仁主任が「群集墳から古墓へー曾我部町法貴北古墳群・法貴古墳群の発掘調査ー」と題して、発掘調査成果を報告した。横穴式石室の造営が終わったあとの奈良時代になっても墓域として利用され古墓が造営されていることに焦点をあてた。続いて、亀岡市教育委員会の土井孝則主幹が「亀岡市内の後期古墳ー導入期の横穴式石室を中心にー」と題して、正方形に近いプランの玄室をもつ横穴式石室が南丹波に導入され、その後、首長墳には、石柵と石障をもつ横穴式石室が構築されると報告した。加えて6世紀丹波最大の前方後円墳千歳車塚古墳はどのような石室が導入されているのだろうか、参加者の興味を喚起した。最後に、京都府立大学菱田哲郎教授により、「群集墳の造営と屯倉の成立」と題して講演が行われた。最

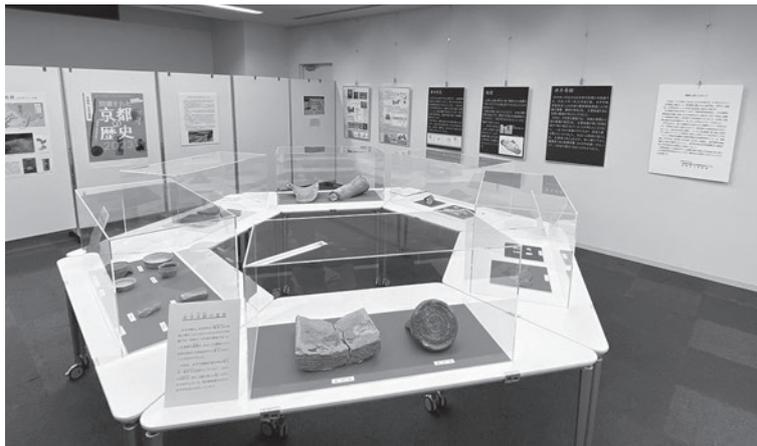


菱田先生の講演風景



座談会の状況

初に屯倉の重要性を述べ、亀岡市にある屯倉の地名(亀岡市三宅町)の存在、市内に大型横穴式石室や多数の群集墳が築かれていることに言及し、やがて屯倉の近くに駅家が置かれ、その後国府が築かれる亀岡の地域的な重要性について述べられた。座談会では、各発表の内容を再確認し、古墳群が多数営まれた亀岡の歴史的背景について総括された。



京都府立図書館での展示状況

調査が継続しているためか、関心が高く126名の方の参加を得ることができた。

(2) 展覧会等

京都府立図書館連携展示 令和6年2月2日から3月14日の間、「天平の都・恭仁宮と古代寺院・井手寺－恭仁宮発掘調査50年記念－」と題して、府立図書館で出土品の展示を行った。令和3年度から始まった府立図書館との連携展示で、3回目を数える。恭仁宮関連遺物として、府立図書館が京都府立山城郷土資料館から借用した恭仁宮跡出土の軒丸瓦・軒平瓦に加えて、当調査研究センターが調査した木津川市岡田国遺跡出土の須恵器、土師器、古代寺院関連として井手町井手寺跡(栢ノ木遺跡)出土軒瓦、三彩垂木先瓦、金銅製風招などを出展した。

(3) 普及啓発誌「もっと知りたい京都の遺跡」の刊行

令和5年度2冊目(第14号)として、「古代の文字」を取り上げ、府内出土の古代の木簡、墨書土器、文字瓦を紹介した。

(4) その他

当調査研究センターの情報発信は、ホームページを中心に行ってきたが、これに加えて、令和5年8月から、試行的にSNS(Social Network Service)のフェイスブックとXでの発信を始めている。両SNSでも、現地説明会の実施をはじめ、当センターが行う普及啓発事業について情報発信をしている。



Facebook(左)とXのURコード



もっと知りたい京都の遺跡第14号

センターの動向

(令和6年1月～令和6年7月)

- 1 10 第4回恭仁宮跡調査専門家会議筒井課長補佐出席(於：恭仁宮跡)
- 14 令和6年4月採用職員選考第二次試験・技術職員(於：当調査研究センター)
- 19 令和5年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック研修 面主任、名村調査員出席
- 24 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
新古代史解体新書講演会「群集墳の展開とその意義－古墳時代社会の変化を読み解く－」(於：京都府立山城勤労者会館)講師：筒井課長補佐
- 25 長岡京跡右京第1286次(長岡京市)現地調査開始
- 29 令和5年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックデジタル技術等活用推進委員会研修会
筒井課長補佐、武本主任参加(オンライン)
- 2 2 連携事業「天平の都・恭仁宮と古代寺院・井手寺－恭仁宮跡発掘調査50周年記念－」展開始(於：京都府立図書館、～3月14日)
- 3 第23回古代瓦研究会シンポジウム「井手寺の瓦」(於：奈良市、～3日)講師福山主任
カンジョガキ遺跡(京丹後市)現地説明会 参加者67名
- 10 京都府立図書館講演会「天平の都・恭仁宮と南山城の古代寺院」(於：京都府立図書館)講師福山主任
- 17 拝田14号墳(亀岡市)現地説明会 参加者132名
- 18 京都府立京都学・歴史館共同研究「京都学・洛南の文化資源」報告会(於：京都学・歴史館)資料参加
- 21 新古代史解体新書講演会「前方後円墳の終焉と古代寺院の出現－仏教伝来は古墳造営に終止符を打ったのか－」(於：京都府立山城勤労者会館)講師：筒井課長補佐
- 22 女布遺跡(舞鶴市)現地調査終了(11月6日～)
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於：京都市)阿部局長、肥後・筒井課長補佐出席
- 24 第154回埋蔵文化財セミナー『群集墳の成立とその背景』(於：ギャラリーかめおか)参加者126名
- 28 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 29 カンジョガキ遺跡(京丹後市)現地調査終了(8月1日～)、小中田古墳群第3次(京丹後市)現地調査終了(12月4日～)、千代川遺跡(亀岡市)現地調査終了(5月11日～)、拝田14号墳(亀岡市)現地調査終了(10月19日～)、法貴北古墳群第3次・法貴古墳群第2次(亀岡市)現地調査終了(5月8日～)
長岡京跡右京第1286次(長岡京市)現地調査終了(1月25日～)、栢ノ木遺跡第17次(井手町)現地調査終了(11月20日～)
- 3 1 スライドでみるおとくへの発掘「長岡京の西市周辺における調査～右京七条一坊十五町・十六町の調査から」(於：長岡京市)講師：松井調査員
- 10 令和6年4月採用職員選考試験・事務職員(於：当調査研究センター)
- 11 上り坂古墳群(井手町)現地調査開始
- 14 連携事業「天平の都・恭仁宮と古代寺院・井手寺－恭仁宮跡発掘調査50周年記念－」展終了(於：京都府立図書館、2月2日～)参加者839名
- 22 第49回理事会(於：京都市)
- 26 上り坂古墳群(井手町)現地調査終了

- 28 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 29 辞令交付
- 4 1 辞令交付式
- 22 法貴古墳群(亀岡市)現地調査開始
- 24 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)、千代川遺跡(亀岡市)現地調査開始
- 25 小中田遺跡(京丹後市)現地調査開始
- 30 余部遺跡(亀岡市)現地調査開始
- 5 1 松田古墳群(京丹後市)現地調査開始
- 7 カンジョガキ遺跡(京丹後市)現地調査開始、老田遺跡(京丹後市)現地調査開始
幾地城跡(与謝野町)現地調査開始(10～一時中断)
- 8 稚児野遺跡(福知山市)現地調査開始
- 14 栢ノ木遺跡(井手町)現地調査開始
- 17 長岡京跡(宮第545次)(向日市)現地調査開始
- 19 令和7年7月採用職員選考試験・技術職員(於：永守重信市民会館)
- 20 三分伊根遺跡(京丹後市)現地調査開始
- 22 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
京都府立大学考古学実習受入(於：新名神城陽事務所)
- 29 監事監査(於：当調査研究センター)
- 6 1 法貴古墳群(亀岡市)現地説明会 参加者161名
- 3 墓の平古墳群(井手町)現地調査開始
- 4 法貴古墳群(亀岡市)曾我部小学校現地見学 参加者23名
- 6 第50回理事会(於：京都市)
- 11 京都橘大学博物館実習実施(於：当調査研究センター整理室・写場)
- 13 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：福島県)阿部局長、高野参事出席(～14日)
- 16 城陽市歴史民俗資料館講演会「城陽市の最新文化財情報」(於：文化パーク城陽)講師小泉副主査
- 24 第17回評議員会(於：京都市)
- 26 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 7 1 辞令交付
- 5 京都橘大学博物館実習実施(於：当調査研究センター整理室・写場)
- 24 長岡京連絡協議会(於：当調査研究センター)
- 26 与謝地方小学校教育研究会社会科部夏季研修会「与謝地方の地域教材について」講師森島係長
- 28 京都府埋蔵文化財研究会「京都府の7世紀」(於：龍谷大学)担当幹事当調査研究センター、「亀岡盆地における遺跡の動向とその背景～7世紀を中心として～」講師名村調査員

編集後記

真夏の更新が続いた残暑厳しい夏の名残がおわり、ようやく過ごしやす季節になりました。ここに『京都府埋蔵文化財情報』第147号が完成しましたので、お届けします。本号は、報告文1編、研究ノート3編、共同研究2編、資料紹介1編など充実した内容になっておりますので、ご一読いただきますようお願いします。

今後ともみなさまのご指導・ご鞭撻をよろしくお願いします。

(編集担当 肥後弘幸)

京都府埋蔵文化財情報 第147号

令和6年9月30日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>



印刷 三星商事印刷株式会社
〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
Tel (075)467-5151 Fax (075)467-5152



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER